

研究報告
1996年9月

銀座座会
—銀座の仕掛け—

財団法人ハイレイフ研究所

銀座座会メンバーリスト

座長	長谷川 文雄	東北芸術工科大学デザイン工学部情報デザイン学科教授
	荒井 良雄	東京大学教養学部人文地理学研究室教授
	石丸 雄司	銀座通連台会事務局
	井上 明	東京都企画審議室調整部課長補佐
	三枝 進	(株) ギンザのサエグサ取締役社長
	島田 一郎	(株) フォルマ代表取締役
	高橋 利枝	(株) 文化科学研究所都市研究部研究プロデューサー
	長澤 忠徳	東北芸術工科大学助教授
	野口 孝一	中央区立築地社会教育会館郷土資料館、 東京都中央区文化財調査指導員
	前田 博	(財) 環境文化研究所主任研究員
	保田 武宏	元読売新聞社編集委員
	橋本 都子	横浜国立大学講師、(財) ハイライフ研究所非常勤研究員 (記録・編集・構成担当)
	野中 正美	(財) ハイライフ研究所専務理事
	中西 淳博	(財) ハイライフ研究所常務理事

(順不同・敬称略)

目次

- はじめに — p.1
- 第1回「銀座・昭和10年—久米正雄と銀座」／三枝進 — p.1
- 第2回「銀座パリ2都物語」／端山貢明 — p.35
- 第3回「若い世代から見た銀座とハイライフに関するイメージについて」
／橋本都子 — p.47
- 第4回「終戦後の銀座・丸の内界隈の思い出」／原田弘 — p.53
- 第5回「田舎者から見た銀座」／長澤忠徳 — p.61
- 第6回「銀座と老舗」／園田榮治 — p.69
- 第7回「関西から見た銀座イメージ」／高田公理 — p.81
- 第8回「原風景としての銀座・京橋」／島田一郎 — p.93
- 第9回「銀座はどのようにして日本橋を抜いたか」／藤森照信 — p.99

第1回 銀座座会

銀座・昭和10年—久米正雄と銀座—

三枝 進

(株)銀座のサエグサ取締役社長

はじめに

銀座座会における私の立場からすると、まず銀座の現状や現在の銀座が抱えているさまざまな問題点を整理して報告することが求められているように思われます。そこで今回の報告もその線に沿ったテーマを考え、実は少し準備もしておりました。

ところが、その作業中に、手元にある雑多な銀座関係の資料の中から、戦前に銀座の多くの飲食店、専門店、百貨店などが作家久米正雄（故人）あてに出した600通あまりのメール類がひと段ボール分出て参りました。このような資料があることを私自身忘れかけていたのですが、ある時期に久米正雄氏のご遺族が処分されたものが、古本屋を通じて銀座資料のひとつとして私のところにやってきたものと思われま

す。このDM類をざっと整理してみますと、そのほとんどが昭和5年頃から10年頃にかけてのものであります。ご承知のとおりこの時期は昭和の恐慌といわれた昭和初期の世界的な大不況からわが国がようやく立ち直りをみせ戦時色が次第に色濃くなり始める昭和11年頃までの間の、東の間の平和と経済的成長を謳歌することが出来た時期にあたります。そしてこの時期はまた、本格的な大衆消費時代をバックに、盛り場としての銀座がひとつの大きなピークを迎えた時でもありました。今から考えればまさに「グッド・オールド・デイズ」だったわけですが、久米あてのDMは丁度この時期に銀座から発進されたものであります。従ってこれを少し分析しまとめてみれば、あるいは現在の銀座を理解し、これからの銀座、ひいては新しいライフスタイルを考える上で、多少のヒントが出てくるのではないか、と思われました。

実は、少し前に銀座三丁目の商店主の皆さんと。改めて銀座の歴史を見直してみようという主旨で、3回ほど勉強会を開いたことがありました。江戸時代から始めて順次明治、大正、昭和戦前、昭和前後と銀座史をたどったのですが、歴代年表的な勉強では面白くないし、地元の勉強会でもあるので、各時代を代表すると思われる銀座人、時々地域の歴史をリードした人物をとりあげ、その人物像や銀座との関わり合いを調べてみようということになりました。そのことによって逆に各時代の銀座の姿や社会的背景などが具体的に、いきいきとイメージできるのではないかと考えたわけですが、細かいことは本題からはなれるので申し上げませんが、このとき江戸時代を代表する銀座人としてとり上げたのは天明から化政にかけて活躍した戯作者であり、絵師、狂歌師であり、銀座二丁目あたりに自分の店と住居を持つ商人でもあった山東京伝という人物です。明治時代はヘボン博士の弟子として日本で初の本格的な英和辞典を編纂したり、銀座で楽善堂という薬局を開いて、「精錡水」という目薬で大当たりをとり商人として大成功しながら、他方では目の不自由な人の為の施設に協力するなど、多面にわたる社会活動を行った異色の人物、岸田吟香を選びました。大正時代は福原信三です。資生堂の創立者福原有信の三男で銀座に生まれ育ち、アメリカに留学ののち資生堂の経営を引き継ぎ、大いに事業を發展させた人物ですが、同時に建築、絵画、写真などの分野にもその能力を発揮し、特に日本の芸術写真運動の草分けの一人としてその写真作品は現在も高い評価を得ております。また、当時の資生堂は商品デザインと企業広告にレベルの高い新風をもたらし、大正から昭和初期にかけての「モダン銀座」の洗練されたイメージを鮮明に具体化し、銀座の格調を高めることに大いに貢献しております。しかし次に昭和の銀座を代表する人物は、となつてハタと困りました。結論から言うと昭和の人物論はやらなかったのです。もちろん昭和時代の銀座にも街の中に名物男は多かつたし、のちの銀座の發展に貢献した方もたくさんおられたわけです。しかしよく考えてみると、もう昭和という時代になると、銀座の中から誰かを代表させるような時代ではなくなっているのではないか。それよりむしろ銀座に來られる沢山の来街者、お客様とのかかわりの中で銀座を考えざるを得ない時代ではないかと思えたのです。もともと商店街、盛り場という所は地元の商人たちの努力だけで發展するものではない。来街者、お客様と地元との関係の中で伸びて行くものであり、街の性格も決まってくるものではないでしょうか。従って特に大衆消費時代を迎えた昭和期の銀座を理解するためには、街の側からというよりむしろ、お客様がどのような楽しみを求めて銀

座を訪れ、どのように銀座を利用したのか、つまりお客様の側から街を見ないと本当の姿が出てこないのではないかと、当たり前なことかも知れませんが、そのことを実感しました。

前置きが長くなりましたが、以上のような体験もあって銀座のよきお客様の一人であった久米正雄の側から最盛期の銀座を見ることはかなり面白いかもしれないと考え、急遽本日のテーマで話をさせていただくことに決めてしまったわけです。

昭和10年頃の銀座の状況

まず、久米正雄がしきりに銀座を訪れていた昭和10年頃の銀座の街は全体としてどのような状況であったかについて少し説明させていただきます。

関東大震災

大正12年の関東大震災によって明治初期以来ずっと銀座の基本構造であり続けたレンガ造りの建築群は震災と火災によってほとんど全滅してしまいました。それと同時に銀座躍進の源であったといえる明治の文明開化の時代も終わりを告げたのだと思います。この時東京のどの街も、銀座と等しく大きな被害を受けたことには変わりはないのですが、銀座における煉瓦街の崩壊には東京の街における明治の終焉という意味でひととき象徴的なものを感じられます。

震災後の復興

—バラック建築と本格的な復興—

震災後の立ち上がりという点では銀座は非常に素早いものがありました。その大きな原因のひとつに当時の銀座の街の結束、商店の団結の強さを挙げることが出来ると思います。大正8年にすでに銀座では銀座通りの商店を中心に京新聯合会（現在の銀座通連合会の前身）という、しっかりした商店の連合組織が出来上がっており、当時の新聞報道によりますと、この会を中心に銀座の商店は震災2ヶ月後の11月10日を期して一斉に商売を再開しようと申し合わせています。この時、銀座地区にニョキニョキと出現したのがバラック建築群です。もちろん木造の粗末な建物ではありましたが、大工さんや工務店が取り急ぎ掘立小屋のようなものを造るというのではなく、かなり高名な建築家や、それまで建築などを手がけたこともなかった画家や、考現学の今和次郎を中心としたバラック装飾社のブループなどが実に自由奔放なアイデアや意匠で、やりたい放題にこれらのバラックを造りました。おそらく注文する店主の方もどうせ一時の仮の店舗だから、ということで思い切って任せたのでしょう。十字屋も御木本も越後屋もカフェ・キリンなどもそれぞれ奇抜なバラックの建築を建てています。丁度このころはヨーロッパなどで起こった新しい建築の流れ、たとえば分離派の運動などが日本にも入ってきた時期であり、銀座はこうした新しい建築をめざす人々の良き実験場となった感もあります。こうした当時の先端的なデザイン破天荒な建築に誘われて若い人々を中心に多くの人々が銀座に集まりそれが銀座の復興に大いに寄与したといえるかも知れません。

このバラック時代の後に本格的な復興がありました。大きな会社や団体はバラック時代を経ないでいきなり本建築を建てておりますが、数を調べてみると、それは大変少ないことがわかります。大体が仮営業所、バラックの時代があって、昭和の初めに入ってから本格的な建物ができてきています。この時期に後藤新平の、区画整理事業を基本とした帝都復興計画が大いに進行をみるわけですが、銀座地区については区画整理そのものは煉瓦街建築の時にあらまし出来上がっておりましたので現在の晴海通りが拡幅されたり、昭和通りが完成したりした程度で、基盤整備が出来たのちには旧来の街区に次々と本建築が立ち上がって行ったわけです。

銀座における復興建物の立ち上がり状況を示すひとつの資料として清水組（現在の清水建設）が大正12年から昭和15年にかけて銀座地区に建設した主要な建物の年別内訳表（P.9 資料1参照）を作ってみました。ひとつの建築会社が銀座という限られた地区に建築したわずか33件の建物のうち17件が集中して建てております。清水組が手がけたもの以外の建物を含め、大体この時期に銀座の新しいランドマークと言えるような建物が造られており、これらが昭和銀座のフレッシュなイメージを作り出していったと思います。具体的な建物名をあげますと、例えば朝日新聞社、瀧山町ビル、資生堂、銀座教会、泰明小学校、交詢社、伊東屋、三越銀座店、日動火災、日劇、服部時計店、教文館、電通、大日本麦酒のビルなど数多くの建物がこの時期に集中して出現し、銀座の全く新しい風景を構成しています。

デパートの参入

震災後の銀座の新しい商業の流れとして地元大きな影響を与えたのが銀座地区へのデパートの積極的な参入でした。最初に進出したのは松坂屋銀座店（大正13年開店）で、日本で初めて「下足預かりなし」つまり売場に土足のまま入れる近代的システムを採用したデパート店舗だったようです。次いで松屋（大正14年）、三越銀座店（昭和5年）がオープンし、本格的な銀座デパート時代が開幕しました。丁度この頃、わが国では、都市への人口集中が大変問題になり、特に東京への人口集中とこれに伴う東京圏の膨張ぶりは大変なものがあり、大正9年に335万人であった東京市の人口が昭和5年には495万人に急増し、いわゆる大衆消費時代が出現しています。こうした傾向をバックにデパートはこの時代大いに発展しそれまで味わうことのできなかった新しい都市の楽しみを提供しはじめたわけですが、銀座の三つのデパートも大人気を呼んでいます。

それまでの銀座には、専門店しか存在していなかったのですから、デパートがそこに参入して大規模なスペースや豊富な商品を武器に新しい販売促進やサービスを展開すると、消費者にとって今までの専門店にはないパワーと新鮮さが感じられたことは当然でした。当時の銀座のデパートは実にさまざまな販売策をとっていますが、たとえば有楽町駅や新橋駅との無料送迎バスを運行したり、営業時間もかなり長くしていました。松屋の例をとると、昭和5年頃の中元、歳暮期には朝8時30分に開店し、夜9時まで、つまり一日の営業時間は12時間30分となっています。ただ面白いことに当時のデパートの営業時間はかなり弾力的で、夜9時まで営業する予定であってもその日に雨が降ると、急に6時で店を閉めたりもしていました。ですからその頃のデパートの営業案内のパンフレットなどを見ますと、住所や電話番号は当然書いてありますが、営業時間を書いていないものが多いのです。また屋上庭園も、それまでにはなかった憩いと眺望の場として人気の的となりました。

銀座でデパートが積極的に商売をはじめますと、やはり地元の既存の商店との間にかかなりの摩擦が生じました。しかし銀座の場合はこの摩擦や抗争がどうにもならないほどの深刻な状態に陥ることはなく、大体デパート側が行きすぎた行為を自粛して地元と協調をはかる、というかたちで共存をめざす方向が打出されています。地元の商店もデパートの進出によってつよい刺激を受けたことは事実で、大資本と熾烈な競争の中でそれまでののんびりした体質を改め、それぞれが新商品や新サービスの開発を考え実行する店も多くなり、結果的にはデパートと地元商店が互いに切磋琢磨して努力をした結果、銀座に新しい活気をもたらすという良い傾向が生じたといえるように思います。

関西商法の進出

もうひとつ、この時代の銀座に顕著なことは、関西の資本（主として風俗営業）と関西の料理がかなり大規模に銀座に出てきたということです。まず、キャバレー、カフェ、バーなど夜の銀座の部分に関西資本、関西商法が進出してきました。たとえば大阪に当時「赤玉」というキャバレーを開いて成功したといわれる榎本正という人物が銀座に目をつけて「美人座」「銀座会館」「メトロポリタン」などというキャバレーを次々にオープンしています。銀座2丁目の「銀座会館」は「クロネコ」という東京系の有名なカフェを買収してキャバレーにしていますが、いずれもかなり大規模なものです。関西流の風俗営業というのは非常に露骨で、いわゆるエロ・グロ・ナンセンスを売り物にしているわけですから、それまでの銀座の雰囲気とは全く異質なものを持ち込んだことになり、一時は騒然たる話題を呼び起こしました。しかしこうしたやり方はある程度東京の大衆の支持は得られたとはいえるものの、銀座の顧客の主流を占めるインテリ層にはなじまず、むしろ銀座には全くふさわしくない業種、商法であるとして銀座の内外から批判や非難をあげるが多かったようです。昭和11年以降、戦時色が次第に強まるようになったこともあって、関西系のキャバレーなどは段々影をひそめるようになり、結果的には銀座に定着することはありませんでした。

それからもうひとつは関西料理。これは風俗営業と違って銀座で本当に成功しました。それまで銀座の料理屋は当然ながら江戸料理系でしたが、格式ばって入りにくい、一見の客は歓迎されない、料理屋側で全部献立を決めてしまい、しかも、フルコースしか選択できない、従って時間はかかるし料金もかなり高価であるといった傾向が強く、客の方でも料理屋に入るには一種の腹づもり、覚悟を決めて入らなければならなかった。これに対して、関西料理の店はカウンターなどで気軽に一品料理を頼めるし、値段も安い。味もうす味で家庭料理風だし、新しい食材や調理法をどんどん取り入れて工夫をこらした料理を出す。その上非常に気さくで、もてなし上手であるということで、これは銀座のインテリ、文化人たちにも大いに受けました。その結果、関西料理、関西割烹はたちまち銀座に定着して旧来の江戸料理系の店をどんどん駆逐してしまいます。（もちろん天ぷら、鰻、鮎の店、洋食店のどは残っております）しかしここで注意したいのは、銀座における関西割烹料理の成功は、決して関西料理や関西風のもてなしをそのまま銀座に持ち込んだのではなかったと考えられる点です。関西の良さを生かしなが

ら、非常に努力をして東京の人に合うような、銀座の水に合うような料理を出したり、サービスを考えたりして、銀座商法として通用するように意欲的に、弾力的に商売を変えていったことがおそらく成功の大きな原因だったと思います。当時の料理系関係の雑誌などを見ると料理の中身も関西とはだいぶ変えた店が多いといった記事がかなり見られます。

こうして関西割烹の多くが銀座に定着してゆくのですが、この新しい西からの風、関西の仕掛けが当時の銀座を変え、新しい客を銀座にもたらした効果はかなり大きかったといえるでしょう。そしてこの時期、たまたま銀座が震災復興期で、商店の出入りも多く、関西から進出できるスペースもかなりあったこと、銀座という街に排他的な気風が少なく、銀座商法に反することがなければどんどん新しいものを受け入れた上で、次第に銀座に同化してゆく力を持っていたことが、関西割烹の定着にプラスしたことも確かだと思えます。

地下鉄の開通

東京の地下鉄は昭和2年にまず浅草—上野間が開通したのを皮切りにどんどん西へ伸びてゆき、昭和9年に新橋まで開通、浅草—渋谷間の、現在の銀座線が全通するのは昭和14年のことです。つまり銀座へ行くのに地下鉄が本格的に利用できるようになったのも昭和10年前後のことであり、これを機に銀座の来街者も大巾に増加したものとされます。メトロというモダンな都市交通機関が一番に合ったのも、多分銀座の街でありました。

また、この頃銀座の街の内部や周辺に映画館や劇場がかなり沢山オープンして、銀座は盛り場としてひろがり厚みを益々大きなものとしています。

柳の復活

銀座通りに柳が復活したのが大正7年の春です。明治から大正の初めにかけて銀座のシンボルとなっていた柳ですが、大正10年、当時の東京市の都市計画が銀座にも及び、銀座通りが改修された際、銀座の地元の人々や銀座を愛する人たちの反対を押し切って柳が抜かれ、代わって東京市の指定樹種である公孫樹（イチヨウ）が植えられました。しかしこれは誠に評判が悪く、地元の反対運動はその後も根強く継続され、これがついに東京市を動かして、柳の復活が約10年ぶりに実現したわけです。この時、柳を地元へ寄付したのが朝日新聞社でありました。余談になりますが、大正10年、丁度柳が抜かれた年に、資生堂から私家版の『銀座』という本が出版されています。これは当時資生堂の社長だった福原信三の企画によるもので、銀座について書かれた古今のさまざまな歴史、記事、文芸作品などを集めた一種のアンソロジーですが造本も美しく、現代でも銀座本中の白眉とされる書物であります。そして福原信三がこの本の企画をする大きな動機のひとつに、役所が銀座内外の人々の心情をかえり見ず、銀座通りの柳を抜くことに対する抗議の気持ちがあったといわれております。無粋なことをする相手にわが街の歴史や、変えたい個性や、街を愛する心情を綴った美しい本を造って黙って呈示するとは何と「銀座的」な抗議のやり方であろうか、と感心するばかりです。

モダニズムの銀座・銀ブラの全盛時代

以上が昭和10年頃の銀座の概況ですが、今考えてみましてもこの時代の銀座は非常にダイナミックに動いていたという印象が強い。激変しながらも盛り場としてぐんぐん幅と厚みを増すと同時に、当時の他の街や盛り場には絶対に存在しないような個性と雰囲気を出して行った時代です。当時この街に起こることが結果的にはすべてよい方向に循環して、銀座が盛り場として絶頂期を迎えたのが昭和10年頃といわれるのも、もっともなことかもしれません。とにかくこの頃の銀座がほかに比較するものがない、絶対的な存在になっていたことは確かでしょう。

その銀座の全体をひとことで表現すれば「モダニズムの銀座」という言葉でくくることのできるかもしれません。大宅壮一が『中央公論』昭和4年2月号に書いた「モダン層とモダン相」によればモダニズムというのは要するに時代の先端を意味しており、しかもそれは決して生産的なものではなく、むしろ非常に消費的なものであり、論理的というよりは極めて感覚的な満足を目指すものだ、とのべています。そしてモダニズムを支えている階層は没落した中産階級であるところの有職無産階級で、彼等は「西洋映画とスポーツとカフェの中に喜びを見いだすのである」としています。たしかに当時の銀座は欧米の流行に敏感で、自動車に象徴されるようにスピードを重視し、感覚的で利便的なモダンライフのシンボルであったといえます。大宅壮一が言うところの有職無産階級で、西洋映画とスポーツとカフェをこよなく愛した作家久米正雄が銀座ブラ族やモボ・モガとともに闊歩したのは、まさにこのような

銀座でありました。

DMから見た久米正雄と銀座 —銀座の利用者としての久米正雄—

初めにおことわりしておきたいのですが、ここでは当然ながらあの高名な作家としての久米正雄をとり上げて、その作家論や作品論を展開しようというわけではありません。銀座のかなり多くの店が久米正雄あてに出したDM類を整理してやることによって、昭和5年～15年にかけて大いに銀座を利用した一人の文化人あるいは銀座にとっての上顧客の一人が、どのようにこの街を使いこなしていたかを少しさぐってみよう、またそれによって先程申し上げたような絶頂期の銀座の状況を具体的に検証できるかもしれないと考えての小さな試みにすぎません。

しかしながら、当時の銀座顧客の典型として久米をとり上げる以上、やはりその略歴は必要と考え、ごく簡単にまとめた略歴表(P.10 資料2)を作ってみました。これでおわりの通り生まれは長野県上田町(現上田市)で、父は学校の先生でしたが、自分が校長をつとめていた小学校が火災で焼けた時、飾ってあった天皇陛下の写真を焼失してしまったことに責任を感じて割腹自殺をとげたということです。その後、久米は福島県安積郡の母方の実家に移り、地元の安積(あさか)中学校を出てから入京し、一高(英文科)に無試験(推薦)で入学し、東京帝大英文科に進学しています。中学在学中にすでに俳句で頭角をあらわし、一時は俳句で身を立ても考えたといわれており、事実、俳句は一生を通じて手がけ、三汀という俳号で句集も出版していますが、大学では芥川龍之介、菊池寛と同級でその影響から、戯曲、小説に力を入れはじめ、第三次「新思潮」の創刊と同時に同人として参加すると共に、夏目漱石に師事、在学中に書いた戯曲「牛乳屋の兄弟」が有楽座で上演されたり、処女作の「父の死」をはじめ小説でも多くの力作を発表しています。しかし大学卒業後、漱石の長女筆子への一方的な恋いが破局を迎え、このことが以後の久米の人生や文筆活動に決定的な影響を与えたといわれています。

その後の久米の作品は、純文学というよりかなり通俗性の強い作風に変化してゆき、甘美な哀愁につつまれた文章が当時の女性読者に受けて一躍人気作家にのし上がって、経済的にも成功をおさめたようです。大正11年に奥野艶子と結婚、その後本郷から鎌倉へ移り住み、いわゆる鎌倉文士の一人として自ら文壇の社交家をもって認めるようになり、華やかな話題をいろいろ提供しています。また仲間や後輩の面倒を良く見たようで、文才だけでなくリーダーとしての資質も持っていた人物だと思われます。第二次大戦中は日本文学報告会を組織して事務局長をつとめ、戦後そのことで批判されたりしていますが、戦前には破滅的な人生や極端に非常識な生活をする人が多かった文士たちの中では、むしろきわめて健全な常識人で、この人が仮に事業をやったとしても、サラリーマンになったとしてもかなり成功したのではないかと思います。以上ざっと略歴を申し上げましたが、地方出身で一高、東大のエリートコースに進み、若いときから文学的才能を発揮して認められ、派手な失恋事件をおこし、文筆家として脚光を浴びながら経済的にも豊かな人生をおくり、趣味の面でもゴルフ、マージャン、ダンス、一中節(邦楽)など多彩なだけでなく素人ばなれしていると称され、鎌倉に住んで銀座で遊ぶ、というのは当時の東京人にとってある意味であこがれの人生だったでしょうし、こうしたタイプの人が当時の銀座の良き顧客の典型であったと思います。

久米正雄が利用した銀座の店

最初にお話ししたように久米あての銀座のDM約600通を整理してリストにまとめてみたのが「資料3:久米正雄が利用した銀座の店」(P.11～19)です。勿論久米も銀座だけでなく、神田や上野、浅草、赤坂、新宿などへも行っておりますが銀座の利用率が圧倒的に高いようです。また久米は有名人ですから銀座の色々な店から「ぜひ一度いらして下さい」という勧誘のDMも多いし、よく利用する店からは何通もDMや連絡書類がいつておりますので、約600通のDMが現実に利用した600軒分にあたるということではありません。そのあたりをDMやそこに書きそえられた文言などから判断し、間違いなく利用したと思われる店をリストアップし、更に特に愛用、常用したと思われる店は店名をゴシック体にして区別してあります。このリスト(資料3)は一応飲食店の部と専門店・百貨店の部とに区別してありますが、ごらんの通りデータとしてはまだかなり穴が多く、不完全なものですし、本来はこの店名リストを当時の銀座の地図に落としこんでみると、かなり分かりやすく臨場感のある資料になると思いつながら、今回は時間がなくて実現できませんでした。

リストの内容を見てみましょう。まず、「飲食店の部」をみますと、洋食系よりも料亭、割烹などの日本料理が圧倒的に多いようです。全体として当時の大変筋の良い評判の高い店を利用しているのはさすがです。

古くから銀座にあった店としては「花月」「米田屋」「大竹」「はせ川」「はち巻岡田」「中島」にはよく行っているようですが、これらはほとんど江戸料理系の店で、「はち巻岡田」は水上瀧太郎、泉鏡花、久保田万太郎、近ごろでは山口瞳など多くの俳優がよく集まる場所として有名であり、水上は震災後の「はち巻岡田」の主人の奮闘ぶりをテーマに小説「銀座復興」を書き久保田万太郎が脚色をして六代目菊五郎がこれを舞台にのせており、ごく最近でも文学座が上演しています。これ以外の料理店はほとんどが関西料理の店で、数からいえばこちらの方がはるかに多いことがわかります。これをみても当時の銀座では新たに出店してきた関西料理が大いに流行し、東京の人たちが競って関西割烹の出かけで行った様子が読みとれます。この関西割烹の中でも関西料理ブームをまきおこした両横綱は「出井」と「濱作」で、(久米は濱作には行っていません)両店とも今ではすっかり銀座の老舗として定着しています。「出井」の主人出井豊三郎は大阪今橋の高級料理「つる家」の出であり「濱作」の主人塩見安次郎は大阪北新地「濱作本店」から、のれん分けのような形で東京に出てきたようです。村岡實「出井と濱作にみる銀座風俗」(雑誌「銀座文化研究」第4号所収)によると、昭和10年7月に「出井」で、吉井勇、徳川夢声、川口松太郎、平山蘆江などの座談会が開かれ、その時の献立は次の通りだったということです。

- < 向 > 瀧川豆腐、すりゆ。
- < 吸物 > すっぽん、白みそ、めねぎ。
- < 造り > 干しかれい生チリ、さらしねぎ、紅葉おろし。
- < 焼物 > かれい石焼、銀杏。
- < 煮物 > かやくそうめん
- < 大皿 > 鯛頭山椒焼
- < 留碗 > ぐじ船場煮
- < 果物 > メロン

これをみてもいかにも関西らしい材料を関西風にアレンジしてうまそうですが、特に鯛の頭の山椒焼は「出井」の大ヒットメニューとなりました。

また「濱作」でどんなしゃれたお通しが出るのかと期待していると、お酒と一緒に芋の上にうずらの卵が載っているのが出てきた。たいしたものでもない思いながら箸でかき回してみると下にこのわたがしのぼせてあり、なるほどこういう工夫で左党を喜ばせるのか、と感心したという話も紹介されています。

あと和食で久米がよく利用したのが「おけい寿司」で、この店は銀座の有名なカフェ「タイガー」の女給が独立して開いた店として、また北大路魯山人の息のかかった店として話題となり、「タイガー」の客がひいきにしましたが、ここのアワビの鮓が1個20銭というのは当時べらぼうな値段でした。

洋食のレストランの方は省略しますが良く利用したと思われる「モナミ」は永井荷風の「断腸亭日乗」にもしばしば登場する店です。

次にカフェ、クラブ、バーなどですが、久米正雄に限らず当時の文化人たちは銀座のカフェ、バーに毎晩のように集まり、時には大いに談論風発し、時にはハメをはずして大げんかを繰り広げるといったシーンが見られました。そしてこのような集まりを当時の文学青年や新聞記者たちがとりまき、翌日にはその夜の話題がたちまちゴシップとなって飛び交い、それがまた銀座に人を集めることにつながりました。久米も当然このような仲間の中心人物のひとりであったようです。通ったカフェやバーの数は驚異的といえるほど多いわけですが、銀座の夜の世界ではとりわけ「カフェブランタン」「カフェライオン」「カフェタイガー」が有名で文化人たちを引きつけており、久米もこの辺を中心に飲んでいたと思われます。ここに「カフェライオン鼻つまみ番附」(資料4 P.21)という奇妙な番附があります。「カフェライオン」は銀座4丁目交差点の角(現在の日産ショールームのある場所)にあり、大正末から昭和初めにかけて大いに繁盛したカフェですが、次第に新興の「タイガー」や「クロネコ」に喰われて昭和10年頃には本来の機能を失っています。この番附は『銀座細見』を書いた安藤更正がごく内々に編集発行していた雑誌『銀座』の大正14年8月号に掲載されたもので、ご覧の通り当時「ライオン」に集まってきた有名人たちを「鼻つまみ度」の高い順に相換番附にならって構成したものです。今読んでみると誠に他愛のないものですが、当時の人たちは大の大人でもこのような「遊び心」や「洒落っ気」をもっていて面白おかしく遊んでいたわけです。今、こうした「遊び心」がなくなってしまったことが銀座をはじめとする盛り場をつまらないものにしていないのでしょうか。この番附では久米は西の前頭12枚目にランクされています。カッコ内はなぜ鼻つまみなのかという理由なのですが、奥さんをつれて女給と遊びにくる嫌な奴、ということです。事実久米は奥さんをよく銀座に連れてきていたようでカフェの他にも麻雀倶楽部やダンスホールで夫婦で楽しむことも多かった様子です。これも当時としては大変新しく、進んだ銀座の利用の仕方です。

続いて「小売専門店・百貨店の部」について少し説明します。久米の物品販売店の利用の仕方は飲食関係の店の利用法とは大分違っているようです。つまり飲食店の方はその時代の先端に行く店、大正の時代から長い間商売を続けている、老舗といわれるような店を選択しております。非常に対照的だと思います。そしてこの使い分けは当時の銀座の店の使い方として大変賢いし見事なものです。但しそのころのめざましい発展をはじめていた百貨店では、松屋を中心として実に頻繁に買い物をしています。さて、これらの店でどのようなものを買いためたということはDM類からは必ずしも判然としませんが、それでも特徴的なことが二つほどあります。ひとつは和装と洋装をうまく使い分けていることですが、これは当時の一般的な日本人の生活の中で、特に衣生活についてはむしろ和装が中心であり、洋装は男性と子供が取り入れる程度であったことを考えると、久米家では洋装をかなり積極的に使いこなしていたという方が正しいかもしれません。もうひとつはその頃の家庭ではほとんど購入しなかったのではないかと考えられる新製品、たとえば家庭電気器具（電気冷蔵庫など）やピアノ、ゴルフ用品などを買い求めていることです。しかもそれらの高額商品の購入にあたっては、当時はほとんど利用されていなかったと思われる月賦払いを採用しています。このようなことから考えると、久米本人あるいは久米家は新しいものをどんどん取り入れて、当時の消費者としては極めて進歩的な消費活動をしていると思います。そしてこのような新しいライフスタイルと消費性向を持つ人々にとって銀座こそ最も便利に利用できる街であったといえるでしょう。

久米正雄と銀座の文化サロン

久米は銀座にいくつかのインフォーマルな文化サロンを持っていたようです。その第一に挙げられるのが巴里会です。このサロンは銀座六丁目のみゆき通りに面した尾張町ビル（現存）に事務局がありました。文化人を中心とするかなり大規模なサロンで、入会資格はパリに留学、遊学した経験のある人、あるいは旅行したことのある人となっています。従って文学者よりもむしろ画家、映画人、芸能人などが多かったと思われます。おもにクリスマスのパーティーや松竹撮影所の見学、コンサートなどを開いております。また「みゆき通り」という通り名を発案したのも巴里会だったようです。命名の由来は明治天皇が皇后から築地にあった海軍大学校に行幸される時、必ずこの通りを経由して行かれたということ特に明治45年の明治天皇の最後の行幸が通ったことにちなんでおり、この通りに商店の人たちの同意を得て昭和10年に正式な通り名としています。この時同時に「みゆき通り美化会」（現存）という通りの商店会もスタートしております。

次に久米はわが国のカフェの草分け的な店である「カフェブランタン」で画家、作家を中心として開いていた「十四日会」というサロンのメンバーでもありました。また割烹「はせ川」での句会「はせ川句会」にも出席し、岡田三郎助、和田三造などと図って「二十八日会」という芸術家の親睦会をつくり、毎月28日に料亭「花月」で会合を開いたりしています。

更に夫婦そろって麻雀やダンスが好きだったらしく、銀座の麻雀クラブやダンスホールにも現れ同好の士と楽しんでいました。

このように久米だけに限らず昭和10年頃の銀座では文化人たちがさまざまな文化的なサロンを形成して活動しており、これが銀座の文化的活力を強めたり、独自の雰囲気をつくり出す大きな源となり、情報発信力ともなっていたと考えられます。現在こうした銀座の文化的サロンが崩壊してしまっていることが、銀座の味をうすめてしまった原因のひとつではないでしょうか。

客と店の良き関係

以上久米正雄を昭和10年頃の銀座の上顧客の典型と考え、その銀座におけるビヘイビアをDM類をもとにお話ししましたが、およそ学術的とはいえないひとりよがりな雑駁な話となってしまいましたことをおわびします。蛇足ながら最後に銀座における客と店との関係についてお話しして終わりにしたいと思います。

当然ながら買物にも実にさまざま形態があります。その一番単純な形は自動販売機かもしれませんが、これは対面販売ではありません。しかし昨今の状況を見ると味気のない商売のやり方が増えているような気がします。

これはとても残念なことで、これでは買い物を楽しむ余地はほとんどなくなってしまいます。やはり買物はかなり高度な「大人のゲーム」でなくては面白くないのではないのでしょうか。高級専門店の場合、特にこの事が大切ですが、「大人のゲーム」が成立するためにはまずお客と店の双方に信頼関係がなくしてはなりません。たとえば戦前の銀座の本当に良いお客様はめったに店には来られず、使いの方が来る、あるいは手紙や電話で注文されるわけです。すると店の番頭が品物を見立てて自宅にお届けするので

が、その時勿論代金はいただかず、どんな高価な商品でも平気で預けて参ります。何千万もする宝石類でも置いてくるのですが、事故はまず起こらない。お互いにゆとりがあり、相手を尊重するという関係があるわけです。もっともこの関係を商人の方では悪用することもあって、売り上げの悪い月など担当の番頭が風呂敷包みに一杯の商品をかついで行って顧客の家にボンと置いて「おひまな折りにでもご覧下さい」などといって帰ってきてしまいます。客の方も心得たもので、仕方がないから数点の商品を選んで後は返してしまう。しかしこうしたことも度を少しでも越えたら、場合によっては出入り禁止になります。信頼関係を損なわない範囲でやるわけです。

次に大切なのは「間」です。よいお客様と熟練した商人のやりとりを見ておきますと、実に絶妙な間の取り方をしているのに感心します。永年のおつきあいですからお客様も十分商品知識や価格感覚を持っていますが、プロである商人の領域には意識して踏み込まない。もしもそこまで踏み込んだら品が悪くなる。同業者同士の話合いみたいになってしまいます。商人の方もそのお客様のタンスの中身や家族のプライバシーまで知っているのですが、かなりきわどい話まではしてもギリギリの所で引揚げます。しかも商人の方では別のお客様が見えればまた違う間合のとり方を考えるのです。

このような関係が成立しますと、買い物というのもずい分高度で人間的なゲームになると思うのですが、どうも最近では世間がせわしくなく、世知辛くなったせいも、こうした買い物を楽しむ傾向がなくなりつつあるのはさびしいことです。これがどんどん進んでゆくと銀座の商業文化はどうなってしまうのか、危機感を持たざるを得ません。

以上
(文中敬称略)



さえぐさすすむ 1937年生まれ(東京・日本橋) / 1960年慶應義塾大学経済学部卒業、大倉商事株式会社入社 / 1965年株式会社ギンザのサエグサ及びサエグサビル株式会社取締役社長に就任、現在に至る / 銀座文化史学会会員、銀座通り連合会会員

資料 1

〈関東大震災（大正12年9月）以降、昭和15年までに清水組（現・清水建設株式会社）が銀座地区に建築した新築建物の年別内訳（竣工時基準）〉

（資料提供：清水建設株式会社）

大正	12年	～	1件	（但し、仮営業所）	
	13年	～	5件	（但し、内2件は震害後復旧工事）	
	14年	～	0件		
	15年	～	1件		
昭和	2年	～	1件		
	3年	～	5件		
	4年	～	5件		
	5年	～	2件		} 17件（51.5%）
	6年	～	5件		
	7年	～	1件		
	8年	～	1件		
	9年	～	1件		
	10年	～	1件		
	11年	～	1件		
	12年	～	0件		
	13年	～	1件		
	14年	～	1件		
	15年	～	1件		
合計			～	33件	

参考資料

〈昭和2年～9年に竣工した銀座地区主要建物〉

- 昭和2年 ～ 朝日新聞社
- 〃 3年 ～ 瀧山町ビル、資生堂
- 〃 4年 ～ 銀座教会、泰明小学校、交詢社
（数寄屋橋、三原橋）
- 〃 5年 ～ 伊東屋、三越銀座店、新田ビル
- 〃 6年 ～ 日動火災ビル、銀座ビル、越後屋
- 〃 7年 ～ 服部時計店
- 〃 8年 ～ 日劇、教文館、米田屋
- 〃 9年 ～ 日本電報通信社（電通）、大日本麦酒

資料 2

久米正雄略歴

小説家、劇作家 明治24年(1891)～昭和27年(1952)

- 明治24年(1891) 長野県小県郡上田町(現・上田市)に生れる。
父由太郎は、教育家、母幸子は米沢藩士の娘。
父死後、母方の実家、福島県安積郡桑野村に移住。
- 明治28年(1905) 安積中学入学。教頭西村雪人の指導で俳句を始める。以後河東碧梧桐の論文「新傾向論」に触発され新傾向俳句を作る。俳号三汀。
- 明治43年(1910) 一高一部乙(英文科)に推薦無試験で入学。同級に芥川龍之介、菊池寛、成瀬正一、松岡譲、山本有三、土屋文明などがいた。「新傾向俳句の新星」とうたわれながら、新傾向俳句界の変調に失望し小説(散文)の道を志す。
- 大正 2年(1913) 東京帝大英文科入学。翌3年、第三次「新思潮」の創刊と共に同人として参加、同誌に発表した戯曲『牛乳屋の兄弟』が認められ、有楽座で上演。
同年、夏目漱石に会い、以後その門下生となる。
在学中に小説の処女作『父の死』をはじめ『手品師』『競漕』『艶書』など力作を次々と発表。
- 大正 5年(1916) 大学卒業。「中央公論」などを中心に好調に作品を世に出す。
しかし同年、漱石の長女筆子への一方的な恋が筆子の松岡譲への傾斜により破局。以後人生に決定的影響を与えたといわれる。
- 大正 7年(1918) 失意して一旦帰郷したが、この年捲土重来を期して上京。
以後みずからの失恋経験を素材とした作品を次々発表し、文名を高めた。
(『螢草』『夢現』『敗者』『帰郷』『破船』など)
作風は次第に通俗性が強くなり、甘美な哀愁につつまれた文章は当時の女性たちの同情と共感を呼んで、人気作家となった。
- 大正 8年(1919) 小山内薫などと国民文芸会をおこし演劇改良運動に参加。
- 大正11年(1922) 奥野艶子と結婚、失恋事件に終止符を打つ。
- 大正14年(1923) 本郷から鎌倉に移住。
以後みずから文壇の社交家をもって認じる。
- 昭和 8年(1933) 朝日新聞に連載小説『沈丁花』を発表。
- 昭和12年(1937) 毎日新聞特派員として英国皇太子の戴冠式に列席。
- 昭和16年(1941) 日本文学報国会常任理事兼事務局長。
- 昭和21年(1946) 川端康成、高見順、中山義秀たちと雑誌『人間』を創刊。
常に文壇をにぎわす存在であった。
- 昭和27年(1952) 病死。享年60才。

(出典：日本近代文学館編『日本近代文学大事典』ほか)

1. 料亭、割烹、日本料理

	店名	店主名	所在地	主たる営業内容	店の特徴その他
1	花月(楼)	平岡権八郎	銀座7-4	料亭、料理(すき焼、卓子料理等)	明治時代、新橋花街を代表する料亭であったが昭和期には料理店化。久米は岡田三郎助、和田三造などと「二十八日会」という芸術家の親睦会をつくり、毎日28日に花月で会合を開いた。
2	米田家		銀座7-3-6	待合、料亭	
3	大竹		木挽町8-19	待合、料亭	菊池寛などと時々利用。
4	はせ川	長谷川欽也	銀座7-5-3(出雲橋ぎわ)	東都即席料理、かま飯、おでん	瀧井孝作、佐々木茂索、横光利一、石田波郷などこの店で「はせ川句会」を開く。
5	はち巻岡田		銀座5-1-7	季節料理(江戸前)	現存(銀座3丁目)
6	中嶋	中島貞次郎	銀座6-2-13(交詢社横)	季節料理	北大路魯山人経営の星ヶ岡茶寮の料理長だった中島氏が銀茶寮を経て独立、昭和7年3月開店(現存)
7	美可登		銀座1-6-3(皆川ビル隣)	小料理	関西系
8	いせ甚	伊勢蓼吉	銀座西6-4-4	鰻のきも小料理	昭和7年4月16日開店、松山省三などが後援。
9	尾上		銀座6-3-5(松坂屋うら)	即席割烹	
10	あさ岡	浅岡英子	銀座8-3	割烹、小料理	
11	聚楽	清水桂一	銀座5-4-8	新日本料理	
12	銀八		銀座8-4-2	即席割烹	関西系?
13	可ほる		銀座6-3-2(松坂屋うら)	関西割烹	昭和6年開店
14	辰巳家	加藤辰太郎	銀座西5-2-8	生粋大阪料理	昭和5年開店
15	栖鳳		銀座1-6	関西割烹	
16	大隈	林捨三	銀座8-4-2	関西割烹	現存
17	出井	出井豊三郎	銀座西6-2-8	関西割烹	大阪「つる家」で修行した店主が昭和6年11月に開店。現存
18	つるげん	西浜二	銀座6丁目松坂屋うら。のち3丁目	関西割烹	大阪法善寺の小料理屋が銀座進出。昭和6年開店。
19	哥麿		銀座7-3(出雲橋近く)	関西割烹	
20	筑紫	小川せん	銀座6-3	博多料理(水たき、鯛茶)	
21	さくま		木挽町6-5	下関ふぐ料理	
22	入舟		銀座西6(わんや隣)	上方料理	
23	七ふく		銀座8-2-3(資生堂うら)	下関料理	
24	おけい寿し	中村けい	銀座5-4	にぎりずし	昭和7年9月開店。「タイガー」の女給が魯山人の後援を得て開いたといわれ、食器はすべて魯山人の星ヶ岡窯製を使用。アワビのすしが1個20銭ということで東京で1番高い店といわれた。
25	正の家	西浦正子	銀座西7-4-6	すきやき、鍋料理	昭和9年開店。
26	花亭(かてい)		銀座7-3(シネマ銀座うら)	お座敷天ぷら	昭和9年6月開店。
27	久萬崎	熊崎初子	銀座7-4-10	腰掛天ぷら、即席料理	関西割烹の「可ほる」にいた女性が独立し昭和9年12月開店。
28	浪花	柳田とし	銀座5-3	すきやき	
29	いわしや	内藤直茂	銀座西7-4	いわし料理	現存
30	ふくべ		新橋橋詰	おでん	昭和5年開店
31	都乃里	白石都里	銀座7-4	お茶漬處	
32	おでん明石	明石澄子	銀座4-3	おでん	昭和9年11月20日開店
33	太田屋		新橋橋詰	牛鳥料理	昭和6年12月開店

2. レストラン

	店名	店主名	所在地	主たる営業内容	店の特徴その他
1	銀座モナミ		銀座7	フランス料理風洋食	永井荷風なども愛用。一時期鎌倉に出店を持っていた。
2	フロリダ・キッチン		銀座西7	アメリカ風家庭料理	昭和10年10月28日開店。鳥料理「コーノ」のあと。
3	ビー・アール・レストラン	九里四郎	銀座西5(数寄屋橋)	フランス料理	フルネームは「レストランブランエルージュ」
4	コルマン	原田三夫	銀座西6-1	洋食、和洋酒、喫茶	昭和6年12月11日開店。
5	グリル銀座		銀座4-4(服部うら)	ビーフステーキ中心の一品料理	質実な英国風レストランをめざす。
6	エックス	鈴木長治郎	銀座西6	洋食、喫茶、バー	「ビフテキデー」や「漫画似顔絵デー」などを企画。昭和6年3月開店。
7	東京ニューグランド	橋口(支配人)	銀座5-2マツダビル8F	フランス料理	横浜ニューグランドホテル経営の本格派レストランで、昭和9年11月1日開店。
8	アトラスレストラン		銀座3丁目(松屋前)	純米国式洋食、喫茶	昭和6年3月25日開店。
9	銀座ボントン	中川雅雄	銀座西7-1	高級イタリア・フランス料理	文芸春秋社の菊池寛、菅忠雄を中心に大佛次郎、直木三十五、久保田万太郎、久米正雄などが後援して開店、のち「キャノン」と改名。(赤坂「ボントン」支店)
10	レストラン・モスコ	深川久子	銀座3-3(アオキ靴店横)	ロシア式料理、洋酒	バーを改装してレストランとする。
11	サンドウキッチンコート	宮城専太郎	銀座2	サンドウィッチバーラー	旧第二紫烟荘あとに昭和11年11月開店。

3. 中華料理

	店名	店主名	所在地	主たる営業内容	店の特徴その他
1	延寿春		銀座2-3-3	北京料理	
2	羊城亭		銀座西5-5	広東料理	

4. 喫茶店

	店名	店主名	所在地	主たる営業内容	店の特徴その他
1	きゅうべる	道明眞治郎	銀座8-4	喫茶、酒、軽食	永井荷風など文化人が利用した店。
2	コロバン	門倉国輝	銀座6-2-14	コーヒー、フランス菓子	当時の銀座の代表的喫茶店。店主はフランス帰りの文化人で画家、小説家などと親しく、店内には藤田嗣治の壁画などがあった。(現存)
3	銀座喫茶		銀座西8-9(新橋見番B1)	喫茶、軽食	一種の美人喫茶。
4	南蛮茶房		銀座6	喫茶	「高踏的パロワル」と称しヨーロッパ風の本格的喫茶をめざす。
5	ヨシタケ	三浦義武	銀座5	コーヒー専門店	店主のいれるコーヒーが名物。片岡鉄平推薦の店。
6	数寄屋茶廊		銀座西4	日本茶室風喫茶店	昭和9年11月4日開店
7	東京茶房		銀座6(コロバン隣り2F)		昭和9年11月23日開店
8	門		銀座5-5(三原橋際)	純喫茶	よいコーヒーと近代フランス音楽を売物とする高級喫茶。
9	森永キャンデーストア(森永製菓)		銀座5-2		カフェタイガーあとに進出。(現存)
10	ホーエテラス		木挽町3-2(昭和通り角)	喫茶	旧「サロンユタカ」を改築、昭和10年10月10日開店。
11	茶房マーちゃん	恩田まさ江	木挽町3-2	喫茶	
12	カーニバル		銀座西4-5-4	ソフトドリンク	昭和8年4月開店。「ソシアルサロン」をめざす。

5. カフェ、クラブ、バー、酒場

	店名	店主名	所在地	主たる営業内容	店の特徴その他
1	カフェブランタン	松山省三	銀座8-1	洋酒、洋食、喫茶	明治44年にオープンした有名なカフェの草分け。久米は古くからここで開かれている「十四日会」のメンバー。
2	カフェタイガー	岡本	銀座5-2-4	洋酒、洋食	美人女給によるサービスで有名になり、大正～昭和初期の銀座カフェ界の王者となったが、昭和10年に閉店。
3	サロン春		銀座6-4-5(交詢社B1)	洋酒	昭和4年、華やかに開店した、女給中心の大サロン。
4	カフェ・白樺		銀座4-3(三原橋際)	洋酒	女給が売物

5	モンマルトル		銀座西6	洋酒	エロ、グロをさけてカフェの本道をめざす。昭和3年頃開店。
6	銀座サロン		銀座6-2	洋酒、食事	健全サロンを標榜。昭和9年2月1日開店。
7	カフェ銀座会館	榎本正	銀座2-1	洋酒、食事	「クロネコ」あとに大阪キャバレー界の代表の一人榎本正が進出した大型カフェ。昭和5年11月オープン
8	グランドサロン銀座パレス	榎本正	銀座8		新橋博品館の場所に「銀座会館」に次いで榎本が昭和7年9月に開店したキャバレー。
9	ルパン	なつ	銀座西5-5-8	バー	カフェタイガーにいた女性が独立して開業。文化人が多く集まる。(現存)
10	バー・アムステルダム		銀座西5-1	バー	
11	機関車	泉喜三	銀座西6-5	スタンドバー	機関車を模したインテリア。昭和9年11月1日オープン。
12	バーネルケ		銀座4-4	バー	
13	酒場・シラムレン	渡辺きよ子	銀座西5-5-8秀吉ビル	バー	
14	バー・ムーランルージュ	瀧蓮子	銀座西5-5	バー	
15	バー・ジュネット	松井潤子	銀座西7-1	バー	
16	バー・コウジュン	新ばし花香	銀座6-4交詢社ビル1F	バー	昭和7年12月開店。
17	銀座バレー	藤巻運太郎	銀座通り天賞堂前	バー	カフェ・ネロを改名。
18	十番スタンドバー	藤巻運太郎	銀座7丁目亀屋内	バー	食料品店亀屋の直営
19	じゅんバー	杉本富士子	銀座西4-5-3	バー	昭和5年開店。
20	サンファン		銀座	バー	
21	バー・ロマンス		銀座7-4-10(資生堂横)	バー	
22	バー街の灯	山田順子	木挽町4-5	バー	旧名「エロス」
23	スタンド馬車屋	前川蘭子	銀座西2-2(越後屋ビル)	純アメリカ式スタンドバー	昭和7年6月開店。
24	バー・エスパノル	林ますみ	銀座西8-7-1	スペイン風バー	昭和7年6月開店。
25	スペイン		銀座7	スペイン風バー	
26	バー・スコットランド	松本登美吉	銀座西2-1有楽橋会館2F	高級酒場	昭和5年4月30日開店。
27	バー・ハイデルベルヒ	小西柳子	銀座5-3(三原橋際)	バー	「富貴亭」を閉店し、新たにバーを開業。(昭和7年)
28	酒場シルバー・スリパー		銀座5-5-5	フランス風酒場	
29	リッツ・バー	京子	銀座5-4(風月堂前)	バー	昭和9年12月29日開店。
30	バー・波	奈美子	銀座西6(国民新聞社並び)	バー	女性のいるバー。
31	フランスバー	高巢欣也	銀座2	バー	
32	酒場エデルワイズ		銀座2-4	バー	昭和8年10月7日開店。
33	酒場スポーツ	吉田雄紀子	銀座7(シネマ銀座うら)	バー、軽食	昭和5年11月開店、のち「オリエンタル酒場」と改称。
34	すとらんど		銀座西6-1-7	バー	昭和7年11月開店。
35	バージャジャ馬	岡本英子	銀座西5	バー	銀座2丁目の日本酒場「太白」と同経営。
36	タンゴ	戸部順次	銀座4-2(服部うら)	スタンドバー	
37	銀座ゴンドラ		銀座4(銀座三越うら)	バー	
38	尾張町キリンビヤホール		銀座5丁目角(現三愛)	ビヤホール	通称「角ギリ」
39	ユニオン・クラブ	萩原兼顕	銀座1-3	ビール、喫茶	大日本麦酒備直営
40	正宗ホール		銀座4-4-3(服部うら)	日本酒酒場	京都新京極にも店あり。昭和7年開店。
41	酒の店・日本		銀座2-4(明治屋うら)	日本酒酒場	昭和7年12月14日開店。
42	酒寮みすぢ	喜多原直蔵	銀座7-4	日本酒酒場	美寿司銀座店の店長が独立し昭和10年8月16日に開店
43	酒寮菊華		銀座2-3-3	日本酒「菊華」の酒場	
44	山の小屋	後藤俊	銀座西6-1-8	酒、茶	
45	ちょうじ	山田一誠	数寄屋橋朝日新聞社前	酒亭	昭和10年開店
46	バー・朱雀	庄田友彦他	銀座7	バー	昭和4年開店

1. 小売専門店

	店名	店主名	所在地	主たる営業内容	店の特徴その他
1	服部時計店		銀座4-2-6、7	時計、装飾品、洋品その他	現存（和光）
2	玉屋時計店		銀座3-2（松屋前）	時計、装飾品その他	現存（但し婦人服小売）
3	伊勢伊時計店	秦伊兵衛	銀座1-3-4	時計	現存
4	大勝堂	榎野辰蔵	銀座5-1-6	時計、宝石、貴金属	現存
5	大西錦綾堂	大西五郎平	銀座6	時計、宝石、装身具、美術工芸品	指輪、帯止などを購入（夫人用）
6	松島眼鏡店		銀座3-1-3	メガネ	メガネを購入 現存
7	新田商店	新田恭一	銀座8-2（元銀座6）	スポルディングゴルフ用品、服飾雑貨	ゴルフ用品、洋服、靴など購入。
8	田屋支店	梶原市太郎	銀座4-1-3	ネクタイ、紳士用品	現存
9	緑屋		銀座8-2	ネクタイ	現存
10	本木洋品舗		銀座4-1-3	紳士、婦人用品	現存
11	ギンザのサエグサ	三枝代三郎	銀座3-2-7	婦人、子供服、装身具	婦人用品、子供服を購入。 現存
12	萬屋洋傘店		銀座8	パラソル、シヨール	カサ、パラソルを購入。
13	桑原カバン店		銀座6-2-7	カバン、ハンドバッグ、袋物	
14	とりみ屋		銀座西5-5-8	袋物、帯地、ハンドバッグ、ネクタイ	
15	義昌堂		銀座6	乳母車、子供用運動具、藤製品	
16	川島甚兵衛東京店		銀座4-4-5	インテリア用品、織物一式	
17	羽毛工業		銀座2	羽根ブトン	羽根ブトンを購入。
18	伊東屋	伊藤勝太郎	銀座3-1-4	文房具	金庫、文房具を購入。 現存
19	十字屋楽器店	倉田繁太郎	銀座3-2-2	楽器、レコード他	ピアノ（ペーゼルドルファーか？）を月賦で購入。 現存
20	東京電器機直売部	鈴木関太郎	銀座5-2	電気製品	電気冷蔵庫、ヘルスマーターなど購入。
21	出雲商店		銀座8-5	活動写真機その他	シネ用フィルムを購入。
22	ブレットホスピタルファーマシー		銀座5-2-4	ドラッグストア	香水を購入。
23	米国貿易機		銀座西5-2	（不明）	
24	銀座千疋屋	斎藤義政	銀座8	くだもの	現存
25	銀座宝来		銀座4-1-3	パン	
26	菊酒舎	井田篤之助	銀座5-3-1	和菓子	現存
27	ちた和（知田和）	比留間謙吾	木挽町8-13	呉服	現存
28	糸り円	柴崎吉太郎	銀座4-1-7	呉服	現存
29	糸り治		銀座7-1	呉服	帯を購入。
30	久野屋糸店	菊地利助	銀座6-2-11	ひも、糸、和装小物	羽織のひもを購入。 現存
31	佐野屋足袋店		銀座5-2-1	足袋	
32	阿波屋	原田新蔵	銀座8	履物	夫人用の草履を購入。 現存
33	京屋	天羽金男	銀座5-3-2	履物	現存
34	会津履物店		銀座西6-1-6	履物、カサ	
35	伊勢由分店	千谷隆啓	銀座西6-5	履物、ゆかた	草履を購入。 現存
36	平つか		銀座5-3-3	表装、家具、指物、袋物	現存
37	西野屋		銀座西5-3	家具、工芸	
38	たくみ工芸店		銀座西8-3	民芸品、工芸品	現存
39	いづみ屋	和泉	銀座西5-5-9	ハンドバッグ、帯止、工芸品	昭和9年銀座店開店 現存



*"Give me Champaign, and fill it to the Brim,
I'll toast in bumpers ev'ry Lovely Limb!"*

GRAND HALL SALON HARU

Tel. Ginza (57) 3233・4397

■ ■ サ ロ ン 春

1. 「サロン春」

昭和40年、交詢ビルの地下にオープンした。女給のサービスが売物の大サロン。

謹啓

榮光 天地に溢ち溢れるクリスマスと
芽出度き新春を御慶び申し上げます。
来九年には若人日本の血を湧きたたせる
オリンピックなども御慶びます。

いよいよ世界のあちゆる方面に於ける
開戦の時代が来らねばならぬと存じます。
此際にお共は必なり乾杯して祝慶申し
上げる次第で御慶びます

昭和十年十二月

東京・銀座・西五丁目
バー・アムステルダム

GINA NISHI SCHOMEI

2. 「バー・アムステルダム」

銀座西五丁目（当時）にあったバーのクリスマスカード。

第二銀座會館（銀座六丁目）



大東京夜の魅力近代銀座の象徴として、世界に誇り得る社交の大殿堂、火災犠牲と輝く鮮麗のネオンに人生の感傷が踊る。近代的明麗の建築美はワルトラモセラムズムの表現であり、シリーな配光、ノープルな感受、フレッシュな装飾、スマートなレディー、交響樂的エンジロイメントはアラ・セードである。

近代人のトビアアの面影はムラランルージュの風車放射線上に投影する。



（日丁二座銀） 館會座銀一第



3. キャバレー「第一銀座會館」「第二銀座會館」

大阪の榎本正が銀座に開いたキャバレー・チェーン。関西資本、関西商法の銀座進出として話題を呼んだ。

◇ 昔懐かしい銀座の柳——が復活しました四月一日からそのためのお祭りでございます。お出かけの節にはお立寄り下さいませ親切丁寧直の店

銀座

柳の祭

銀座西五ノ五ノ八秀吉ビル一階 酒場・シラムレン
風月前電話銀座三六五三番

4. 「酒場・シラムレン」

昭和7年春、銀座に柳が復活し、街では「柳まつり」が開催された。それにちなんだDM。

朧月 花の木蔭に誰やらが居る風情 醇
 き酒と 粹き女と 美き料理と 三拍子揃
 うてこそ一刻千金の春の宵 見やれるほる
 の小座敷に 散る夜櫻の二つ三つ四つ……

昭和十季卯月

銀座松坂屋裏
 關西 割烹 **のほる**
 電話銀座 01-5855番

5. 「関西割烹・可ほる」

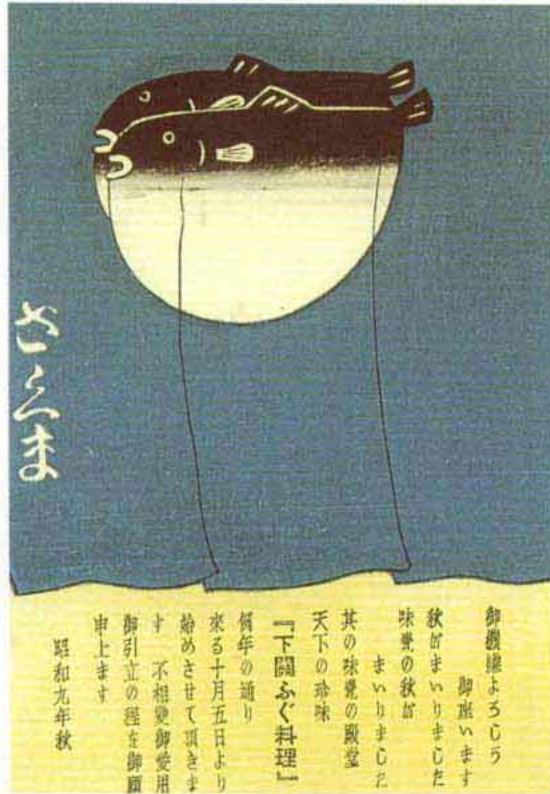
昭和初期、大挙して銀座に開店した関西割烹のひとつ。凝った広告コピーによるシリーズDMを発行していた。



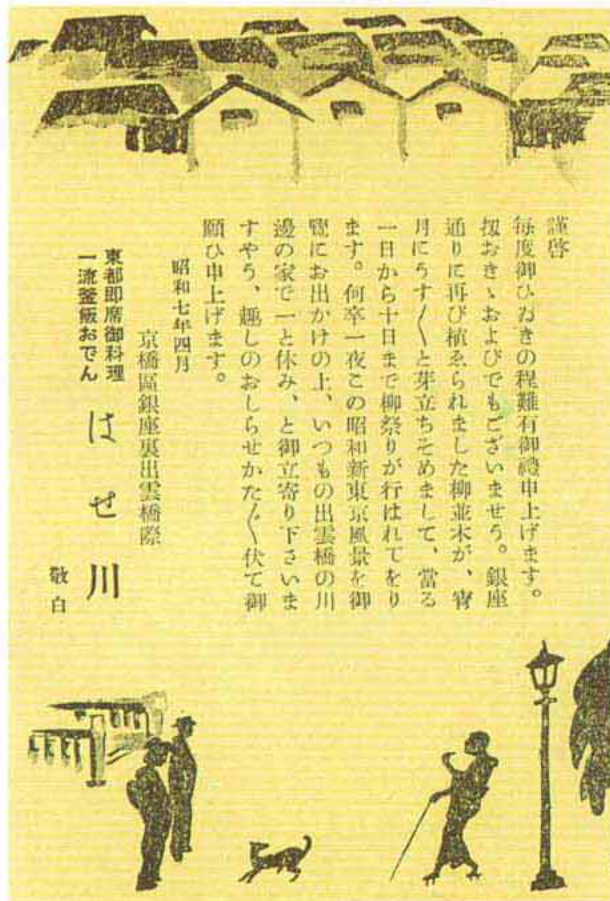
明石の浦より飛行の鯛
 御待ち申上げ候
 銀座松坂屋裏
つるげんぼて
 電話銀座(57)三〇一五番

6. 「大阪料理・つるげん」

大阪法善寺の小料理店が銀座に出店したもの。明石鯛を当時は珍しい航空便でとりよせることで人気を集めたい。



7. 「下関ふぐ料理・さくま」



8. 「料理・はせ川」

東京即席料理、一流釜飯、おでんとある通り江戸風の小料理店。俳人が集まってよく句会などを開き、虚子もよく立ち寄ったという。三十間堀出雲橋ぎわの有名な店。



今度姉のあとを繼いでお慶ずしをやつて行く事になりました。材料を精進して一番おいしいすし屋を姉は滿五年の間熱心經營して皆さまの御引立を受けて参りましたが今後も姉同様御最負に預りたく存じます。銀座御通りがよりには御さそひ合せの上是非御立寄り下さいませ。標願上げます。

昭和十二年二月

銀座 おけいずし
中村松子 啓

9. 「おけいずし」

「カフェ・タイガー」の女給が独立して開いた店。すべて魯山人作の食器を使うこと、値段が高いことでも話題になった。

伊勢工の炭焼のステーキ

キッペン料理御案内

西銀座七丁目 国民新聞館向
フロリダ・キッチン
電話 紙巻一七六

皆様御變り御座いませんか。秋の太陽。澄きつた空。健康な肉體。新しい喰物。清潔な蒸所。

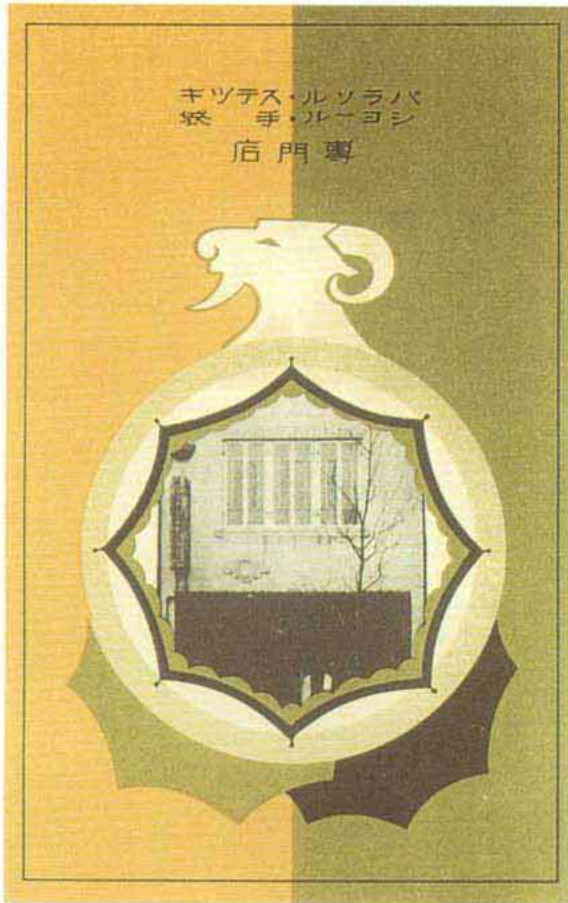
この店はフロリダ・キッチンと云ひ、そこは新鮮そのものです。赤く焼けたステーキの前で白帽服のコックが、皆様へ御給仕致します。來る十月二十八日は始めて煙を吐く日です。是非御試食御高評いただきたく存じます。

尙、當店は元鳥料理コーナーを改築したもので、何卒従前通り御最負の親御願ひ申上げます。

ステーキ・小籠の焼・シーソーの炭焼・フロリダ料理・西洋鍋料理・西洋おでん・煮酢の魚・焼魚の類

10. 「フロリダ・キッチン」

アメリカ風家庭料理という新しいコンセプトでオープン。これは開店案内のDM。



11. 「萬屋洋傘店」
銀座八丁目の、カサ、ショールを中心とした洋品店。

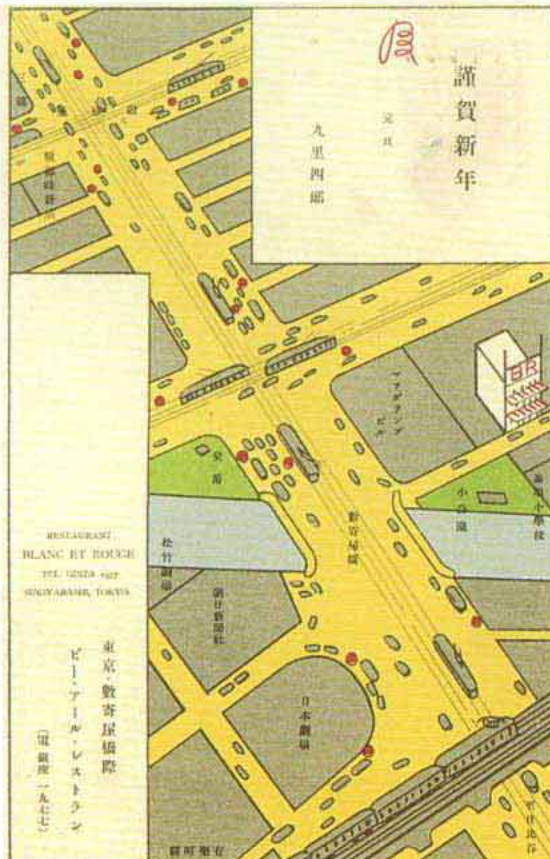


12. 「資生堂」
当時の資生堂は石鹸の販売に力を入れていたようで、多色の美しいDMをしばしば出している。



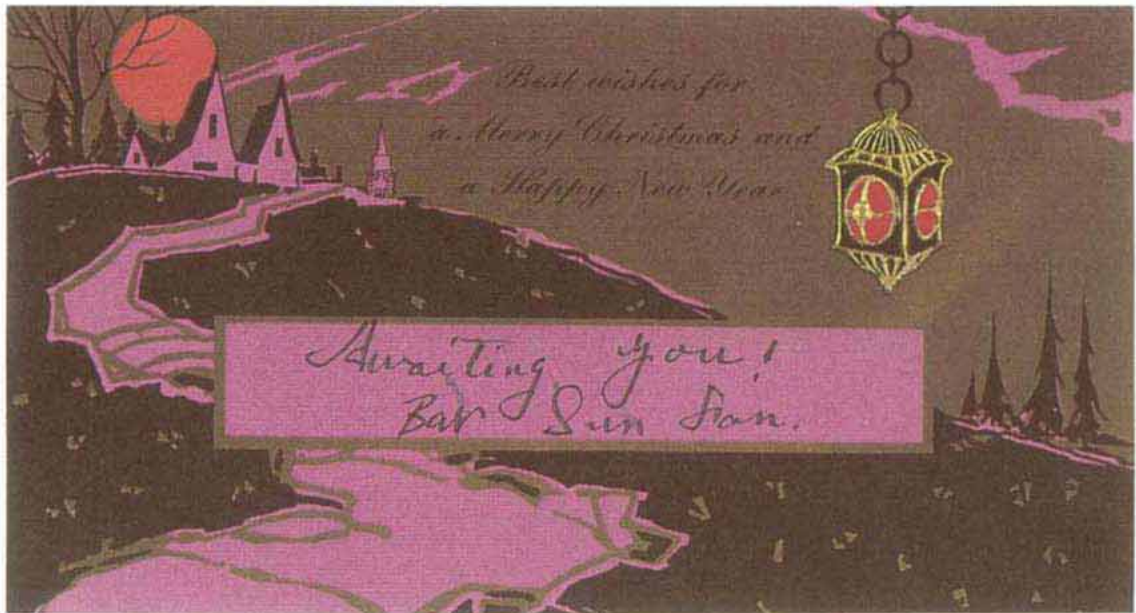
13. 「とりゐ屋」

銀座西五丁目（当時）にあった袋物、帯地、ネクタイ、ハンドバッグを中心とした洋品店。



14. 「ビー・アール・レストラン」

B.R.は「ブラン エルージュ」の略。本格的フランス料理をめざしたレストラン。



15. 「バー・サンファン」、クリスマスカード

御暑さ酷しき折から皆様にはお變りなく
御過しの事と存じ上げます

冬物の御手入
再製は比較的
暇な八月の中を
どうぞ御利用
下さいませ

サービスルーム 銀座・尾道町ビルニ階
アトリウム 穴森區南千束一四一(03)四六〇八

マミ洋装部 北村 江店

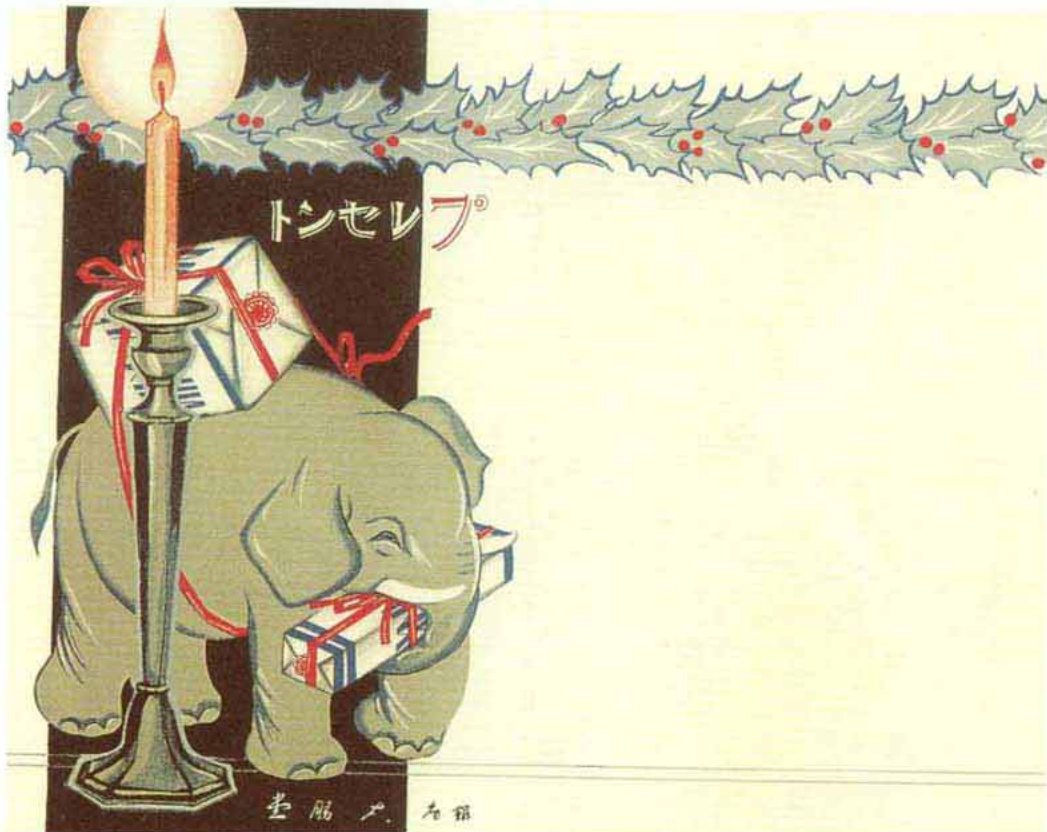
16. 「マミ洋品店」

この頃の婦人服はオーダーメイドが主流。生地屋で選んだ生地を洋品店（洋裁店）で仕立てるのが普通。



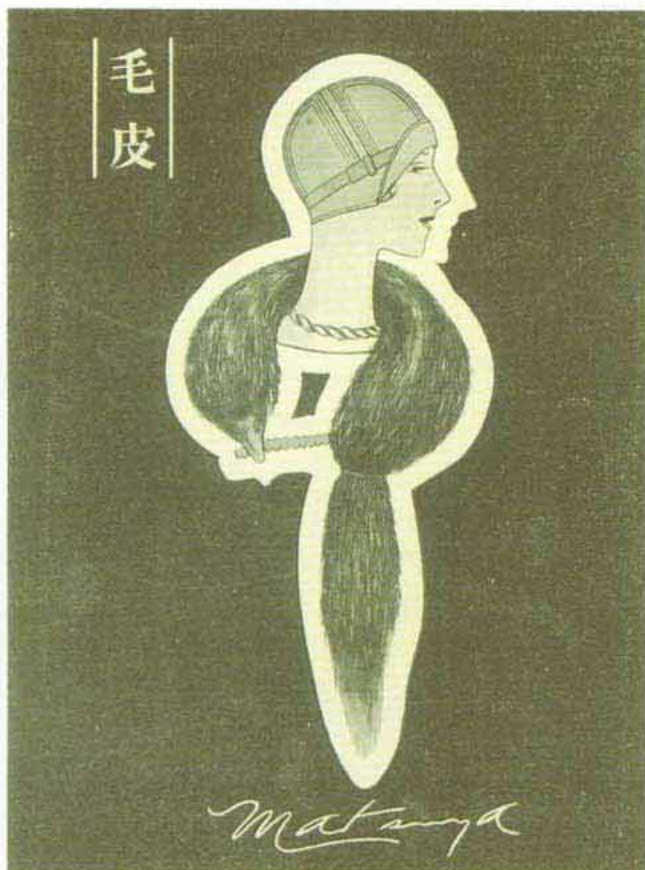
17. 「カフェタイガー」

銀座六丁目（現在の「森永ラブ」のあたり）にあった有名なカフェのクリスマスの案内状。



18. 「大勝堂」

時計、宝石、貴金属の専門店。現在も「銀座コア」内で盛業中。



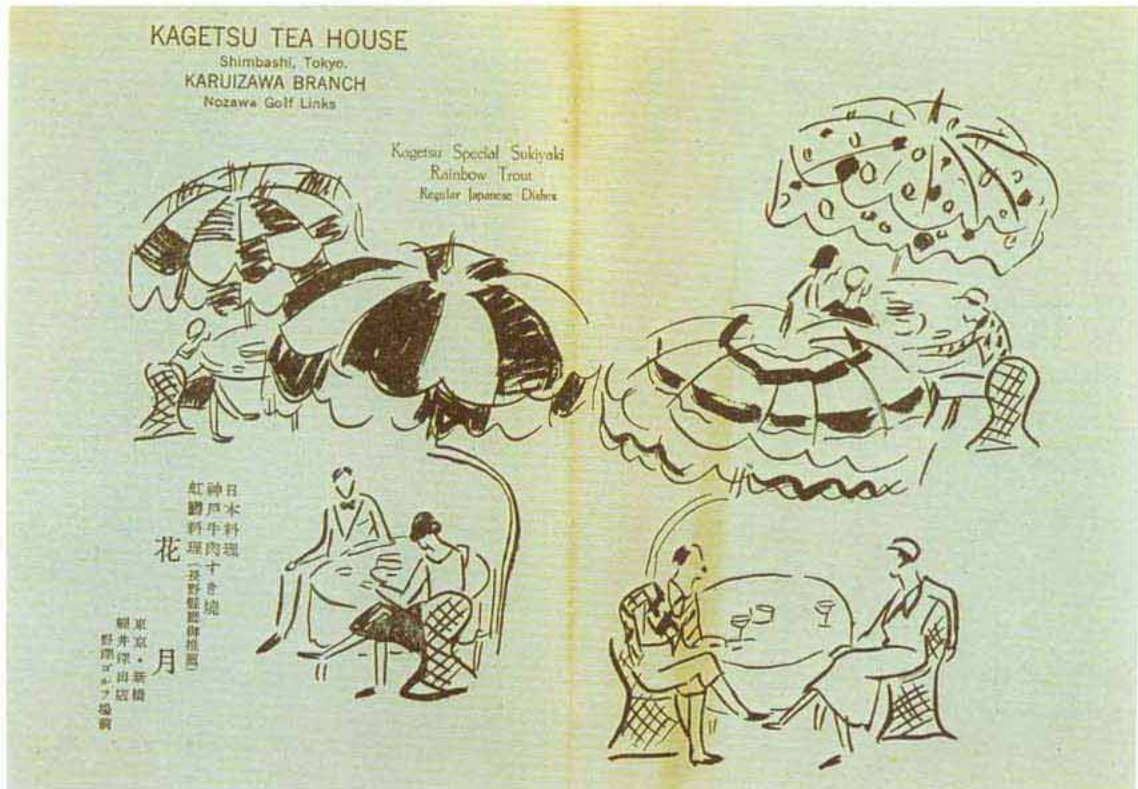
19. 「松屋」

百貨店「松屋」の毛皮促進用のパンフレットの表紙。アールデコ風のデザインはこの頃大いに流行した。



20. 「銀座千疋屋」

フルーツの名門千疋屋は「風味」という美しいPR誌を発行していた。これはその表紙



21. 「料理店・花月」
明治時代、新橋芸妓街の中心的料亭だった花月が昭和になるとこのパンフレットにみられるように変身。軽井沢にも出店していたらしい。



22. 「酒場・ルパン」
「カフエタイガー」の売れっ娘「なつ」が独立して開いた店。太宰治の有名な写真をはじめ数々のエピソードを生んでいる。(現存)



23. 「巴里会」の機関誌
「Amis de "Paris"」の表紙。



写真1

「アサヒグラフ」

昭和10年9月25日号より（提供、朝日新聞社）

銀座パリ2都物語

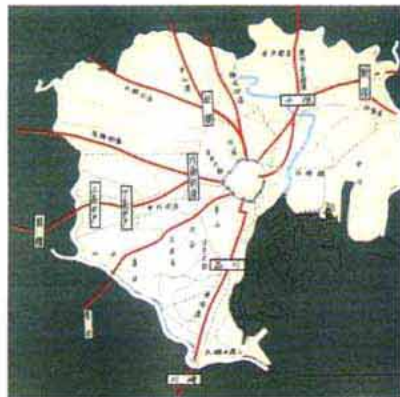
端山貢明

東北芸術工科大学教授

江戸の都市構造について

—江戸・東京は、街道と宿場から—

江戸から発する諸街道は、見事な放射状の形で関東平野をおさえています。関東平野を越えるとそれが乱れてきますが、東北、北陸、西の方へと江戸を中心にのびています。この街道が江戸・東京の街の生成にどのように関わっているかといいますと、例えば新宿、元の宿場、内藤新宿、それから品川、巢鴨・板橋、千住・上野等、街道をはるばるやつてきて、江戸に入る前にそこに泊まる。それが、点々と並んでいる今の地名を考えると、山手線は大体江戸の第一宿場をつないで出来ていると考えられます。お城があり、そこから道があり、まず見附門がある。お堀の所に。四谷御門とか市ヶ谷御門がそれですね。狭い入り口で四角い升があり直角に曲がるように出来ていて、大量の人が勢よく真っ直ぐに通る事が出来ない様になっています。それを石垣で囲って、敵がせめて来たときにそこでいなしといて周りから撃つ。それが、四谷にも市ヶ谷にも赤坂にもありました。狭くて動きのとりにくい



構造の門がお堀の上に点々とあり、日常的にもかならずそこを通らなければ、堀の中と外を移動できない条件にあり、そこに見附役がいて、あやしい奴がいると見つけてしまう。ですから、当時から情報量の高い、都市機能(管理機能)の高い場所になっていました。

この見附門が、まず第一の拠点になります。お城があり、見附門がある。そして、第一宿場、それが第二の拠点になります。例えば半蔵門から四ツ谷見附まで麹町の通りがあり、武家屋敷を背景に町屋が並び、四ツ谷御門を出ると内藤新宿を経て甲州街道・青梅街道が伸びていく。そういう形で江戸・東京は発達してきたわけですが、その範囲が広がってくるにしたがって、第二宿場がその中に含まれるようになります。要するに、街道と宿場、点と近傍の発達によつて江戸が生成され、東京がいまだにそのように発展しているというのが地図(左図)をみると非常によくわかります。

東京は非決定都市

江戸は、幕末期の形をゴールに計画的に造成されたのではなく、御城、大名・武家屋敷、町屋(大手門から丸ノ内、日本橋へ)と言う条坊制に則った古典的な城下町としての基本部分を基に、それぞれいたるところでその場所の必要性に応じて発展しており、それが現代に非常に興味深い発展の方向性を投げかけているとおもいます。

街道と拠点によつてできた、これは面白い出来方で、例えば中世のヨーロッパはこれと随分違います。市民を囲いこんで守る強固な城壁があり、その城壁が広がる度に街の構造ができ上がっていく。その真ん中に泉水、水の出るところ、役場、大きな寺院等が回りに並んでいる広場があり、そこが中心、コアになつていて、街を貫通する大きな街道がそこに接触している。そこには市場もありました。つまり、人間のアウトプット、インプットに関する機能が、広場を中心に、城壁に強固に守られながら、あのレベルで相当充分に恒常的に(決定的に)あったというのがわかります。

江戸の街はこれとはずいぶん違う。これを非決定都市と呼んでみたいと思います。拠点がおかれ、その近傍が機能的空間として生成され拡がりができる。決してその間をハードに構築してしっかり埋めるというのではなく、点々と拠点が自発し、近傍がそのまわりに育っていく、そのような形で街ができます。拠点の機能が少なくなったときには、その近傍は小さくなります。必要になったときにはまた大きくなり密度が高くなってきます。リジ

ッドに設計された近代の都市のような、硬直性がない形でできる発生原理を江戸が持っているといえます。

300年以上前には始まって、いまだにこんな乱雑にでたらめのように見える、きたならしい街なのに何故か保っている。これが現代的な意味の非決定性によって可能になっていると思われまます。ひとつの仮説ですが、この意味で、ここで「東京は非決定都市」と云いましょう。

これからの都市は非決定都市としての方向を持つ

非決定都市というのは、人間の存立を支援するあらゆる機能が恒常的に固定的にあらゆるところに存在してなければいけない、そういう近代型の都市ではないということです。必要なものが必要なときに、必要なところにあればいい。必要な時に手をだせばそれが必ず提供される、このような在り方は非決定的に恒常的であるという言い方が出来ると思います。非決定的に常にあると。

今一般に、例えば、交通の手段として自動車等を所有していますが、その自動車を固定的に所有するのは、自分が使おうと思ったときに、それを所有していないと任意にそれを使うという利便性が失われてしまうことがあります。その意味で財の決定的所有という形が存在するわけですけど、仮に必要な時に車がキント雲のようにひゅっとなって来るのだったらそれを決定的に所有する必要はないわけですね。このような仕組みができれば、まさに交通機関は非決定的な恒常性をもつということが出来る。これからの都市というのは、実はそういう方向をもつものだというのが、基本的な私の考えです。

副都心ではなく複都心という発想

このように考えると、江戸はこれから、非決定都市として相当よい資産を確保しています。実はいまはあまり良くないのですが、これをどうにか改革して使えるようにしていく、その時に路によって出来上がる都市機能、これは人が使う時に出来上がってくる都市機能、これはまさに銀座や先斗町のように、道によって、人がそこを使うことによって出来上がった都市機能です。実は人が通らないときはそれらの機能はなくてもいい、銀座はある意味でその方向性をみる可能性がある。銀座は柔軟な発生的な形態をしています。これは、現代において相当大きな可能性をもっているということだと思います。

その非決定的な都市の構造というのを実現してくれるひとつの視点、これが複都心という考え方です。「ふくとしん（副都心）」というのは良く聞く言葉ですが、この場合は文字が違います。二番目の都心ではなくて、複数の複です。都心は沢山なくてはだめですよという意味です。至る所に中心があるほうが便利で柔軟で強いのです。それぞれ異なった必要な機能はそれぞれの都心にあります。その意味で複都心の構造ですね。

今、東京の周辺を含めた人口が要求するところの機能、キャパシティを、近代的な決定性の強い方法で実現しようとする、相当に負担が重く限界を超えてしまいます。然し、江戸はもともと複都心的構造として発達している、それぞれの拠点が力を逃がしあうことが可能になる。これから、新しい都市を計画するときには、はじめから問題を逃がすことができるような柔軟な都市構造を考えるのが良いのではないかと思います。全体にランダムな自由な重力配分を持つ。ようするに東京を遷都（何と古くさい言葉と意識！）しなくても、これだけの人口、経済、機能を持ちながら、もっと楽な快適な生活が可能都市にすることができるのではないのでしょうか。

波動と引き込みのパフォーマンスから見た都市や文化の消長

ただ、これを今、まともに東京でやろうとすると、非常にむづかしい。東京は江戸以後近代的な決定的都市としての発展と整備が進んでしまっていて、また更に困るのは、その点でも一向に成熟していない状態にありますので、ちょっと手をつけても整合性の高いやわらかな複都心構造にはなかなかありません。これはあまり大きくない、近代の汚染をあまり被っていない地方の都市でまず実行して見るのが効果的でしょう。そこで成功したら、これから後、現代化、都市化が進むアフリカ、などのすべての地域で、現代にむかった成果（近代ではなく）を考えることが可能になると思っています。

この複都心構造の望ましい機能を考えるためには、波動と引き込みという概念が有効だと思います。波動と引き込みの状態が順次おこっていく。長い歴史をみていきますと、社会の特性や機能が広い領域に確率的に潜在的に拡がってあまり可視化していない、比喩的に波動函数的な状態と、ある点に機能が集中して非常に強い特性をもって活動しているようにみえる状態とが交互に現われるのに出会います。ある重心に力があつまって、突然強大

な国家が現われる。そしてまたそれが潮がひくようになっていく。これが、波動と引き込みから見た、都市や文化の消長です。

それぞれの社会は何時までも延々と永くやっていたかたんだらうと思いますが、そうは行かなかった。しかしこれからは逆に、この波動と引き込みを積極的に運営、パフォーマンスすることによってより効果的な、高度な社会を実現することが可能になると思います。このために重要なのは、必要に応じて必要なところに集積ができる、必要がなくなったらその集積はなくなっていく、このようなダイナミクスに耐えるようなインフラストラクチャ、“プラットフォーム”を構築することです。ここでいうプラットフォームとは、ポテンシャルのある空間のことですが、このような概念において社会、そして都市を考えていくことは、これからまだ数十年間続く現代の望ましい成就に非常に有効な貢献となるのではないかと思います。

みなさんは、銀座江戸については十分よくご存じですのでこの程度にして、後半に移りたいとおもいます。その前に、今までの話の中で、分かりにくかった部分や質問がございましたらどうぞ。

質問)

今までの議論では、江戸の流れからずっとお話をされましたが、その中でも我々は銀座というものに関心があるのですが、端山先生は銀座についてはいろいろと御持論がおりだと伺っていますが、今のコンテキストの中で銀座を考えたときにどんな風にお考えでしょうか。

端山)

銀座は昔から私の大変好きな所で、私の青春、私の歴史のなかでも大事なところ。だから、現状を超えて、もっと魅力的なところになって欲しいので、少し思っていることを云ってしまいます。

内部空間構造

確か都電が一番最初に銀座通りからなくなりましたね。いまの銀座通りの歩道にはその都電の軌道敷の敷石を使っていますね。人々が歴史の上を歩いている。あれはスマートで大変格好いい。歩道も日本の道路のなかでは抜群に広い。それからあそこには銀座らしい老舗が並んでいますね。江戸時代の町屋、日本橋とはまた違う。それもなかなか素晴らしい。

都電、街路電車、これはある時期大変便利なものだったのですが、街路の両側を分断します。路を囲んで出来上がっていた社会を分断するものです。あの鉄製の巨体、鉄路、街路を覆う架線等は大変ものものしい存在で路の両側の親近性、一体性を失わせます。お互いに外側の関係になってしまうのです。それが無くなったことは、路によって出来上がる社会の復活の可能性をまた獲得したということです。都電の撤去の理由は自動車の通行の邪魔になるからでしたが、歩行者天国だけでなく、このチャンスはもっと活かすべきものですね。

路面電車の撤去は、パリでは1900年の地下鉄の設置から始まっています。当時の路面のレールは最近まで残っていました。この撤去によってパリは、マロニエの並木、カフェのテラス等、人を取り囲む「内側の空間」を再獲得しました。

人間は、その能力の外延を拡げるためにいろいろなものを作り自らの周りに置いてきましたが、その中の多くのものが、人間に対して対立的な外側の存在となり、さまざまな悪いストレスを作る原因となってきました。都市も同様にそこにいる主体者である人々に、いろいろな問題を持つようになっていきます。街が「ひと」として内側の顔、機能を見せるか、外側の顔を見せるかによってその魅力はまるで変わります。衣服でも内側は柔らかく、なめらかにできています。自動車も、外側は防御的に、攻撃的に、そして内側は、柔らかく、優しく、どこまでも便利にできています。養虫のミノはこれを理想的に実現しています。このような機能を私は皮膚空間機能と呼びます。皮膚の機能が拡大して作る外延空間です。街はこのようであって初めて魅力的です。一般に新しく造成された、又再開発された地域には、そこに来た人を愛をもって喜んで迎え入れる、という地域の意識の表現が非常に貧しいように感じます。

フランス語にBon Accueil という言葉があります。喜んで心を籠めて迎え入れる、という意味ですが、今の銀座にこれがどの程度あるでしょうか。

どうか、銀座は、愛のある、優しみに満ちた内側の機能を豊かに持った、誰でも人々を喜んで迎え入れる街とし

て育ってください。

地域の機能としての「時間内構造」を銀座に

このような愛の籠ったもてなしを実現するためには、特に銀座のようなシックな地域には、要求されることがあるんです、それは「時間内構造」を育てるということです。「時間外構造」では時間と無関係に商業、コミュニケーション、いろいろな受け渡しが成立する。ここでいう「時間」は、朝昼というのではなく、要するに商品があり、誰だかわからない客がきて、その商品を1コ買っていく。そうすると、その人とその商品の受け渡しの関係はそれで終わってしまう。そのお金はどこからきたものかもわからない。その瞬間だけで終わってしまう。こういうのを、時間外構造といいます。時間が要素としてかかわっていない。

一方、時間内構造というのは、一度来てくれたお客様が気に入ってくれたら次もまた来てくれる。時間が経って、関係が成熟しますね。さらに成熟した関係のなかで、成熟した関係に対応した商品が、また用意されている。例えばお得意様を扱う考え、これが時間内構造ですね。

銀座のような老舗、世界中の老舗というのは、非常に長い間おとくい様をしっかり掴んでいる。そのおとくい様の家庭の事情というのも相当よくつかんでいる。例えば呉服屋さんだとすると、そこに子供がうまれて女の子だったら、3年位したらそろそろ如何でしょうか。もっと大きくなって、どこかで大きなお茶会があると、お嬢様のお手前にとって、時系列的な対応関係においてサービスをしていく。これが時間内構造なんです。それもただタイミングよく売りつけて儲けてやれ、というのではなく、その家庭にこんなものが入って、あのお嬢様がそれを着て、みんな幸せそうににこにこしながらそれを見ている、こんな風景を番頭さんが心の中に夢に見ながら反物を念入りに選んだりする。これは、昔からあるような呉服屋さん等にはありますが、新しくできたところでは、このような成熟をともなった関係を殆どつかんでいない。安定した社会的構造に立っていないので苦勞するわけです。

昔は（ってえと）、畳がずーっと敷いてあって、引き出しが壁一面にあって、店にはなに一つ品物が出ていない、というのがいいお店なんです。お客様がそこにすわって二言三言何か言うと、番頭さんが引き出しからなにか出してきて、こんなものは如何でございましょう（実は、それはこれでしょう！）と出す。相手を知っていますから、まさにドンピシャなものが出て来る。こういうことが時間内構造で可能になります。

これは古い形ですけど、新しいかたちの時間内構造を銀座はもう一度持ち直さないと、どことも大して変わらない、あまり力がない街ということになる可能性がありますね。私は商売のご助言を申し上げているのではなく、地域の機能として、この時間内構造がないとダメだなあと強い実感を持っているということです。

時間内構造のひとつには、任意性というのがあります。昔はミキモトの前に車を止めて買い物ができる。その頃は道路がアナボコだらけでひどかったけれども、車の便利さとその地域を自由に使う任意性は充分満喫できたし、地域の機能とも個と個の関わりでつきあいがあった。自分の思うように使うメディアとしてその地域を使うことが出来る、その様な任意性があった。しかし、道路がよくなってくると同時に、銀座の持っていた人との親近性、知っている人に対する親近性がどんどんなくなってきました。どこの街とも同じようになってきた。それが寂しさですね。その意味でいうと、あの道路の幅は狭すぎる。公園のような道路でなければいけない。シャンゼリゼなんかは端から端までほぼ100メートル。片道5車線で（馬車のころは3～4車線だったかな）中央にタクシーのパーキングがある、車道と歩道の間に馬車を一時とめるもう一つの道がある。そこにはゆとりがある。歩道も広いですね、銀座よりもはるかに。あれはすでに道路、街路ではなく、広域の、ひとの心を喜ばせる公園、つまり楽園（Champs-Elysees）です。車道があり、細い歩道がそこに張り付き、建物が、店やビルがぎっしりと並んでいる、という街ではなく、街並にも出入りがあり、木立や広場を囲み込み、人の動きにも緩急がある。歩道を歩いているとふと（車道側ではなく）深い広場があり、そこに人間に必要なI/O機能が見え隠れし、奥のほうに洒落た落ち着いた店があったりする、ふとそこで足をたゆたわせて見たいと思うような空間。デパートの一階が全部木立豊かな、同時にI/O機能豊かな公園になっていて、そこからつい上の階に上がって行ってしまふ、買い物をしたエレヴェイタで降りてくるとそこが林の中、そういう空間が施設として機能として都市のいろいろなところに点在しているということが、これからの新しい都市開発において必要で、願わくば銀座が先にやってくれと、他がどんどん真似をするようになってよいと思います。銀座の悪口を言っているのではなく、まさにこうなつて欲しいということなのです。

ではもう一つの都巴りに参りましょう。

江戸とパリをつなぐもの

フランスの道路地図と前に述べた江戸・関東の地図とを比較すると非常によく似ています。どちらかを逆さにすると特にそっくりです。大事な点はフランスの全体と日本の関東地方の道路の配置がとても似ているということです。まずなぜだろうかという、この道路の総体の形ができてきたのが、大体同じ頃、フランスではルイ王朝の頃、ヴェルサイユ宮殿というメディアをつくってフランス中の貴族をそこに集め、それぞれまあ同格であった貴族達を皆自分の下に抑えこんでしまった。このためパリというひとつの大都市に各地方、領地からあらゆる道路が集中的にあつまってきた。近世から近代の初期に中央集権の出来上がった地域の特徴はこれだといえますね。近代化国家の特徴でしょう。大分遅れて近代の骨格ができたドイツ、ベルリンでは周辺だけ放射状ですが、ほかはそうではない。同じ目で関西を見てみますと、関西もこういう放射状の道路網というのは殆どありません。京都周辺でちょっとあるだけで、関西の地域の道路の特徴というのは多角形をしています。すべての地域がほぼ同格にそれぞれ中心にあるので、お互いを結んでできた道路の形態が多角形になる、三角形であり四角形です。集中性が無い。イタリアも同じですね。

(スライドを見ながら)



1. 人間性の勝利の凱旋門

少しパリの出来具合を見て見ましょう。

これは(写真1)、人間性の勝利の凱旋門とよばれるもので、1989年にできました。写真の右側の奥にあるものが、このデファンス地域の一番最初の建造物です。最も古いものと最も新しいもの両方が並んでいるのが面白いので話題として持ってきました。ここにひとつの歴史があります。右側にあるシェル構造の大展示館は、今見ても非常にスマートな建物ですが、これは1958年にできました。1957年にこの地域を改造するための組織ができて、そのプロジェクトが33年後の1989年(フランス革命200年)に一応完成したという、息の永い話です。しかし、実はこの改造は1957年に始まったのではなくて、その始まりは1932年になります。ル・コルビュジエなども参加して色々なモニュメンタルな建築も検討された、歴史的に非常に長い話です。

私がこれを特にお目につきたい理由は、我々のプロジェクトも80年100年と全体を見ながら、非常に時間に耐える構造をもったものをつくらなければならないからです。そうすると、社会全体の生産性も非常に高くなります。日本の場合はいろいろな理由で生産性が低いのですが、重要な問題は、皆がそれに気がついていないということです。

これはグランダルシェの基底部の(写真2)非常に大きな階段です。この大きさをみると、この建造物がどれほど巨大であるかがわかります。この大きさを考えると、これが単なるモニュメントではなくてビルディングだということが分かります。このビルディングのなかで、文化の国際交差点と呼ばれる活動が行われています。

これは階段の上から大体東のほうを見たものですが、この平らになっているところが全部人工地盤になっています。人工地盤の意識と設計が50年代にすでにできていたということ、これは相当素晴らしい。ここは車も、騒音も、埃もなにもない人工的な静穏な空間で、更にこの人工地盤の下で上に見える全ての建物が一つの空間でつながる、巨大な空間になっている。これらのビルのどこにいても雨に濡れることもなく温度を気にすることもなくこのビルへでもいける。さらにその下には、高速鉄道と地下鉄と、1万7千台くらいの駐車場、多くのバスなど



2. グランダルシェの基底部の階段

が入っていて高度なメディアコンパウンドが完全にできあがっています。今、日本でわれわれの周辺にこのようなメディアコンパウンドがきちんと出来上がっているところなかなかありません。例えば新宿の副都心も池袋のサンシャインシティ等も社会のインフラストラクチャのノードという意味では大変に貧困ですね。



3. グランダルシェ東方からシャルルドゴール広場を経て凱旋門へと一直線につながる道

そして、グランダルシェから東の方をずっとみていくと、グランダルメ大通り、シャルルドゴール広場をへて一直線につながる長い道路があります(写真3)。奥のほうに凱旋門が小さく見えます。5キロ以上の距離が一直線につながれている。このように大きな都市構造の概念を、彼らはナポレオン以前から持っていた。ナポ

レオン3世のあの改革以前に、あのパリの原型は殆ど出来上がっていました。

今度は凱旋門の上から見ます(写真4)。目の下にシャンゼリゼ大通りがあり、向こうの方にルーヴル宮殿があります。そして、更にまっすぐ突き当たりの奥のほうに小さく見えるのがナポレオンが生きている間につくった凱旋門です。さっきのグランダルシェからあそこまでの距離がだいたい7キロあります。グランダルシェ(1989)が一番新しくできた凱旋門です。その次が1836年にナポレオンの為につくった凱旋門です。そして、さらにナポレオンの在世中にできたカルーゼルの凱旋門。そういう意味でパリには凱旋門が3つあります。それが一直線に並んで、これは相当楽しい都市計画ですね。200年の距離を持って都市計画を考えているわけです。ナポレオン三世のときに充分整理されて、相当余裕のある道路をこの当時つくったおかげで、パリの市街の内部の主要な所は、その当時以来道路の拡幅は行われていません。



4. 凱旋門上部からの風景

この200年の歴史があり、そのうえ、ルーヴル宮殿の中にピラミッド状の入り口をつくりましたね、地下へ掘り下げて。その時に、何とシャルル5世の頃のルーヴル宮殿の城壁の基礎が出てきた。いま、ルーヴル博物館の地下にそれが保存してあります。ペリー侯の祈禱書に出てくるあのルーヴル宮殿の城壁です。このようにパリの都市の歴史は永い、一本の長い路の上に数世紀の歴史としてそのまま残っているといえます。

もちろん、日本の京都も歴史はながいけれども、これほどみごとに全体として機能が歴然と保たれて残っているというのはなかなかないですね。その意味で、歴史を経て今我々の手に残っているもの、江戸、銀座も更に我々にとってこれからの財産です。後から来る生命のために、我々が保って、磨いて、置いていかなければいけないものだと思います。



5. 「発見の宮殿」と呼ばれる科学博物館

これは「発見の宮殿」という科学博物館です(写真5)。これも、グラン・パレができた頃の古典的な建築物のなかにある非常に楽しい博物館です。当時最先端であり、いま古典となっている建造物のなかでそれを行っているのが非常にすばらしい。

パリの建造物のなかで15%が築100年以下であるという記録があります。ということは、85%の建物が100年以上建っていると。その85%の建物がいまいきいきと非常に快適な状態で使われている。100年たったら日本ではなかなかそうはいかない。それが彼らの場合には非常に快適な状態で新しい目的のために実用されている。その差ですね。

つまり、100年以上も家を建て替えなくても済む、このdurabilityの中の生産性、回復性の大きさを認識すべきではないかと思えます。

これはオルセー美術館です(写真6)。駅そのものが博物館として使われています。これは、その内部です(写真7)。この大きなガラスと金属で出来た構造物が美術館の



7. オルセー美術館(内観)

望まれる条件として再利用されています。大きな空間で中にいる人を包む、そこにコンディションド・エンヴァイラメントを作り人を保護する。これは駅に使っていた状態です(写真8)。このような配慮をした駅というのは日本にどれだけあるのでしょうか。日本の駅は、雨の日に電車に乗ろうとすると必ず濡れるようになってきます。オルセー駅の場合、ここではコンディションド・エンヴァイラメントを作って、それを初めから守るという意識が明らかにあります。駅は19世紀の建造物で、こういうものをそのまま使ってもビクともしないということには脱帽します。



6. オルセー美術館(外観)

これはもともと駅だったのですが、駅というのはその都市の名誉を象徴するものです。美しい建物ですが、内部は美術館に改造し、外は古い構築物がそのまま使われています。パリの街をごらんになるとわかりますが、第一級の美術品がいたるところに雨ざらしになっています。非常に大事なことは、若い子ども達が毎日第一級品の美術品に接触することができるということです。パリ自身が博物館という言い方もしますが、まさにその通りです



8. オルセー美術館を駅として使用していた頃

このように非常に大きな明るい自然光を採り入れる大きなガラスの構造物をつくる手法、コンディションされた大空間を作って人を快適に包む、これは伝統ですね。ルーヴ

ル博物館の天井も同じですし、グランパレやクリスタルパレスもこうですね。彼らの、人のいる空間を非常に大きく構築して囲ってしまうという手法が、非常に長い歴史になっています。ローマのパンテオンも単なる巨大ではなくて、その中にどのように神と人の居る空間をつくる事が出来るのか、という意識の表現ですね。



9. パリの地下鉄の木製のエスカレーター

これは、パリの地下鉄のエスカレーターです(写真9)。パリの地下鉄は1900年の博覧会のために始まったのですが、同じ博覧会にエスカレーターも出品されていました。木でできていて、昔、留学したときに、これを見てこんな古臭いものを使ってと呆れ果てたわけです。しかし、それを今でも未だ使っています。こっちも意地になって行くたびに見に行くんですが、いつまでたってもあるんですね。パリというかヨーロッパの連中のすごさを感じます。ただ、ロンドンにもこれとそっくりなのがありまして、それがいつか火事になってしまいました。やはり、危険なものですね。だけど火事があったのはそれ一回だけで、依然として使っているのには感心してしまいます。安全の意識とシステムが整っているんですね。

またもう一つ感心するのが、これは地下鉄が地上に出て高架になっている所です(写真10)が、当時すでに鉄骨やベトンアルメ(鉄筋コンクリート)という工法があったのに、この部分は全部煉瓦でアーチをつくっています。煉瓦を1コずつ工事が鉄骨の上に構築しているんですね。これも感心します。この建物は1900年から20世紀の初頭のものですが、まだまだこれも充分に使える状態です。これはスゴイを通り超して愉快ですね。



10. パリの地下鉄が地上に出て高架になっている所(アーチは全て煉瓦で作られる)



11. 19世紀中に建てられた食肉保存庫を利用して作られる博物館(建設中)

そして、これは19世紀に建った食肉保存庫の鉄骨の大きな建造物です(写真11)が、それをいま骨組みをそのまま全部つかって新しい博物館をつくっているところです(もう完成しています)。古い建造物の鉄骨を全部のこしまして、大空間をつくります。これも、単なる廃物利用ではなくて、使うのが当然という意識でやっていますし、それが可能な保続性がその建造物にあったことも重要です。この博物館は新しく整備された広大な公園のなかにあります。

また、これは「人間の権利と人間資源/能力(resource humaine)の開発のための世界センター」と言うながい名前のセンターです(写真12)。体の悪い人とか、いろいろなハンディキャップをもった人の職業訓練の場にもなっています。一番左にいる黒人の青年は、腕が途中から失われています。然しそこに指ほどの太さの棒を結びつけてあって、コンピューターのキーボード操作が可能になっていきます。この一本の棒(両腕で2本ですが)とコンピューターがあるおかげで、この青年の頭脳のなかにあるリソースが、完全に彼にもつかえるし、他の人にも使える状態になります。能力さえあればその能力すべてにおいて人々に、人類に貢献することが可能になります。



12. 人間の権利と人間資源/能力開発のための世界センター

これが人間のヒューマンのリソースの最も高い開発の一つです。そういう概念があるかないかで、その社会の成熟度がまるで変わってきます。その概念がない社会、成熟度の低い未熟な社会では、体の悪い人をカタワだカタワだといって嘲り笑うのです。日本の社会はまだそれに近い社会です。社会の深い生産性をあげるためにまずすべての人の生存の権利から守っていく、個の主体性の尊厳の意識、それが根底にあることが大事なのです。

(スライド終了)

パリは「個の権利」を生かす街

以上のスライドで気付くことは、一つはパリという都市の設計概念は、決定論的だということです。非常に固くて重い、リジッドなフォームです。しかし、そういう決定論的な都市を作っているながら、なおかつ非常に永い間、200年経った今でも実際に日常的に十分に快適に使われている。それが我々の大東京よりもはるかに機能の高いものとして使われている。それは、まさに「個の権利」がどこまで尊重されているかということです。「個の権利」が生かされることにより、初めてパリのように古くて新しい都(ミヤコ)が可能になるわけです。

そして、古いパリの街並みにもデファンスのような、1950年代に考えられる21世紀の現代の都市構造のひとつの実用的な見本を我々に提示しているわけです。私達の場合、それを、私達の街において、銀座において、どうやって実行していくかということが重要なテーマです。

オ・シャンゼリゼの歌詞と現代メディア論

オ・シャンゼリゼという歌は、すでにご存じとおもいます。この歌詞の意味ですが、"au soleil"というのは日が照っているときです。"a la pluie" は雨のときです。全天候型なんです。また"au midi" (正午、昼) "a la minuit" (真夜中、夜) 全時間型、すなわち、昼でも夜でも、降ろうが照ろうが、"il y a tout ce que vous voulez" あなたが欲するところのものは全てそこにあるよ、という歌なんですね。実は、これは現代のメディア論の最大の要諦です。ようするに欲するものはそこになくはない。しかし、もう一つ重要なのは、貴方が欲するものはそこにある、欲しないものは別になくてもよい。いつでも全てがそこにある必要はない。必要なときに、必要なものが手には入れればいいということです。非決定の恒常性ですね。あなたが欲したときにそれが手に入るような、そういうポテンシャルがある空間、それがシャンゼリゼだよとっている歌なんです。そして、Aux Champs-ElyseesということばのChamps-Elysees、これは何かというと、Champs というのは、野原、園という意味、Elysees は天国という意味です。だから、Champs-Elysees とは極楽、楽園です。楽園には昼でも夜でも降ろうが照ろうが、あなたの欲するものは全部あるんだよ。楽園、パラダイスというものもまさにそういう場所なんですよ。まさに、神がアダムとイブに、ここにあるものは全て取って食べていいんだよと言った、あの約束ですね。ついでに、楽園には食べてはいけない知恵の実まである。すべてがそこにある。この歌に示された現代のメディアの要諦は、実はインターネット等でわかるように、私たちもどんどん開発して展開しようとしている地球レベルの情報系のなかで相当のレベルにまで実現が進んできました。この会場がインターネットに接続してあれば、こんな重いものを持ち運ばなくても、私の大学と結んでデータベースからその時必要な情報をここで引っ張りだしてお見せすることができるんです。いまは一部分のデータしか持ってきていないですが、大学と接続してあればおおよそどんなデータも出てきます。それが大事なんです。あなたの欲しいものはなんでもあるよ。さあ、何でも出してみせますよと。

この話は、まあ、ある種のジョークとして始まりますが、近未来のSF(Scientific Fact)として終わります。

銀座とパリの知縁社会

情報で可能になったことは、およそあらゆるものについてもやがて可能になります。その意味で、このセンテンスをつくっていきましょうということを提案しています。最近、少しずつできてきているのがうれしいです。そして、是非この機会に銀座でもこれを実現して欲しいと思います。そのためには、私達は必要なことは何でもお手伝いします。そうしますと、東京では銀座においてChamps-Elyseesができる、パリにもシャンゼリゼがあります。実は、違う場所の空間だけれども機能として質として結びついている社会、こういう社会を「知縁社会」と呼びます。“地縁”ではなく、インテリジェンスの“知縁”です。情報によってできる新しい形の社会です。この知縁社会をつくりましょうという提案をさせていただいて、ひとまず話を終わらせていただきたいと思います。

—講演終了—

—講演後の質疑と意見交換—

Q.いまの銀座というものをどんなふうにご評価されているでしょうか。

端山)

もちろん、いまでも非常に魅力的です。けれども、遠慮なしに申し上げますと。現代に対応する機能がどこまで持たれているのかということ、銀座のみなさんに考えていただきたいと思います。現代に対応する機能というのは何かというと、人が存立するための媒質空間としての機能がどこまでもたれているかということなんです。媒質

というのは、存在の要件に対応して存在そのものになってくれるものですね。例えば、音にとっての空気、光にとっての空間のようなものです。エネルギーが来ると音になる。社会的には、要件に対応して人も文化も育つところ

です。
この、人々の存立を支える媒質としての機能が、銀座には今どこまであるだろうかということを、原点に戻って考えなければならないと思います。これからの都市学の要点はそこにあると思います。

Q.具体的な例を挙げていただくと、何かおありでしょうか。

端山)

まず、社会的基盤（プラットフォーム）がアクセス者の主体性の実現に対応するように整備されることだと思います。商売の場としてだけでなく、人々がそこで、自由に、十分に活動できるような Conditioned environment の整備です。

明日、つまり100年も待たないで、小さな情報から、いろいろな事象を操作、生成することが可能になるでしょう。学校、博物館、図書館、映画館等全ての情報機能、そして食べ物等物質の処理も順次アクセス者の主体において操作することが可能になる。しかし、そうなるまでの今日と明日の間の中間段階では、どこかに重力の大きな（情報機能の集中など）空間があって、少なくともそこに行ってそれを得るということになるでしょう。そこに行けば全てが揃う。積極的にそういう場所をつくるのが正しいと思います。自由な空間にその様な潜在的な機能が保たれて、思いがけないところで、思いがけないものに出会うことができる。そういう、楽しい銀座ができるというとおもいます。それが、将来の都市の入り口だと思っています。

今考えるのは、その中間段階をどういうふうにして実現いったらいいかということで、例えば、交通では域内交通、アクセス者の要望に対応して総合的に管理される域内交通も、限られた地域としての銀座では相当十分に可能だと思います。

Q.もしそうだとしたら、それが実現しそうな都市はどこでしょうか。

端山)

一つの形としては、ユーラリールという街。フランスの北西にあるあまり大きくない街ですが、ほかの都市に先駆けて、ユーロスターを引っ張ってきている。そこには空港もあり、地域交通も情報系も集まっている。これからのメディアコンバウムのひとつの形態です。域内と域外を結ぶ各種メディアが多層にそこにある。そこにいる人々、そこを訪れる人々を尊重し支援する機能空間が作られようとしている。

日本の場合は、飛行場もあるし、新幹線もある、情報系もある、都市もある、いろいろな機能があるけど、それらが無神経に全部ばらばらに放置されていてコンバウンドになっていないケースが多い。それが、飛行場の下に新幹線が入るといふ、又、道路の敷設と同時に、高帯域の情報系が伸びていく、そんな古典的な方法だけでもまるで社会的効果が変わるわけです。全てはそういうところから始まります。

Q.新宿と銀座の歩道を比較すると、新宿は歩道に流れがないと思います。また、舗道と車道の境目、高さの差が、どうみても銀座のほうが高いと思います。

端山)

単に道路が広いからいいということではなく、道路が広いというのは、その都市全体の面積の中で、人々が個々の権利として自由に使うことができる面積が大きいということです。つまり基本的権利が大きいということです。自分で持っている宅地が広いか狭いかは問題ではなく、銀座を含み日本の場合、全体として人々の空間が広々としていない、狭々（せまぜま）としている。歩道や道路というのは、非常に重要な公共の財産となる空間です。それを狭くしてもいいのかどうか、行政としてもこれを一つの基本として考えましょう。まずこういう流れもたゆたいもある広い公園のような歩道の空間を作りましょう。街並に出入りがあり、豊かな木立を風がわたるような空間

がひだを作ってそこここにある、銀座は、まだ、ミネアポリスのニコレットモールのように、シャンゼリゼのようでもありません。しかし、地権者である銀座のぬし達（皆さんのことです）がこの意識をもてば、それがここから始まることは十分に可能です。

ここで歩道率というのを考えてみます。要するに、歩道がある道路の割合です。東京の場合は全体で20%弱、総延長で圧倒的に長い区市町村道で15%以下とひどい状態です。その15%の中には、片側だけに切れ切れのガードレールがある、あれがあるだけでも歩道があるといわれてしまうその歩道が含まれている。それで、15%以下なんです。

これは、およそ人が人として居ることの権利が護られている空間ではない。生活大国などという人がいたら「まず、私達を歩道のある住宅地に住まわせてください」と頼みましょう。歩道のある住宅地を作るというのは実は日本の現状では大変なことなんです。

歩道の条件というのは、乳母車を押しながら、夫婦で並んで歩いて、向こうから来る同じ様な夫婦と、よけあわないでにこやかに挨拶しながらすれ違うことができる幅を持っていることです。そこには、並木や植木や消火栓などすべてがあって、尚かつ夫婦が並んで歩いてすれちがえるというのが、歩道が歩道である条件です。「ゆとり」などと言いたいのなら、こんな条件は当たり前になります。しかし、いま、日本でこんなのをつくったら大混乱ですよ。ほとんどの宅地がやせほそってなくなっちゃう。これまでの行政の不備、人々の問題意識の水準が私達の権利にツケを突きつけています。

都市の住み易さをはかるひとつの指標として、「クルマ社会」としてそれを考えようという提唱をいたします。それは自動車社会のことではなくて、キャスターのついたスーツケース（つまりクルマ）等を紐でゴロゴロ引っ張って、どこまで持ち上げないで歩けるか。その距離が長い社会をつくる、それをクルマ社会という。その視点では、ヨーロッパやアメリカは、相当どこまでも行けるんですが、日本は成田を降りた途端にダメです。これは、我々も苦労だけれども、足の悪い人には、車椅子を使っていなくても足の悪いひとは沢山いるから、これは非常に負担です。しかもヨーロッパの歩道の高さは低い。車道からあまりあがってない。あれは心理的にも非常に静穏です。私達の社会には、見掛けはチョイト良いけど、歩くには非常に良くないという歩道も方々にあります。特にハンディキャップを負っている人々には、このクルマ社会の様な心づかいが互いの社会の生産性のためにも重要です。

銀座も表通りには歩道があるけど、裏にまわると無くなってしまいます。これは人々の権利を守る都市としては問題です。人の歩行を遮りながら停車している車とバーの看板、狭い道に入り込んでくる車の間を避けながら歩いていると銀座もみじめです。この裏通りが無いようなふりをして、銀座通りを見栄えよく整備しても駄目なのです。施設から老人が出てきて、後ろからきた車にひかれたという、ニュースを聞くことがありますが、もし、舗道があったらそんなことは絶対に起こらない。皆さんはあまり実感されていないかも知れないけれど、歩道のない都市は人々の基本的な権利を思いがけない深いところで阻害するところなのです。

Q.都市計画や建築、そしてデザインの話をするときに、日本の場合はアクセスする側の意識の問題が非常にあると感じます。先生がおっしゃるようなある種の理想的なイメージというものには、向いているつもりなんだけど、どうしてもそこに到達しないのは何故なのかということです。日本人はどうしたら意識を変えることができるのでしょうか。

端山)

アクセスする側の意識に問題があるというご指摘とおもいますが、同時にデザイナーがアクセスの権利に対する適切な認識をもっているかという問題でもあると思います。これについての一つの回答としては、その両者において、つまり皆さん、個の主体性と権利の意識がその行動の規範になっているのかどうかを問う視点を持つことです。この様な主体者の意識、権利の意識、これを持ちましょう。ここでいう権利の意識というのは、自分の権利だけではなくて、相手の権利も含めた総合的な権利です。それが私達の社会で可能な状態にあるかということ、実は意外にそうではないんです。

近代の初頭、近代革命の権利宣言では、“他を侵すことなしに”実現する自由、権利について述べています。要するに、自分が侵されてはいけないのなら、同じ意味で他人も侵されてはいけない、つまり侵してはいけないとい

うことです。それは、“自分”と“他”というのではなく、ある一人の存在権、人格権は侵されてはいけないという原理的な話です。これが、我々の社会にあるだろうかということがご指摘の問題の根底にあると思います。

アメリカの独立宣言の権利宣言でも同じことをいっています。また、フランスの不戦憲法（1848）では、自国民が他から侵されることを容認しない、だから、同じ意味で自分の軍隊は他を侵すことはしないと宣言しています。ついでですが日本の憲法が世界唯一の不戦憲法であるというのは違います。

この意識で200年以上やってきたその歴史があつたうえで、彼らは、シンバイオシス、共生という概念を持ち始めた。日本で流行っている共生では、人は皆同じなんだから仲良く住もうよとか言っているけど、ヨーロッパの共生は、もともと違う主体者が一緒になったときにどのように住めるか、その方法論についての提案となっています。その視点が我々の社会では、大きく欠落しています。それをどう解決できるかが、ポイントだと思います。

Q.いまのお話で、日本というのは遅れていると、単純にそういうことでしょうか。

端山)

ある視点からそうだと思います。日本で最も遅れているのは、権利を尊重する意識です。宇宙から受けた存在の権利。これがどこまで尊重されているか。また自分にその権利があるのなら当然相手にも（宇宙が保証した）権利があるという、その初歩的な意識が本当に遅れていると思います。ただ、遅れてるなら、追いつく可能性もある。もし、先天的にわれわれの民族にこれが欠けてしまって全然ないんだったら、救いがないですが、遅れているのなら可能性がある。

その意味で、私は権利の時差という言葉でこれを考えます。地球上の時間に時差があるように、権利の実現状態がより進んでいる国と、遅れてる国との間で権利の時差がある。この時差という考え方を皆さんがわかってくれたら、解決の方法論に到達する手順が見えてくると思います。この地点から先に進みましょう。銀座からこれを始めましょう。人々の権利が穏和に十分に護られ、新しい文化が育っていく、その様な楽園に、何時、銀座がなってくれるでしょうか。楽しみです。

（文中敬称略）



はやまこうめい 1932年東京生まれ／1956年東京技術大学音楽学部作曲科卒／1957～1959年フランス留学（パリ・コンセルヴェトゥール）／1972年コンピュータ・アート・センター設立、国際コンピュータ・アート展開催（1978年まで）／1974年ソシアル・ダイナミクス研究所設立／1993年東北芸術工科大学教授就任、現在に至る／作品：ヴィオラ協奏曲（1955）芸術文部大臣賞／ピアノとオーケストラのためのメタポリズム（1969）芸術祭優秀賞など／著書：イメージ・シンセティクス（みずうみ書房、1983）、マルチ・ハビテーション＝定住を超えて（共著、1993）など

若い世代から見た銀座とハイライフに関するイメージについて

橋本都子

横浜国立大学講師、ハイライフ研究所非常勤研究員

はじめに

本日は昨年から約半年かけてまとめてきました、新しい世代からみた銀座とハイライフに関するイメージについて、お話したいと思います。よろしくお願ひいたします。ただし、ここでいう若い世代といひますのは、だいたい20代から30代前半まで、1960年代生まれと考えていただひてよろしいかと思ひます。

座談会形式のシンポジウムを開く

研究の最初の疑問点としては、これからの時代を担ひていくであろう次の世代の人達が、銀座という街をどのようにみているのか、そしてハイライフのイメージをどのように描いているのだろうか、こういひたことを知りたひということがありました。それを知る方法としまして、アンケートや街頭インタビューなど、いろいろな方法を模索した結果、今回とった方法といたしましては、何人かのメンバーを選出して、座談会形式のシンポジウムを開く、そういひたなかで各自の意見を聞ひていこうという方法をとりました。そのメンバーは、日頃から都市や建築に深い関心を持ひている人、または自分の生活やライフスタイルに、はつきりとした意見や思想をもっているだろうと考えられる人達を選びました。

メンバーを集めて座談会形式の討論会をやつて、自由に発言してもらひ。その様子を毎回ビデオとテープにとって記録しました。今回は、それらをもとにお話したいと思ひます。したがって、今日お話しする内容といひるのは決して若い世代の意見を全体的に網羅して、まんべんなく調べたものではなく、あくまでも、部分集合としての意見とおもひます。しかし、逆にかなり深い部分まで、各個人の意見をほり下げているものと考えております。

研究メンバーの紹介

それでは、メンバーの紹介をしたいと思ひます。肩書のみをみてもわかるとおもひますが、結果的には都市計画とか、建築、デザイン、を手掛けている人達がおおくなりましたが、なるべく様々な分野のいろいろなタイプの人を選ぶよう努めました。はじめに声をかけた時の感觸としては、銀座やハイライフということに非常にみんな関心をもっている、声をかけたひとは全員ぜひ参加したいということで、逆に声を掛けなかつた人まで、自分も入りたいという声を挙げてくれた人もいました。一人は慶応大学で環境情報の研究をしている女性です。彼女は慶応に所属しながらも、日本女子大学の博士課程にも在学しています。そして、もう一人は日本女子大学の大学4年生が2人参加しています。この2人は卒業論文で銀座をテーマにしていた関係で、今回は参加してもらひました。あと残りの7人のかたは、すべて男性です。一人は科学技術庁に勤めているかた。2人目は現在都内の不動産会社に勤めていて、六本木の都市開発研究にたずさわっている方。ご本人も六本木に住んでいるということです。さらに3人目は、照明デザインの仕事をしていて、照明計画からインテリアデザインまで幅広くを手掛けている方。4人目は、建設会社の技術研究所に勤務して、バーチャルリアリティの研究をされている方。5人目は建築計画事務所を自ら主催して、住宅から工場的设计まで手がけている方。6人目も同じく、建築事務所に勤めていて、住宅的设计を中心に活躍されている方です。最後の7人目は、研究当時は東京大学博士課程に所属しておりましたが、いまは他の大学に講師として働いている方です。

第1回座談会：「銀座カルチャーの行く末」

銀座の街の第一印象

このようなメンバーで4回の座談会を開きまして、順に1回目からその内容をご説明していきたく

思います。第1回ではまずリラックスして話しをしてもらおうということで、参加者自身の銀座での体験談や自分のライフスタイルについて話しました。いまの自分達の生活に銀座という街がどのように関わっているのか、また関わっていないならばそれは何故か。さらに、日頃から銀座に対してどのようなイメージを持っているのか、などを中心に話しを進めていきました。

まず、銀座の第一印象として出た話しですが、銀座は上質な文化を築き、舶来文化を発信してきた街なのではないかということです。ただ、いまそれが通用するかというと、若い人達というのは、高級なものを手にするだけでは何か満足できない、精神的な充実感というものを求めているのではないかという話しでもしました。2つ目として、銀座という特殊性がまだあるのだろうかということ。具体的には、銀座ブランド、そういったとらえかたが今もあるのかどうかは疑問である。街の集積としての意味は、もはや銀座には全くないと思う。渋谷とか、新宿でも同じだという意見もありました。

そして、論題はハイライフに関するものに繋がっていきました。ハイライフとは上質という意味ではないだろう。ハイライフの「ハイ」というのはどういうことかということ、自分の気持ちが「ハイ」な気分になる、そういうことではないかという意見がでました。

銀座の街は自分のニーズを満たしてくれない

さらに、辛口な意見なんですけど、銀座は自分達の生活を満たしてくれないという者もありました。実際、映画をみてから食事をしようとしても、銀座の店はほとんど閉まっている。あれをしてから、次にこれをして...というような自分の生活のニーズを銀座の街は満たしてくれない。そのようなニーズを満たしてくれるのが都会だと思っていたが、銀座はそうではない。夜の遅い今の時代に、夜の早い銀座というのは、若い人達の生活に合わなくなってきているのではないか、ということでした。

メンバーの1人の銀座の街の体験記として、子供の頃に初めて歩行者天国というものを体験した街が銀座で、なんとすてきな街だろうという感動をいまでも覚えているという話がありました。銀座は歩く楽しさをもっている街だと、歩く距離で色々な施設があって、その中に楽しさが凝縮されているこの意見を言った彼女は、以前ニューヨークに住んでいて、ニューヨークの街との類似性を感じると話していました。更に、銀座の街の領域性という話しになりまして、中でも面白かったのは、銀座には表と裏の顔があるということで、ゴミゴミとした銀座の通りは、銀座の化粧をしていない顔ではないか。表と裏、そして昼と夜に見られるONとOFFの切替え、街のONとOFFの切替えがはっきりしていると思う。そういう意味で面白い街だと思う、ということでした。そして、銀座は渋谷ほど個性を持っていないのではないかという意見もありました。例えば、渋谷と比較すると、渋谷は「シブカジ」のような言葉を生み出しているが、銀座にそういう言葉はない。そういう意味でエネルギー的な観点からは、渋谷に負けているんじゃないかという話しで、今の銀座はお店がみな同じようななつてきてしまつて、かえつてつ銀座をつまらなくしているのではないかという話しでした。

以上が、第1回目の座談会で出た話題ですが、全体的な感想としては、かつての銀座が満たしていた舶来文化に触れたり、一級品を手にいれるという欲求は、今の若者にとっては非常に当たり前のことで、そういう欲求はなくなったかということそうではないんですが、非常に日常的なものだと。それは銀座に来なくても体験することができる。そういったことは銀座にだけある価値ではなくなった。このような否定的な意見から議論がはじまったのですが、それぞれが個人的な銀座の体験記を話すうちに、銀座に対する各自のイメージというものが段々分かってきました。そうしたなかで、過去の銀座のイメージを話すのではなくて、これからの銀座に自分達はどうかかわっていくのかということをお話するという方向に議論が進み、第1回を終了しました。

第2回座談会：「僕らが求めるハイライフ像」

自分にとってのハイライフ

お互いが、最初は初対面だったんですが、だんだんラフになっていいことも言えるような雰囲気の中なかで第2回目を行いました。ちょうど「朝まで生テレビ」のような雰囲気、夕方6時ぐらいから、当初は2、3時間と考えていたんですが、いつも終わるのは夜10時ごろでした。

2回目のテーマとしましては、1回目の「銀座カルチャーの行く末」から1歩前進しまして、「ハイライフ像」ということについて話し合いました。ハイライフといったときに、何を連想するか。豊かな生活というのは各々にとってどうゆうものなのだろうか。自分の生活の中なかで充実感を感じる時とはどんなときか、そういうことを中心に話しを進めて、更にハイライフという言葉を通して銀座の街をみた

ときに、一体何がみえるのだろうか、というふうの問題を議論していきました。

まず、共通するイメージのハイライフとして、「ハイライフ」というときになにを連想するか。一つは時間の自由度という話ができました。大学の後輩に豊かさとは何かなあという質問をしたところ、その時に時間が自由に使えることではないですか、という答えが返ってきて自分も納得したということです。時間に限らず、自由度の大きさが豊かさとは非常に関係しているのではないかと。もうひとりの意見として、自分はハイライフなんていわれても、その言葉を知らないけれど、もしかしてハイクオリティのことではないかと。アメリカでいうアメリカンドリームみたいな言葉なのだろうか、という説も出されました。さらに、別の人から出た話として、昔は若いときに六本木を通過して最終的には銀座の街へいくという図式があったかもしれないが、いまはそうではない。例えば、国際的という観点から見ると、六本木の方が国際的だと思う。銀座は、以前ほどハイライフの最終地点という要素はいまは薄れてしまっている。そして、銀座という街を見て、人が面白いと感じたことはあまりないという話もありました。自分では日常生活を考えると、仕事でもプライベートでも人が非常に重要である。そういう意味で銀座をみていて人が面白いと感じたことはない、という意見でした。さらに銀座とハイライフということについて考えていくと、自分はメンバーさえそろえればどこでもよい、と。街や建築はそれほど影響力はない、という話もありました。ハイライフを街ということにつなげようとする、自分には少し無理がある。この人は、ヴァーチャルリアリティを専門にしている人ですが、ネットワークを組んで情報をやりとりしていても、その情報を得られたから楽しいのではなく、メディアを通して向う側の人間となにか面白い事ができたということが、自分にとっては嬉しい楽しい、ということでした。だから、メンバーさえ揃えればどこでもいい。やっていくプロセスが自分にとっては楽しいんだと、そういう街や建築というものはそれほどハイライフというものに影響力をもつことが出来なくなっているのではないかと意見でした。

「ハイライフ」ではなく「マイライフ」を語る

生活とは、あくまで個人で生きていること、それではない。そして、自分はハイライフではなく、マイライフについて話したいという意見がありました。それまではなんとなく皆が共通するイメージとしてのハイライフについて話していたのですが、こうした意見をきっかけに、自分の生活、すなわち自分の「マイライフ」についての話につながっていきました。そのなかの一つとして、ハイライフというのは楽しければそれでいいんだという話がありました。それは結果がうまくいけば楽しい、ということではなく、あくまでもそこにいくまでのプロセスが楽しいし重要だと。そのプロセスが自分にとってのハイライフである、そこに行くプロセスのなかで、自分がどれだけ楽しめたかということが、重要であるという話でした。さらに、自分の価値感の軸をはっきりもって、自分が何をやりたいのかをキチッとわかっているというのがハイライフにつながるのではないかと意見もできました。そして、いろいろな機会で選択できたり、自分がやりたいと思うことに対して障害が少ないこと。誰でも自分の得意とする分野はあるが、その得意分野を生かして仕事をやっていけることが、自分にとっては価値があり、ハイライフではないかという話もありました。

以上、第2回目の座談会をまとめると、初めのうちは共通イメージとしてのハイライフ像の話題でしたが、中頃から話しの内容がハイライフからマイライフに切り替わっていきました。そして漠然としたイメージとしてのハイライフではなく、各個人のマイライフを話すことにより、それぞれの価値感が見えてきました。また、銀座にハイライフがあるのかということに対しては、割と否定的な意見が多く、今の若者が求めるような生活の充実感をもつものは街にはなく、むしろ人の方が重要ではないかと感じました。そして、結果ではなくそこまでのプロセスが重要であるという意見が多かったように思いました。

フィールドワーク

「銀座のお土産は何ですか？」

第2回目のシンポジウムが終わりまして、会議室の中で話しをしていても、銀座の街のことはあまりよくわからないだろうということで、時期的には12月の中頃、ちょうどクリスマスが間近ということもあって、みんなで銀座の街を歩いてみようということになりました。

総勢11名だったので、3つのグループ3名か4名に分かれまして、銀座のフィールドワークを行いました。そのうちの1つのグループが面白い事をやりまして、田舎者のふりをしてお店に入って、銀座の

お土産は何かということを探るヒヤリングを行いました。誰に聞いたかどんな反応だったかというのが面白かったので、ここでちょっと紹介したいと思います。質問としては「銀座でお土産を買いたいです。適当なものがありますか」という内容でした。

帝国ホテルと日比谷シャンテでは「特になし」という回答で、有楽町そごうでは案内の女性に聞いたところ、非常に悩んだあげく総合案内に電話したり、いろいろとみんなで相談していたそうです。15分くらい待ってから「うちの店ではないけれども、木村やのアンパンがいいそうです。」ということで、木村屋を紹介されたそうです。有楽町マリオンでは、「うちは青山的なものを扱っているから」、銀座三越では即答で、銀座のオリジナル商品があると紹介されたそうです。松屋ではオリジナルグッズがあるということで、サンリオや不二家博物館では、オリジナルテレフォンカードとを紹介してくれたそうです。鳩居堂では、「うちの包装紙に入ったものだったらなんでもいいのではないか」ということだそうです。

メンバーの率直な感想としては、銀座としてのお土産は用意されていないという意見でした。お土産という聞き方から食べ物イメージする人が多く、更に、唯一銀座特有のお土産としてあげられたものが、銀座の風景、歩行者天国、銀座を写した絵はがきだったということです。

第3回シンポジウム「銀座経路で考えるハイライフ」

知識としての銀座と体験としての銀座

こうして、フィールドワークを終えて、第3回目のシンポジウムは、ゲストとして、長谷川先生と前田先生に参加して頂きました。まず、メンバーで銀座を実際に歩いてみて、知識としての銀座と経験としての銀座との区別があるのかなのかという話しができました。知識としての銀座とは、たとえば和光。映画に出てくる銀座は必ず和光がでてくると。多くの方は、銀座のシンボルは和光だと思っているが、それは知識としての銀座であり、実際自分は和光で買物などしたことは1回もないと、でも銀座といえば和光とってしまう。経験としての銀座を考えるとすこし違うのではないかと。

フィールドワークの印象として、銀座という名前が異常に感じたという意見もありました。これは鈴木さんという女性の意見ですが、実際に銀座を歩くと、看板などにも銀座という文字が沢山入っていて、銀座は自分の名前イメージや特殊性を引きずっているけれども、実体が伴っていないのではないかという印象も受けたということでした。

銀座はプロセスに介入できない街

また、一方で面白い意見として、銀座は秋葉原と違って完成されたものが綺麗に陳列されているだけだ。銀座はものを作る過程に介入できない場所だと思う、という意見もありました。今の自分はものを組み立てたり、アセンブリすることに興味があるから、銀座を歩いているとそのプロセスに入っていくけないという苛立ちを感じるということでした。

さらに、銀座は文化が染み込んだ街であるという印象を受けたという話題も出ました。例えばフィールドワークのときに気付いたが、日曜日に銀座の裏通の店はほとんど閉まっている。この店は日曜日に閉めていつ開いているのだろうかと思わず不思議に思った。平日にだけお店を開けていて、そこにはどういう客層が対象かという、わざわざそのお店に買いにくる御客さん、平日に買いに来るお客さんを対象にしているのではないかと。その店では、親子代々そのスーツを着て、またそこに作りに行くという構図があるのではないかと。銀座という名前は、今まで自分が思っている以上に技術とか、文化がしみついてる名前であるという印象を受けたということでした。

銀座という街のシナリオ

さらに、銀座という街が自分の生活スタイルに合っていない。銀座の街のシナリオに入っていくけない。このような話題も出ました。一方で、ハイライフということについての意見もいろいろ出ました。自分の視野に入っていない部分も含めて「ハイライフ」というものをとらえていかなければいけないという意見がありました。今の生活から一つ上を見てハイライフというならば、向上心さえあればいつでも到達できる。しかし、自分ではハイライフという少しイメージが違って、自分には見えない範囲というものがあるのではないかと。自分には見えていないけれども、銀座に足を運びたくなるようなそういう生活もあるのかも知れない。それは今の自分には見えなくて、見えていないからどうしようもないけれども、そういうものを含めてハイライフというものについて議論をしていかなければいけない、とい

うことでした。

ライフスタイルとは価値観のことである

そして、ライフスタイルについての意見では、ライフスタイルとは価値感そのものであり、その価値感をどう設定するかというのが、ライフスタイルだという意見もありました。そして、自分が目指すハイライフ像の話しになりまして、今の自分から一歩前進してみたいという気持ち、そういう感情が個人的にはハイライフではないかと考えている。今の自分から一歩抜け出してまた違う自分になる要素、そういったものが都市や生活にどれだけ転がっているのかということが面白い。ここでいう一歩違った自分になるとは、必ずしもハイの方向のみにいくとは限らず、ロウの方向に後退してしまうことも当然あり得るわけですが、ハイでもロウでも自分が何かに喚起されて変わっていくこと、そのプロセスが自分がワクワクするし、そういうものを追い続けていきたい。その危険性がスリルがあって面白いという意見がありました。

これは、前田先生がおっしゃったんですが、ここに出席している若い皆さんは、銀座との違和感を感じているようだ。その違和感の原因をかき集めて、どんなふうに違和感があるのか、なぜ銀座には他の所と違って違和感を感じるのか、等について整理してみると面白いという意見を頂きました。

第3回目のシンポジウムもこの様にいろいろ話ができましたが、どうもメンバーは銀座に距離というかある種の違和感を感じていということ。そして、ハイライフということについては、今の自分から一歩冒険してみたいというようなポジティブな感情がハイライフにつながると結論だったかと思います。

第4回シンポジウム「私の銀座ストーリー」

自分の銀座イメージマップ

最終回の第4回目はゲストに京橋に生まれ育った島田一郎さんと、現在銀座にお店を構えている白石伸生さんのお二人に参加していただきました。この時は、これまでの議論やフィールドワークをベースに、みんなの頭のなかにある程度銀座の地図が出来上がっているだろうということで、各自の銀座のイメージマップを描いてもらいました。そして、これからの銀座にどうなってもらいたいのか、自分だったら銀座でどうゆうふうに過ごしたいか、などについての話をしました。

ある1人の意見として、銀座は紳士服を扱っている店が非常に少ないという話ができました。銀座には、自分が身につけたいと思うような洋服を扱っている店が非常に少ない。洋服の選択肢も少ない。だから、街で服を買ときは自分はあまり銀座を利用していない。しかし、銀座は安心して歩ける街ともいえる。例えば、銀座は渋谷などと違って、歩きながら煙草を吸っている人が少ない。そして、彼自身が銀座を場所としてこうあったらいいなと思うのは、交詢社であるということでした。それは「よくわからない」というイメージであり、建物が古く何か閉じられているが、ポジティブに生きている人たちが語らいつながりながら次に何かするための鋭気を養っている場所ではないか、そういうイメージが自分にはあるという話でした。別の1人の意見としては、自分は銀座に来るのに沢山電車に乗らなくてはならない。自分にとっての銀座というのは、わざわざ休みの日に時間をとって来る所だということでした。しかも、自分は銀座で何か買い物があるのではなく、いつも奥さんに連れられてくる、そういう街だ、と。この人にイメージマップを書いてもらったら、電車で移動するからということ、銀座は渋谷や新宿とつながっています。自分にとって銀座でポイントになる店は少ししかなくて、あとの買物については、それが銀座にあるのか、新宿にあるのかは全く意味がない、という話でした。

それから、銀座の街は移動と滞留しかない、という意見も出ました。銀座の道から外れる時には、必ず建物のなかに入らなければならない。いらっしゃいませということばを聞かなければ、道から逃れられることはできない。そして、彼がいう良い街とは、古いことを大切に、今のことを正確に理解し、新しいことに至るということでした。それは、街だけでなく人間やハイライフでも同じで、自分がみえてきたことを大切に、自分の状態をキチンと理解して、これから先のことにチャレンジすること、それが一番幸せな生活だと思いうことでした。

そして、私の場合ですが、私はハイライフ研究所で仕事をする事で銀座にくる回数が増えました。銀座に来る目的としては、1番目に買い物、2番目にハイライフ研究所で、3、4番目として銀ブラや食事です。特に、有楽町駅は大学に行くときの通学路でもあるため、時間のあるときは銀座で少し買い物してから大学に行ったりしています。そのようなわけで、私にとって銀座という街は、なんとなく来る街ではなく、なにか目的をもって来る街だと思うわけです。

銀座の街に求めること

他の女性からの意見として、銀座と女性という話もできました。銀座を歩いていてもなんとなく自分の街ではないなあと感じてしまう。銀座の街は、昔の女性に対してはある程度その要望を答えてあげるといふ余裕があったらうけれども、今の働く女性に対しては要望に答えているかどうかは疑問がある。単純に銀座の店は時間が早く閉まってしまうという単純な問題かもしれないけど、例えば、子供をつれて安心してショッピングできるというような、街のしかけというものはまだ十分でないという感じがする。そしてこれは全体的に共通する意見でしたが、銀座の街の人達が一体何を考えているのか、銀座の街をどうしたいのか、ということが見えない。そういう情報をもっと銀座にあればいい。そして、銀座特有の価値とか、銀座が他の街よりも目立つということは、今後かなり難しいのではないかという意見もいただきました。銀座が目立てば、他の街ももっと目立ってくるだろうし、その繰り返しになるだろう。

街を面白くするのは人々の活動だ

街を面白くするのは人々の活動だと思うのですが、特に銀座などは、空間自体のハードを変えていくのは難しいだろうと思われませんが、しかし時として、空間を時間で区切ったり、あるいはその中に人が集まると、まったく違う何かが起こるといふ楽しさがあると思われまふ。銀座といふ空間がもともと持っている質を失わずに、新しい見方で変えられるのは、やはり人々の活動ではないでしょうか。現にこうしたシンポジウムをきっかけに4回ほどあつまって、銀座やハイライフについて語り合つたわけですが、実際そこでは大変充実した楽しい時間が流れました。人が集まつてそこで活動することによつて、この場所は非常に興味深い空間となつたわけだ。

銀座に関わる人達や外部の人達、そして都市にかかわるすべての人達が、自由な形で参加して議論できるような場所づくりが、今の銀座には求められているのではないかと思われまふ。銀座クラブのような話しは、以前から島田先生にもご提案をいただいています、こういった不特定多数人のが集まつて銀座について話すような機会をつくることも重要ではないでしょうか。それは、実際の空間ではなくても、例えばインターネット上でもいいのではないかといふことで「インターネット銀座クラブ」なるものを作つてはどうだろうか、といふ提案をして今日の話締めくくりたいと思ひます。今日はみなさん有り難うございました。

—講演終了—
(文中敬称略)



はしもとくにこ 1966年生まれ/1990年東京都立大学工学部建築工学科卒業/1993年日本女子大学修士課程住居学専攻修了/1996年10月日本女子大学大学院博士課程後期修了/博士(学術)/1996年10月横浜国立大学講師 現在に至る/環境心理学、住居学を専攻

終戦後の銀座・丸の内界隈の思い出

原田 弘

元警視庁警察官

はじめに

私の銀座の思い出としましては、昭和49年大成建設のそとの歩道との境の所に鉄板がありまして、そこに爆弾が仕掛けられまして、それが私は爆弾から5メートルのところのところにいたわけなんです、真ん中に柱があつたために助かりました。運命というのは、ああいう所でわかれるのではないかと思います。あまり近いところで爆発したので、爆発の音は聞こえませんでした。目の前がオレンジ色に光ったと思ったら、その瞬間大成建設の車庫の天井が落ちてきました。意識がもうろうとして、少したおれたらしいんですが、あとでどうだったといわれても、わかりません。その時は、丁度カレンダーを運ぶので、大成建設のトラックがのっかていましたが、トラックの方は、ひっくりかえりましてね。ところが、わたしはその柱ひとつで助かったわけなんです。しかし、それから少し耳が遠くなりました。

戦争中の銀座の思い出

「MPのジープから見た占領下の日本」（草思社）についてですが、私はちょうど昭和19年の3月に消防官になりました。はじめ警察官にはなりたくなかったんです。親も警察というのはあまりよくないというので、でも入らないと国民徴用令というのにひっかかるわけですね。私は一人息子で、徴用令に引っかかると浦和ドッグとか、横須賀あたりの海軍の造船所につれていかれる公算が多いわけなんです。それで急いで警視庁の消防部に入ったわけです。いまは東京消防庁ですが、昔は消防部が警視庁の中に入りまして、そこに入りました。

それで、空襲の時代をずっと過ごしたわけですが、銀座との関わりあいというのは昭和20年の1月に、銀座に爆弾がおちたから応援にいけということで、杉並から応援にきたわけです。5、6台の車を連ねて銀座に向かったわけですね。応援部隊なんていうと、いかにも勇ましいですが、実際銀座についてみると、消火栓がどこにあるかわからない。それに応援というのは、気持ちの上からも気楽なんですよ、地元ではないんで、少しくらい焼けたってこちらの責任ではないのですから。

数寄屋橋の北側のところに丸の内橋というのがありました。ちょうど銀座教会の前です、そこで水管をおろしたところ、外堀川が干潮のため水があがらないというので、文祥堂付近の消火栓まできまして、今の不二屋までいったんです。消すといってもたくさんの消防車がみないっぺんに消火栓の水を取るわけだから、水圧が低くなり水のが悪くなる。200mの距離がありますと、消防の水管というのは水圧が0になります。ですから、ちょうど200mのところまで消防自動車をもう1台つけましてもう一度水圧を上げるのですが、ちょうど150ですかね、水圧はあんまり上がらない、水の出が悪いということで、一応消すだけ消して、やるだけやりました。まあ全然消火作業もしないでかえってきたというのではうまくないのですから。

空襲の火事というのは柱も残らないんです。消火作業をしないから、完全に灰になってしまいます。当時、不二家のとなりに銀行があったんですが、あれがべしゃんこになりまして、ちょうど下が全部コクスみたいになって、それに水管を突っ込みまして消化するわけですが、それを3時間くらいやりまして、一応これが終わると。まあ、とにかく腹がへってしまっていてね、やっているときはそれほどでもないけど、終わった途端に空腹を感じまして。ホースというやつは水を含みますと非常に重いんですよ。それがかついで帰ったというのが、銀座の空襲中の思い出ですね。

戦争が終わってから

8月15日に戦争が終わった途端に、消防官が余ってしまうわけですね。今までは、どんどん募集をしていた消防官が余ってしまった。燃える所は半分になってしまった訳ですから。（笑）消防自動車も半

分焼けてしまった。ですから、人間だけあまっているわけです。そういうことで、消防の募集はストップ。それから一部は警察官になるということで。とにかく、あの時の消防官というのは、人間が居ないもので、遠くの地方から引っ張ってくるわけです。警視庁は、人数を揃えるのは大事にしているんですよ。消防自動車も数あれば良いんですよ。ですから、岩手県、秋田県から消防車を招集してくるわけです。ところが、どの県だっていい消防自動車はだしませんよ。大体、水の上がりのわるいやつを、そういうのを供出す訳ですから。それですから、現場にいったら行ったきり、もう帰ってこないというのが大分多くて、半分くらい焼けちゃったでしょうね。そういう状況だったんです。

消防官から警察官へ

それで私は、警察官になつたわけです。警察官になった途端に、当時の表町署で今の赤坂署に配置になりました。マッカーサー元帥の護衛隊になれということで。これが申告するのが大変なんですよ。「連合軍最高司令官ダグラスマッカーサー元帥官邸護衛を命じられました」と申告するわけ。そんなの一気にいえないですよ。ちょっとひっかかると、もういちどというでしょう。やり直しなんていわれると余計、ひっかかっちゃいますから。まあそういうことで、赤坂のアメリカ大使館の官邸にいたマッカーサーの護衛をやったわけです。

そういう時に、多くが特攻隊などの出身だったのです。私も警戒しているのにピストルを持っていて、本当にマッカーサーをやるうと思えばできた。陸軍士官学校とか、海兵とか、それから満鉄とか、そういうところから引き揚げたりしたものが入りして、マッカーサーの警護をやっているわけです。さんざん「出てこいミニッツ、マッカーサー」なんていっていた者が、今度はマッカーサー元帥に敬礼をして警護をしているのですから、不思議ですね。

マッカーサーという人はきびしい人で、日曜日・祭日も休まない。休んでくれれば、こっちはのんびり警戒できるのに、休まないんですね。ある時なんかは、マッカーサーがGHQから帰ってくるときに、ちょうど下の方から女性が二人がきたんです。女だからどうってことないけど、突然その女が車の前でセンスをバット広げたわけです。センスをひろげて止めちゃったわけなんです。するとマッカーサーが、車のドアを開けたわけです。それが、二人の女の人のうち一人は前で踊りを舞って、もう一人の女のひとは、お餅か何かを捧げて出したわけなんです。それで、日本を救う神だというわけなんです。そんな事があってこっちはエライ目にあいましたね。これは、どうゆう罪になるだろうと向こうさんに聞いたんです。署のほうから、いや、女のほうは別にマッカーサーに危害を加えようとしたのではないと、だからいいということで。ボヤボヤしていたのは、警察官の方で、こっちはほうが旗色が悪いからそれ以上はいわないでおきました。

勲章局の倉庫を見つける

それから、今の特許庁の前あたりに小さい2坪くらいの四角い建物がありました。そこへ行ってみたら、倉庫の中に勲章がいっぱい入っているんですね。賞勲局の倉庫だったんですね。それをみんなで宮城の中に運ぶというのでMP（米軍慶兵）がジープで警護して車の後方をついていったんですよ。しばらくたったら、アメリカの大使館にいる兵隊が、バケツをもってきたので見たらその中に勲章が入っているんです。我々に「この勲章はどういう価値があるんだ」というんです。見たら金糸勲章五級章と書いたのが和紙のなかに包んであって、それがバケツの中に入っているんです。それをみんなで分けていた。そういう日本での戦利品、日本の勲章というのは非常に価値があるというんです。ですから、いろんな勲章がでたんですよ。文化勲章もありました。

アメリカ軍憲兵隊での勤務

そういう勤務を3年くらいやりました。それから、アメリカ軍の憲兵隊の方に行きたいものは通訳の講習を受けろということで、それが6ヶ月間あるんですね。その間、日本語は絶対に使わせないということで。私は1回落ちたけれども、2回目はやっと合格しました。6ヶ月間、朝昼晩日本語を使わないで、与えられたカンパセーションのテキストを暗記しました。それで、6ヶ月で出たんです。そこを出て憲兵隊に行きたいものは志願するわけです。そうするとちょうど今の機動隊にあたるころ、そこでMPの同乗の勤務をやっていたわけです。そこで、面接試験があるわけです。わたしなんか、体が小さいからダメだというんですよ。みんな外人は2mくらいある者が勤務するのに、お前は1m50cmちょっとしかないんだから採れないんだと。お前はダメだと言われましたが、「いや、私は日本の警察官の代表としまして、勤務をしたいと思います。採ってくれなければ私は帰りません。」なんて言ってね。

そうすると、「なかなかお前はいい」というわけで採ってくれたんです。だから私より小さいのはいなかったですね。

私のことを「ヘイ、ショリー」というんですね。「ショリー」というのは、寸足らずのことですね。警視庁で習った講習の英語というのは、だいたい通用しないですよ。大体、牧師さんが教えるんですよ、だから聖書がなにかでやるから、悪い英語なんか全然ないわけですよ。（笑）それが、向こうへ行ったらひどいもんでね、辞書にも載ってない悪いスラングの連発なんですよ。憲兵司令部というのは日比谷の交差点に朝日生命ビルがありましてね、それがPMO（東京憲兵司令部）と呼ばれていて、あそこへいくとMPの方が、第720憲兵大隊というのが勝ちどき橋の昔の海軍経理学校のところに兵舎がありまして、これはキャンプバナンスというキャンプなんですよ。それで、勝ちどき橋から憲兵司令部へジープで来る、私のほうは警視庁から憲兵司令部に行く、それでドッキングして勤務をします。ちょうど吉原じゃないですが、警察官がずらずらと並んでいて、いいやつがピックアップされるわけでしょう。ですから、残っちゃったやつは困るわけですよ。まあ、残らないようにはなっているんだけど。私たちもなるべくなら、黒人兵とは一緒にやりたくないわけですよ。

英語の失敗談

一番問題になったのは、まず言葉ですよ。「ヘイカップ」というからコップを持っていったら怒られた。（笑）ポリスマンなんて呼ぶのは居ないんですよ。それから、悪い言葉がすごくて日本の比ではないですよ。日本ではコンチキショウ、バカヤロウなんてもんですが、向こうのは宗教絡みで、セックス絡みで、ちょっと日本語には翻訳できないような言葉をつかうわけですよ。そういう言葉をわれわれは最初にマスターして使ったと。そういうことで、女性のまえで使ってMPは真っ赤になって、色々女の人に釈明してくれたというのがありますね。はじめは言葉のことが一番問題だった。

初めは失敗談があるんですよ。日比谷のことを発音が悪くて「ヘビヤ、ヘビヤ」といわれまして、上野の駅のまえの蛇屋につれていったりしましてね。日比谷のことをヘビヤですよ。

「もなか」がくいたいといって、といっても向こうではハモニカの事をいったんですよ。手を口のところでこうやるから、これはもなかだと勘違いして、このMPは日本通だなあとと思って、芋で作ったもなかが当時あったんですよ、それを買いに行き、いくついるんだといたら向こうがへんなかおをしてね。（笑）そういう間違いが結構ありまして、そういう中でも我々の半数位のひとは署長や署長クラスになっちゃって、そうなると思わなくてミスしたことがないような顔をしているから面白いですね。

銀座の露店とパトロール

私たちは、銀座通りを警邏するわけですが、ストリートで固有名詞がついているのは銀座くらいですね。あとはアベニューです。これが日比谷の交差点を起点にしてA、B、C、Dとありまして、晴海通りがZになってました。それ以外の名前のない通りはあまり走るなということで、アンネイムストリートまたはアンノンストリートとってました。そして、皇居を中心にいたしまして、ファースト、フィフス、テンというストリート名になっておりました。事故を起こすとだいたい何々アベニューの40と50のストリートの中間に行けとか、そういうような指令の仕方をしていたわけです。

銀座というのは、戦後私が初めて来たのは昭和21年くらいですが、とにかく人が沢山でているんです。施設が多くて、PXも2つありますし、そのほかのR.A.A.関係のものもありますし、とにかくアメリカの兵隊と軍属と家族なんかも皆こっちにきてます。そのい上、いろいろ露店がでているわけです。その露店というのが、新宿とか渋谷や池袋とちがつた露店が出ていました。だいたい、新橋駅前広場の露店というのは、よくテレビには出ていますが、あれが純粋な闇屋のものです。暴力団系統の闇屋がでていましたね。新宿あたりでも和田組とか、尾津組とかいうのが、勢力をわけて、ブラックマーケットというのができていました。進駐軍の横流し物資などもそういうところで売りさばっていたわけです。

ところが、銀座というのはそういうところがないんですね。全然ないかということ、それでもなくて、読売新聞の本社のまえの外堀川に屋台が沢山ならんでいました。焼鳥屋などがありまして、その中のちょうど銀座教会のまえあたりですが、いわゆるドル買いをやっていました。三国人系統のドル買いや物資の横流しをやっていました。それを検挙するのに、教会のある場所から、写真をとって証拠をかためてつかまえた。そういうことがありました。

しかし、新宿あたりと比べると、全然警戒が違っているわけです。新宿は終戦後昭和24年くらいまでは警察力というのが弱く、あまり取り締まりもしなかったわけです。暴力団自体は、今みたいに拳銃もつて騒ぐなんていう暴力団ではなかったわけです。でも、新橋の松田組というのは復員軍人がおりました、軽機銃をもってまして、台湾の連中と撃ち合いなんかやりました、渋谷のほうまでいって警察官

が4人撃たれて1人殉じた例もあるんですが、銀座の方はそういうのがないですね。

終戦後、昭和21年の頃の銀座の様子

パトロールをしていても、車道を走っているから、こっちは露店のお尻しか見てないんですよ。ですからどういうモノを売っているのかわからないんだけど、向こうが指摘するほど不潔ではなかった。ただアメリカ人から見れば、不潔だったわけで、とにかく取っ払えと言われましたね。そういう訳で、露店がなくなってきましたが、露店も銀座の復興ためには、ずいぶん力があつたと思いますよ。アメリカさんのお陰もあつたけど。

それから、面白い人では、サンドイッチマンというのがありました。おもしろい恰好をしましてね、ある人は花魁の恰好をして歩いたんですね。いろんなサンドイッチが出ていましたね。それがまた人を呼んでいた。高橋さんという海軍大将の息子がサンドイッチマンやっていたという話です。

それから三越の方にダンスホールの三松というのがあつたんですよ。こちらは脱走兵を捕まえに行くというのでいったんです。なかに入って脱走兵がいないから、飲んでいたら、あの頃は二世というのは幅をきかせていましたね。二世がくると演奏を止めて、拡声器でもって「ただいまGHQの二世のダレダレ中尉が到着しました。」なんていってね。たいしたことないんだけど、そういう二世のひと羽振りがよかつたわけです。

R. A. A. というのは、はじめどうゆうのか知りませんでした。どうゆうのがR. A. A. というのか、一回松阪屋さんにきいたけど、あまりいわないんです。年表をみてもあまり触れたくないようです。松阪屋さんが悪いのではないけれど、ああゆうことは年表にも書いていなかった。それから今の和光が東京PXとって、なかには韓国代表部もありまして、GHQの検閲なんかもあそこでやつていた。

そういう状況で、あの辺は通行人が多いし、大変でした。三原橋の交番の横の旧三十間堀の処に銀座マーケットがバラックでつくられまして、これがまた大変に繁盛したわけですよ。アメリカの兵隊がそこへ行ってお土産を買うということで。そこでは、釣り竿とか、非常にケバケバしいやつを売るわけですよ。アメリカというのは、非常にけばけばしいのが好きなんですね。ペンキ文化というくらいで、ペンキを塗らるんです。昔の華族さんの家を接収すると、その中の柱の磨いてあるやつや、庭石にまでペンキを塗っちゃうんです。とにかくペンキが好きなんですよ。駐車場の石ころにいたるまでペンキを塗るんですから。

日本とアメリカの脱走兵

それから、脱走兵の逮捕課というのを29年から2、3年やりました。アメリカの脱走兵というのは違うんです。日本の脱走兵というのは悲壮感があるんですが、戦中私が新宿で一人脱走兵を助けたんです。消防官時代に、駅南口の建物を全部こわせといわれたときに、そのなかに人が居ないはずだけれども、物音がするんで行ってみると井戸に飛び込んでいましてね、それで皆ですくい上げて、憲兵隊に引き渡したけど、非常にとぼとぼと気の毒な恰好だったですね。

そこへいくとアメリカの脱走兵というのはどんなだったかというと、みんな日本の女性の所に行ってしまうんです。女性の所について女性が養ってくれるわけだから、いいんですよ。だいたい3多摩のほうにいつっちゃうんです。養蚕の部屋がありまして、それを改造してその中で暮らしている。近所の子供を集めて、英会話を教えているなんて、こういう脱走兵がいるんですね。日本とはちがうですね。その居場所はなかなかわからないけど、彼らはペンキが好きだから、ペンキ塗るわけですよ。それが目標なんですね。(笑)五日市あたりの田舎のなかで、黄色や紫のペンキをぬつてあればすぐわかりますからね。すぐ、駐在のほうにご一報がある、そして捕まえてくると、そういう仕組みになっています。

まあ、脱走兵といいますが、向こうはAWOLというんですが、無断外泊という感じなんです。ですから、捕まえてもすぐ出るんですね。日本だったら、すぐひっぱたいたり、牢獄へほうりこんだりしてするんですが、アメリカはそういうことがないんです。ときどきMPが勤務中にビールを飲んでつまっちゃうんですね、そうすると、要領の下手なやつは階級が1コ落ちる。あと3日位兵舎のなかで廊下を掃除する。朝昼晩、廊下を掃除しているわけです。トイレとかも、きれいでも一日やらなくちゃならない。それを3日位やらされます。日本の従業員でも、そういうバツをくわされました。日本人はかえってひっぱたかれた方がいいといいましたね。ドラム缶の上に立てというんですよ。2時間もドラム缶の上にたつていると、通る人がみる。そういうのはいやだということですね。こういうのがアメリカの罰なんです。

しかし、全全体罰がないかというところでもなくて、黒んぼに対してですが、夜に留置所に入った寝たところを見はからって、バケツを引っ繰り返すということはアメリカの兵隊はよくやっていましたね。

白人にたいして叩いたというのではないけど、黒人に対して叩いたというのは随分あったみたです。ですから人種差別はないんだというけどそうではない。ことに兵舎などは私もいっしょですから、メシを食べるときに、クロはクロ、シロはシロと別なんです。一緒には食べないんです。そして、日本の警察官はシロ並みだというんです。クロと勤務していて、一緒に食べていると他のMPが「お巡りさん」といって自分の方へ呼ぶ。そうすると、クロさんは寂しそうな顔をしていましたね。クロはニグロと言うんですが、キャデラックなど高級車を運転して、日本の女性の関心を買うといのはずいぶんありましたね。

銀座の犯罪

ボン引きとヤミ屋は、ずいぶんありましたね。ボン引きがでているのは、銀座1丁目の付近に沢山でいてましてね。それで私どもはボン引きを捕まえるために、店が終わる9時頃にパチンコ屋へ行きまして、カーテンの陰から見ているわけですよ。丸の内の警察というのは、まわりがオフィス街ばかりであり成績が上がらないということで、こっちの方に進出してきて捕まえるわけです。相手はすぐ車に乗って逃げますから、だいたい吉原に行くわけです。それを追っかけて捕まえました。

戦災孤児は、松屋のまえにたむろしておりましたね、出てくるアメリカ兵を捕まえたり、家族をつかまえたりしていろいろたかったりしていました。これがだいたい29年くらいまでみられたと思います。

犯罪としては、日本人同士の銃撃戦がありました。松屋の隣りが伊東屋で、そこで指名手配のヤツを捕まえようとしたら、警察官と銃撃戦になったんです。それから、銀座の犯罪は、新橋とか新宿とかに比べれば、とにかく犯罪は少ない方です。あるとしてもドル買いなんかですね。有名なのは、松阪屋の裏あたりに磯部という弁護士さんの娘さんと奥さんと両方殺されたことがあったんです。昼間ですが、近くのラーメン屋の雇い人が殺したんですね。そのときの調書を読むと、抱き抱えるようにしてプストやったら体が宙にういたとか、いろいろ書いてありましたよ。犯人は、自分の郷里の名古屋に逃げちゃいまして、親の墓参りをして、寺の住職のところに行って、自首したんですね。死刑判決になりましたが。

それから8丁目あたりですか、雑貨商殺しというのがありましたね。犯罪関係はあまり言いたくないんですよ、これ遺族の方がまだいらっしるから。いいことならいいんですがね。

面白いのは、8丁目に横井英樹がいたんですよ。東洋郵船の社長をやってましてね、そこに安藤組というのがきましてね、多分蜂須賀という侯爵がいて、その人の夫人が、3千万円の債券のとりたてを横井に頼んで、安藤組と横井がトラブルを起こしまして、安藤組の組長が横井の所にいったところが、全然相手にしてくれないわけですよ。おれに恥をかかせたというので、ピストルで撃ったんです。それで、あの人は昔から運がよかった。助かっちゃったんですよ。9分9厘あぶないといわれたのが、助かって最近のホテルニュージャパンなどでも有名になつたひとですが。そういう事件がありました。

それから、夜の女の刈り込みなんかもありました。これは、R. A. A. が廃止になったという流れからです。R. A. A. というのは、リクリエーション・アミューズメント・アソシエーションです。当時の昭和20年9月の新聞(図1参照)をみると、R. A. A. の募集が載っています。健全な日本女性ということで募集したわけです。R. A. A. で一番主に活躍したのは、大森にあります小町園とか、悟空林とかに女性を沢山いれまして、アメリカの慰安婦として一般婦女子の防波堤としたわけです。とにかく大変だったらしいですね。

銀座と売春婦

今の晴海通りの有楽町のあたりに、昔は三井三号館があったんですが、その脇のあたりが、女性の露天売春の場になっていて、そこに唾の女性が3人位いたんです。それを兵隊が面白がって、どうにかして声をあげさせようというので、足を踏みつけたりいろいろ暴行を加えるんです。唾だからそんなに声はでないんですが、苦しいんで、少し声ができるんです。それをつかまえてやろうと、待っていたんです。しかし、憲兵隊の方ではこれは売春婦なんだと、売春婦じゃだめだというので、犯罪にしなかったんですね。よくあるんですよ、強姦されても、いわゆる売春婦だったら強姦罪は成立しないんだと。よく、被害者を目の前にして、「おれはお前をみたんだ。おまえは売春婦だからだめだ。」と、アメリカ兵を釈放したというのがずいぶんあったんです。

RAの組織は、アメリカの命令でまもなく解体しました。それで、R. A. A. の人たちはいわゆる売春婦になって、有楽町とか、新宿とかに流れていったわけです。非常に気の毒ですよ。初めから、募集の時点では慰安婦ということは書いてないんです。それで随分あつまっていたわけです。それを、私たちが取り締まりやれというので、何時から何時迄の間に、どこどこにいる女性を捕まえろと。有楽町のガードの下から日劇の間にいる女、これはもう売春婦に違いないから捕まえろということで、バット捕

まえるわけです。もちろん私服です。MPと警視庁保安課とで捕まえろと。その間に、彼氏とデートをしようと待ってた人もひっかかった可能性はあります。いくら言い訳してもダメなんです。とにかくあの時間にこの場所に立っていたらダメなんだと。お前はストリートガールなんだと。つかまったのは、全員吉原病院につれていかれるんです。あそこで検査をして、そのあとのことは私はわからないけど、病気のあるものは治療後埼玉県のほうの寮にしばらく収容していたようです。

朝鮮戦争と銀座

朝鮮戦争になりますと、非常に兵隊の出入りが多くなりました。その頃、わたしは本所の警察で通訳をしていました。そこに、同愛病院というのがありまして、おもしろいことに、日本の戦犯あたりの、病気になった人が収容されてあるんです。あの時、戦犯の死体を引き取りにこいという命令があって、取りに行ったことがあるんです。わたしの相棒が行ったのは、小磯国治という戦争末期の総理大臣です。家族がこれない場合には、警察が区役所の職員をつれていって棺桶にいれ引き取るわけなんです。遺体は霊安室にありますが、気味悪くコロンと転がしてあるんです。白い布がかけてあつて転がしてあるんです。ところが、向こうさんは解剖しちゃうもんだから、解剖して完全に縫ってないから、遺体の下の部分は全部血で赤くなっている。それで白い布をとって遺体をみせて、こっちは敬礼をして遺体を受け取ってくるわけです。

朝鮮戦線がはじまってくると、精神異常をおこした兵隊が相当いたんです。その兵隊が同愛病院にはいって、それが時々抜け出してくるんです。時には、カミソリかなにかもって警察に入ってくるんです。みんなビックリして逃げちゃうんです。平素柔道が強いなんていうのが最初に逃げちゃってね（笑）、それでまあ、「これは通訳の仕事だからお前行け」なんてね。通訳の仕事だからといっても、向こうが刃物もってくるんだから気違い刃物とはこのこと、こっちだつて逃げたくてしょうがない。そのうち向こうはワァと大声をだした途端ににげちゃったんで、よかったですかね。こんな風に、本所でもいろいろ面白いことがありました。

中央署から築地警察署へ

中央署から、42年になって築地署に来たとき、中央署の捜査課長が今度はお前は敵だというんですよ。敵だというのはおかしいじゃないかっていうと、剣道か柔道でいつも中央が負けるんだそうですね。築地というのは強いんだそうですね。だから、餓別なんてろくにくれなかったですがね。築地と中央というのは、本当に違っていましたね。戦後のことなんかを調べるために、入船の方にいったんです。そうすると、だいたい、築地の警察というのは銀座の方ばかり向いているとってひがんでるんですね。そんなことないんだと、これからいろいろ書きますからと、なだめたことがありました。

それから、作家の小林多喜二のこともありましてね。朝日新聞なんか、「小林多喜二のことを書かなきゃ、きみ、批判をうけるよ」というものですから、そうかなあとって書こうと思ったら、書いても批判を受けるんだというんですね。書いて批判受けて、書かなくても批判を受けると、なら書かないほうがいいんじゃないかとおもいましてね。警察の中でもいろいろ意見がありましてね、警察学校の校長なんかは、警察というのは30年も40年も、経ったものは秘密じゃないんだと。いつまでも秘密にしているから、松本清張あたりに、尾ひれを付けられて書かれるんだと。だから、本当のところを警察自体が書いてしまえば、それで終わりなんだと、いき過ぎならいきすぎで仕方ないんだというんですよ。まあそうだなあとおもうけど、やっぱり署長はそうはいかないわけですよ。そういうことで、ああいう形の築地警察書史というのができたのです。

だいたい私の話はこんなところですよ。どうもありがとうございました。

—講演終了—
(文中敬称略)



はらだひろし 1927年生まれ(東京・杉並) / 1946年日本大学文三商業学校卒業 / 1944年警視庁消防部消防官就任、1949年米軍東京地区憲兵司令部派遣、1967年築地警察署警備係勤務、1977通信司令本部、1985年退職 / 杉並郷土史会副会長、日本歴史学会会員、日本民族学会会員 / 主な著書に『MPのジープから見た占領下の東京』(草思社)『銀座』(白馬社)など

キヤバレー・カフェー・バー
 經營者並ニ從業男女、國策的專業ノタメニ挺身セントスル士來レ
 最モ高收入衣服仕立ノ有無ヲ問ハズ國策的專業ニ挺身セントスル大
 舞臺裝置、衣裳、美術、照明、音楽、演藝、繪畫、國策的專業ニ挺身セ
 カフエー、キヤバレー、最モ高收入衣服仕立ヲ給與ス
 京橋銀座七丁目一番地特殊文施設協會キヤバレー部

図1 新聞に掲載されたR. A. A.の募集
 広告（東京新聞1945年9月5日）

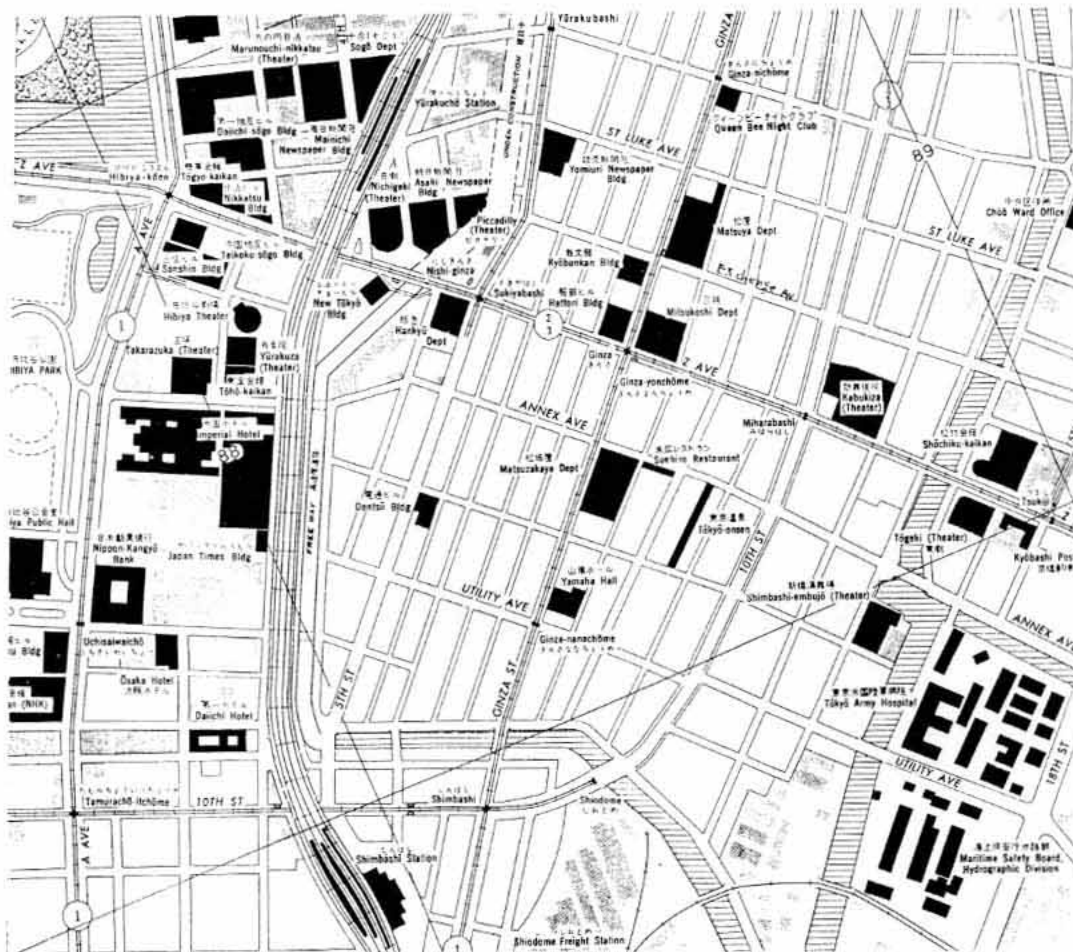


図2 占領下の銀座周辺図

田舎者から見た銀座

長澤 忠徳

デザイン・コンサルタント

はじめに

今日のテーマは、決して開き直りとか皮肉とかではなくて、いわゆる山の側から見た銀座についての話をさせていただきたいと思います。

こういう会に出させてもらっていろいろ話を聞いているんですが、自分の中の「銀座」というのが明快になっていないものですから、どうしてもまわりにいる人達に銀座ってどう、と聞くことになってしまふ。そう問いかけて、親戚の人たちの話をきいていると、基本的に僕は、やはり都会と縁がない人間だったということが判明してきました。というのは知り合いがみんな田舎なんですね。東京にいたりしても田舎から来ている。そういうわけで、いわゆる田舎から見た銀座ということで、別のスタンスから銀座を考えて見たいな…と思います。

原体験としての東京

まず、都会と田舎という対比という話では、東京に限らず自分にとって都会とは地下鉄が走っているところ、田舎とはちょっと歩くと田んぼが見えるところ、という二つの対立した環境を通して今日はお話をしていきます。

顕著な言い方をすれば、東京は都会で、富山（私の故郷）は田舎だということです。

自分の原体験から言いますが、私が東京に出てきたのは昭和47年で、生まれて初めての東京でした。その時は受験だとか大学だとか、自分のことばかりで、銀座を見に行くゆとりはなかったです。その当時の、田舎者にとっての東京というのはまず、上野駅でありまして、決して東京駅ではなかったですね。僕なんかにしますと、夜行に乗ると上野に着く、東京駅を通らないんですね。上野に着くと、山手線に乗っていきなり新宿へいったりするものですから、東京駅の姿を見ないまま1年くらい過ごしたように気がします。そうしますと、自分が東京にいるといってもあまりリアリティーがなくて、話し言葉を聞いたりそんな中での東京のイメージづくりがあったような気がします。

実は私は、2年ほど浪人をしていた時代がありまして、その時に先に大学に入った連中が、6大学なんか同士で飲み会があっても「お前は浪人しているから酒を飲むな」とか言われて、差別化をされて（笑）。そんな関係の中で、銀座という言葉は知っているけど、まだ身近な存在ではありませんでした。

銀座和光での買い物

一番最初の銀座の原体験は、とてもショッキングでありました。実は武蔵野美術大学に入ったときに、たまたま祖母が東京に出てきたんですね。その時に僕と祖母とが2人で買物に行ったんです。そして、祖母は何ていったかという、とにかく銀座へ行こうと言うんですね。その時に大事なものを忘れたというので何だと聞くと、シルクの手袋だというんですね。僕はボロボロのジーンズをはいて、浪人ですからボロボロの恰好をしていたんですが、祖母はきちっとした身なりをしないと銀座は行けないという気持ちがとても強くて、手袋がない、手袋がないといったんですね。そして真先に行ったのが和光で、その和光に入るのには手袋がないとだめだということです。それでどこかの店で手袋を買ったのを覚えています。それで和光に行きました。僕は恰好からして和光に入る恰好ではありませんからやめようと言ったけど、自分は絶対行きたいからと中に入りました。田舎者というのは、必ず親兄弟を恰好わるがたりしますけれど、僕も祖母と一緒に歩くのが恰好悪いとか、自分のばあちゃんがびしょと着物を着て決めているのに、となりに若造があるいているというような気持ちがありました。だいたい一緒に歩くのがはずかしい、そして話し言葉も全部富山弁と。そういうすごいコンプレックスをもっていました。

次のびっくりは、ウインドーの上から指を指すんですね。「これを見せて頂けませんか」と。僕は「見たら買わなきゃいけないんじゃないの、おばあちゃん」と袂をひっぱっているんですが、そんなこ

とはいいいんだというんです。大喧嘩をしまして、買いたいものがあつたらしいけど、とにかく出ようというので、ひっぱりだして出た。それから後、祖母は倒れて入院して、もう東京へ来ることはなかったです。今だにあの時、もう少し大人だったらという心残りはありますね。

親族からみた銀座

昔、わりと大きい家だったものですから、地元のお店の方ももちろんいるんですが、東京から大店さんが来られて、うちで親戚一門を集めて反物などを買うというようなことをやったんですね。祖母の親にあたる人というのは、学問が好きで、田舎を捨てて東京に勉強をしにいくとってそのまま居なくなっちゃったような人なんです。だから、彼女の中では東京というのはすごいところで、崇高さがあって、なおかつ東京から地元じゃ手に入らないものを買っていたという経験があって、自分が出掛けていったときに何度か訪れた老舗というのがこびりついていたようです。

彼女に聞くと、銀座というのは意識的には日本橋もいっしょになった東京の中心なんすね。それがシンボリックに銀座と呼ばれているだけで、銀座の1丁目だ8丁目だという意識はなかったんです。

そういうようなイメージがあって、実際に自分は話だけで聞いていた銀座と対面したわけです。これは父たちの世代に話をきいたんですが、うちの母は大阪生まれなんです。浪速っ子の大阪で町中で育ちましたので、東京と行ったり来たりしていた富山人の父よりも、都会での行動力というのは母親のほうがありました。ちょっと地図を見て話を聞くと、ひとりで町へ出掛けていく。それに対して親父のほうができる。これはひょっとしたら育ちというか、そういうものがあるのかなと思いました。

銀座にあるものは地方にもある

親父にイメージを聞きましたら、とにかく東京というのは日本の中心で、近代化のシンボルである。東京の中心で、繁華街でという、つまり全部センターになっているところに引ついていた名前なんだよという話なんです。そして銀座はという話を聞くと、親父は銀座のイメージは持っていない。要するにどこで飲んだとか、どこに何が売っているかというそういう知識は持っていない。銀座っていうのは東京のシンボルだよという形になってしまう。

じゃあということでいろいろ聞いていくと、僕もそうだろうなと内心思ったことなんですが、まず舶来様式がある。ビルがある、石造り、洋品、洋食あって、豊富な品ぞろえがあるということが出てくるんですが、実はこれがとても大きな問題になってきていて、例えば富山の町の繁華街にも戦前からある大和百貨店と言ってかなりのものがある。しかし、そういう新しいものがあるところにもかかわらず、やっぱり富山は田舎といわれるひとつのランク分けは何故なんだろうと思うと、実は銀座にある舶来様式、ビル、石造りは地方にもあるということなんすね。何も銀座だけではなかったということなんすね。つまり同じ比較する要素があるから、あつちは良くてあつちは悪いということが出てくると考えられる。

銀座には街全体の共通要素がある

そうすると圧倒的なのは、街の一角が石造りなんじゃなくて、街全体が石造り、街全部というイメージが歴然とある。つまり共通要素があるから、銀座は銀座になり得たと。逆に言ったら銀座にあつたらみんな持って行って、真似したのかもしれないけど。

少なくとも、そういうふうに見ていくと規模の問題、ボリュームといったものに圧倒的な大きさがあるって、それに対して地方の繁華街は真似はしているものの大したことはなくて、ちょっと横へ入ると普通の家があつたり、瓦屋根だつたりという世界が一方である。なるほど、だから銀座は別格なんだと。もちろんそれは東京とか、日本のシンボルの東京とか、近代化のシンボルの東京の街の真ん中ということもありますが。

田舎は銀座にボリュームで負けている

もうひとつは、実際は何人外人が歩いているのかは知りませんが、いろいろ聞くとあそこは外国人がたくさんいるというイメージがあるということも聞きました。外人が本当にいるのかというと、今は六本木のほうが多いでしょうけど。一方、田舎というのは、外人が街を歩いたりすると新聞に載ったりするくらいだったわけで、生きた外国がないわけです。めずらしいと。そういうことで俺たちの街

(田舎)にも外人が来たぞ、これは国際化したななんて言っている、現実にはボリュームで負けてしまう。日常化していることに対して、田舎は非日常化しているから負けてしまうという。どれだけ真似をしてもとにかく量で負けたんじゃないかなど。似た物は全部田舎にもあるんですが、東京の銀座は全く別格だったのは、ゾーンがそうだったりとかボリュームがそうだったりという「大きさ」が決め手になっているんじゃないかという気がしています。

銀座はなかなか行けない憧れの街

それからもうひとつは、銀座は親父もそうだし、おばあちゃんにも、とにかく憧れの街だと。東京へ行ったら行ってみたいと僕以上に思っていました。何でかなということを手勝手に考えたんですが、つまり上京すること自体が大変だったということなんですね。そうそう簡単には行けない。富山で考えますと早くなった特急の白山に乗って6時間半です。その前の状態で8時間半。そうじゃないと夜行に乗って11時間ぐらいかかって上野に着く。遠いんですね。要するになかなか会えない、行けないということで募る思いというのが増幅されていたんじゃないかと。また、その期待を裏切らないだけのボリュームがあったとも思います。これが大事なことなわけです。

最近、銀座が衰退しているとか色々な言い方をされますが、もしそうだとすると、便利に來られるようになってしまった、気軽に來られるようになってしまったというのが、地域性を普遍化してしまって、今までの行きたいけど行けない…という恋い焦がれる気持ちからはずれたんじゃないだろうかと思えます。

商品入手地としての銀座

もうひとつは、うちの祖母なんかは物を見たときに「これは銀座で買ったのよ」という言い方をしていたんですが、基本的には商品入手地という価値が銀座にあった。それだけ憧れていますから、同じ物が新宿でもどこでも売っているとすれば銀座で買ったほうが価値が高い。同じものなら、どこで買ったかということが大切になってくるわけです。

ルイ・ヴィトンをパリで買ったのか、香港で買ったのか、東京で買ったのかということにすごく近い話になってきて、これを証明したのが、いわゆる包装紙というか銀座のラベルです。つまり銀座自体がひとつのブランドに相当するようなパワーを持っていたんだと思います。なかなか手に入らないものなので、逆にいうとなかなか行けないということと合わさって、銀座の価値は、本当は銀座は持っていなかったのかもしれないけど、人々がその価値を高めていってしまった。

神話化された彼らの中に作られた価値観みたいなものがあって、それがシルクの手袋をはめていくという話につながっていくのかなと思います。なにか自分にしたら別格なんだと。あの明治生まれの年寄りにはしっかりあったんだろうし、うちの親父たちに言わせても銀座へ行くならちゃんとした恰好をしていかなければいけないということがあって、新宿へいくならポロシャツでもいいみたいな、そんな田舎者根性みたいなものがあるのかもしれない、そういうことを感じたわけです。

同じものならどこで買ったかが大切というのは、別の言い方をすれば同じビールだったらどこで飲んだかが大事だし、同じウィスキーだったらこの店で飲んだかが大事だと。飛躍しますが、水商売とすごく近いところにこのイメージの位置づけが考えられるんじゃないかと思えます。

銀座にはサービスの職人がいる

僕は前に銀座で作っている商品、産品を調べることを提案したんですが、もうひとつ調べたいなという気持ちになったきたのは、銀座がもっていたサービスの職人芸です。同じものでも、その人にかかれば違ったように見える。基本的には人の問題になっていくと思いますが、そういうことが出来る人がたくさんいたのではないかと。これは地方ではなかなか勝てないことなんですね。だからやっぱり憧れる。地方もそうなりたいと思う。それだけ金をかけたり、力をかけたりしてサービスをするということ成り立たせるには、それだけの人が集まってくれないといけないう、うまい循環が出来上がってしまった。

銀座の街には「重さ」がある

もうひとつは、街の重さというのが大きく関わってきます。これは銀座とミラノとか、銀座とパリとかロンドンとかを比べますと、パリ、ロンドンに比べると銀座というのは圧倒的に軽いんですね。

ヨーロッパのほうがもっと重たいイメージがある。そうするとパリとかに比べたら銀座も田舎なんですね。高い建物からして街全体が東京の銀座よりもロンドンやパリの方が重たい。石材とか素材感とかボリュウムとかでそういうイメージが街全体にあります。

そうすると何が違うかという、重たい街はファッションの奇抜さを街が吸収してしまう。例えば、こんなファッションは銀座だったらいいけど、富山の町を歩いたら笑われるよ…となぜいわれてしまうのかとというと、ファッションのインパクトが強すぎて街が軽いから浮いてしまう。

これに対して銀座でそこそ軽いいファッションをしても、回りが重たいから締めつけられて許容してくれる。こんな風に、街には重さがあると思います。だから田舎は軽い、都会は重い。

「3匹の子ブタ」の藁の家、木の家、煉瓦の家ではありませんが、基本的には藁の家から木の家になったくらいで田舎は止まっている。石の家まで作ったというイメージを東京の銀座には持っている。それが本物の石造りの方にはかないで、最近ではどっちにいったかという石の板を貼り合わせたプレハブにいつてしまったわけですが…。

同時に、昔は東京の下町というか郊外のほうも垣根があったらしいですが、地価が上がってきたりすると家の境目なんかに対する関心が高いんですね。これが田舎へ行くと畦道というのがあって、これは目分量で測量しているの、少しずつ動いているらしい。基本的には測量できるようになっているんですが、厳密なことという泥でやっただけですから、東京でいったら裁判沙汰になるくらいかなりの面積で変わるんです。

これに対して、東京というのは区画とかちとしていて。これがまた田舎者にしてみれば「都会は気難しくて嫌なところだ、そんな細かいことを言うんじゃない」と言いながらも、その反面、その細かさが、目分量でなくて寸法を当てる近代化みたいなイメージと結び合っ、きちっとしたのっていいよねという憧れとして成立してしまう。そういうもことあると思うわけです。

高級＝高価という概念がずれはじめた

その次ですが、銀座というのは高級なイメージがある。これは逆にいうとある種の裕福さに階層がきちっと明解に合った時代の、つまり上流・中流・下流みたいな、ひとつの社会に住んでいてもいいところのお坊っちゃまと、普通の人と、まだまだ貧しい労働者みたいな世界がグルーピングが出来ていたころの話です。

それがここへきて、80年代くらいに、完全に日本中みんな中流になってしまって、同じものを売っている店がいっぱい出現すると、高いだけじゃないかというものになってしまう。つまり、高級イコール高価という概念がずれはじめたと思います。

高級なものは高いお金を出しても当然という志向が成立していたときはよかったんですが、それがずれてしまうと、逆にちょっと今までの構造では通用しない。銀座で品定めをして、安いところで買うとか、あるいはあそこへ一回行ってきたらそれで半年ぐら地元のデパートで買ってればそれでいいということが起こってくる。

同時に、もうひとつはニュース映画みたいなものが見られる人がそうそう多くない時代から、あるいは限られた時にしか見られなかったものが、日常的に情報化して自由になってしまった。これによって、高級・高価みたいなものが、ゆがみはじめてしまった。その結果、高くてもいいんだということで成立するような経済構造みたいなものにひびがはいつてきて、銀座は安いものを売ったっていいんだというふうになると、街のイメージに合わなくなる。けどお高くとまっていると、銀座は品定めだけされて、他で同じものを探されて安いものが売ってしまうという構造になる状況が、生まれてきたんじゃないかと思ひます。つまり、銀座は変わらずとも、まわりの人達が変わってしまった。

田舎が日常で都会が非日常

もうひとつ、これは道化という話ですが、いわゆる親父たちの話をきいていても、おばあちゃんたちの話をきいていても、実際には田舎者からすれば田舎というのは日常であつて、都会というのは非日常なんです。東京にお住まいの、あるいは銀座にお住まいのかたは日常も非日常もおなじ、あるいは逆さになっているかもしれないですが。日常が銀座で非日常が遊山にでかけてと。しかし、田舎者にとってみれば、田んぼに囲まれたそこらへんの住宅街にいて、ちょっと歩いたら田んぼがあるようなところに住んでいる人からすれば、街へ出るというのはあきらかに非日常の世界なんです。そういうふうにと考えると、家というのが日常で街というのが非日常と。もっというと、田舎が日常で都会が非日常というような大きなところまで、流れがいくと思うんですが。

サーカスの道化にみる日常と非日常

最近、サーカスと道化という面白い話を聞きました。なぜサーカスに獣が出てくるか。なぜサーカスで軽業をやるか。実はあれは非日常を楽しむために、非日常に行けない人達にそれをもって来る装置なんですね。その地域の日常から非日常にトリップするために、非日常の装置を備えた物が空地にやってきて、それを繰り広げる。家にいるような犬や猫や家畜なんかが出てきてもこれは日常ですからダメで、動物は像とかキリンとか猛獣みたいなものがある。それからブランコに乗っていても、とんでもない軽業をするのは、実際自分の街にもそれがあるにもかかわらず、それは出来ないだろうというようなことをやる。ところが日常の人がテントに入る前に、お金を払って中に入っただけでは非日常感覚にはなれないということです。これを非日常にいざなうのがピエロであり道化だであると。笑いによって非日常と日常の間の溝を埋めてから、それからさあどうぞぞという非日常の世界に持っていくために道化というのが居る。

銀座を非日常にするための装置

そうすると、これからの銀座を考えていった場合、ひょっとすると銀座が非日常と日常との間に、サーカスの道化からヒントを得て、そこに持ち込んでくるような何か、装置化されてもいいのかなと思ったりもします。というのはどういうことかという、例えばターミナルであるところの池袋、渋谷、新宿あるいは東京駅といわれるようなところが、ひょっとしたら道化の役割を果たして、そして非日常であるところの銀座に持ち込んでくるということも考えようによっては成立するだろうと思います。

つまり、そこが非日常というところで勝ちを誇ってしまう。銀座はもう少し違ったスタンスのところ置きなおして、それをつなぐ道化にあたるような部分を逆装置化するということが、東京の街づくりにおいては可能かもしれないなと思います。

よく「ひと駅小町」なんて言って、繁華街からひと駅入ったところに乗り換え駅があって、そこがけっこう繁盛したりしている。これは明らかに、本格的に銀座で飲んだら、家に帰る前にどこかで飲みなおすと。この飲みなおすというのは、明らかに道化の役割を果たしていると思います。こういうものを何かセットに出来ないものかなというふうには思います。

銀座の衰退と田舎の過疎化は似ている

もうひとつは、後でみなさんのご意見も聞きたいと思いますが、今の銀座が衰退しているといいますが、今日なんか見ても人がいっぱいいて「どこが衰退しているの？」と思いました。銀座の衰退というのがあるとすると、田舎の過疎化と全く同じことじゃないかと思えます。

例えば交通が便利になる。日常茶飯事出掛けることになる。それは来るとか来ないとかじゃなくて、行き来ができるようになるということによって、そこにある特殊性というのが失われてしまう。銀座もそのように失われてしまった。だから言ってみれば、明らかに銀座が衰退するのも田舎が過疎化になっていくのも、道路・交通が完備して便利になって情報がどんどん入ってきてという理由があるわけで全く一緒です。だから、ひょっとすると田舎の過疎化を一所懸命研究すると、銀座の衰退の原因がわかったりするかもしれない。というのが今日の僕が言いたい田舎者から見た銀座の話なんですね。

結局、銀座の衰退と田舎の過疎化ということはとても似ていて、情報化や交通の発達などによって人々の行動力が向上するというところで起こってきている現象が、片方は田舎に起こって片方は都会に起こっているんだと、大ざっぱにいうとただそれだけのことなんじゃないかというような乱暴な言い方もしてみたいなと思います。

銀座も「チャチ」になってきた

先ほどの話にもリンクしますが、銀座もチャチになってきたと思います。どういう表現をしていいのかわからなかったから「チャチ」という言葉にしたんですが。実際には、銀座がどうなるかということ、銀座の人達は考えなければいけないわけですが、明らかにチャチになってきたという切り口で、そのチャチさをどうするのかということを考えてもらえるといいのかなと思います。

それから、もうひとつ関係があるのは、石造りだった、古かった、重さがあったというものに対する現代の工法として、基本的には新建材というのは明らかに軽いですね。今日も思ったんですが、銀座の駅の大理石の減り方よりも上野の減り方なんかは、重厚感で比べると新建材的なものとはとても薄くて、チャチなんです。そういうもので新しいビルの改築が行われたりしてくるようなことを考えていくと、

新しさがチャチさになって共存して、全体感としてはマイナスのイメージになってしまう。それからすると新宿のいきなり出来てしまった街のほうが、チャチではあっても同じように年をとっていくというのがあるかなと思います。

面白いのは、高島平団地の高齢化と、なんと秋田県の大湯村の高齢化と同じようだと聞きましたが、そういうようなことで、もし新しいものと古いものが同居するなら、それなりのプロデュースの仕方は銀座にあるだろうと思います。そしていきなり作ってしまった新宿みたいところは、おそらくは同じように老朽化して行って、金をかけたところは生き残るけど、安かったところはだめだというのが歴然として、チャチさというのがだんだん見えてくる街だろうと思います。つまりもう少し長いスタンスで考えた時に、やはり本物素材を使ったほうが、結果的に資産価値があって、最終的には儲かるんだということでしょうか。

「売り」の職人芸が消えた

その次に、もうひとつつきたいのは、やはり売りの職人芸が銀座には消えてしまったんだろうなということです。イタリアでたまにあるのは、むこうはけっこう古いお店は地下にストックルームを持っていて、いいお仲間になると下へ下ろしてくれて揃えてくれる。

昔、何かの講演で聞きましたが、ウィンドーでネクタイを見せてくれないかと言ったらいいんです。そして、どうぞと地下に案内された。そこには、大きなテーブルがあって、そこにたくさん他のネクタイやシャツやスーツなどを出してコーディネートしてくれて、あなたこれ欲しいでしょと言われたそうですね。やはりそういう売られ方というのがあって、すごいと思います。

逆に言えば、そういう売り方があったんじゃないかということです。つまり、職人芸的な売りというもの、ある種の魅力だったんじゃないか。そういう売り方が、同じものを正々堂々と売って、ここで買ったら間違いないという印象を売ったんじゃないか。

だから、いいことをばかりいうお医者さんは信用できなくて、ここはわからないと正直にいうお医者さんは信用してしまったりという人の信頼感覚に対応するには芸がいるだろうと思います。かつての銀座はこういう芸を、街が装置として持っていて、それがあつた種の街のアイデンティティと一体化していたんだろうと推測するんですが、それをどう復元するのか、それともかなぐり捨ててしまうのかという時期に、いま来ているんじゃないかという気がします。

銀座の「一店一品」による街おこし

大分に有名な街おこしがありまして「一村一品」というんですね。そう考えると、どこで売っているものでも、みんな同じなわけです。ですから銀座は「一店一品」による街おこしじゃなければだめなんじゃないか。そこのお店がそこでしか売っていないこの一品というのを必ず銀座は持っている。これを銀座の商店街がみんなで言い合ってキャンペーンを行う。少なくとも一村一品の街おこしではなくて、一店一品の街おこしをやる。そしてその一店については職人芸の売りを復活して欲しいなと思います。そういうのでもない、何か今までの銀座とは違ったものとしての銀座になっていってしまう。今までを大事にしていこうと思ったら、そういう手法があるのかなと思います。

ギンザ再生…田舎者があこがれた高品位な街へ

それで銀座再生という話になりますが、いわゆるカタカナのギンザというものが次なるギンザだと仮にします。今までの漢字の銀座からカタカナの銀座。本当は逆だと思うんですが。

つまり、銀座再生ということを考えると、田舎者が高度経済成長のからみで出てきてしまって、子供を東京で産んで、東京に住みつくような人間・人種が東京にたくさん生まれてくる。こういう人達を銀座の人は都会人だと思てはいけないということです。やはり差別化しないといけない。育ちとか根は田舎ですから、東京で生まれた人とは根本的に違う。それは何故かという、僕は親父とかお袋を見てわかるんですね。新しい状況の中に、風景の中に入れると、生き生きするのはどっちかということがわかってくるわけです。苦にならないということです。

たとえば、カミさんの母親はずっと着物なんです。そうすると着物を着ることが苦にならない。昔からそうだから、何ともないと。それに対してうちのお袋は先生でしたら、着物を着るということは逆に大変なんです。そういうようなちょっとした習慣性がかなり大きく影響してきます。だいたい一般大衆感覚でいえば正装してフランス料理を食べてきても、家へ帰ってお茶漬を食べようということになるわけです。だから、東京はどうかわかりませんが、田舎のひとたちが都会に憧れたエピソードですけど、

畳の部屋に絨毯を敷いて、その上にベッドを置いて、洋風の暮らしをしてみたという世界だったんです。そうすると、現実には壁も天井も和室なんです。床だけだ絨毯を敷いているから洋間風なんです。布団を敷いて寝るのは田舎者だというんで、ベッドを買ってきて寝ると。そういうようなところが現実には田舎者感覚の世界にあったと思います。そういう人達が東京に住んでいるわけですから、東京に住んでいるほとんどの地方からきている人は田舎者というふうには扱わないと街づくりは失敗するよと言いたいですね。そして、ギンザには、田舎者がたくさんいる中でも街づくりの品位みたいなものをプロデュースしてもらいたいというのが、田舎者から見た銀座への気持ちなんです。

—講演終了—

講演後の質問・意見から

銀座は地域がブランドである（長澤）

田舎っていうのはすごく面白くて、僕が地方の講演会に行くときよくいうのが「イトーヨーカドーからって都会になったと思うなよ」というんですね。スーパーと百貨店は違うんだと。片方は百貨店と呼べるけど、片方はスーパーが立派になっただけでしょうと。そういう言い方をすると田舎の人は、すごく嫌な思いをするけれどもゲラゲラ笑うわけです。自分の中でもよく分かっているんですね。要するに、三越のレットルでお中元を送るけど、ダイエーで送ったら何か格好がつかないなという気持ちはある。それだったら、まだ郵パックで送る産地直送のじゃがいもの方がいいじゃない、みたいな判断はまだあるわけです。

そういう意味での、銀座ならではのというアピールが足りないような気がします。同じ支店が新宿にあっても、同じ包装紙でも銀座のレットルが貼ってある。そういうささやかな小さなプロデュースが、マニアックな凝り性にとったら案外大切なことなんです。そういう頂点ができると、まわりをしてみればライバルができるわけですから、まわりもあの手この手でやってきますよね。これが逆に銀座を持ち上げる効果を持つという戦略に持ち込めるんじゃないかと思います。地域がブランドなんです。場がブランドなんです、という戦略です。

Q. 今日のお話の中で、最初に都会と田舎ということで、地下鉄があるとか田んぼの話などもあって、そのあたりは分かったのですが、それでは「田舎者」というと、長澤さんはどういうイメージですか。

長澤)

やはり洗練されていないですね。はっきり言えば、改まったというか、つまり都会人の憧れに対する自分の感性があって、それを実現してみようとするときにドキドキする人というのは田舎者じゃないかな。と言うと、東京の中の田舎者もいると思います。

例えば伝統的な江戸っ子なんかもけっこう田舎者ですものね。僕等の感覚で東京にも田舎者がいると。東京の田舎者なんです。いわゆる遅れた地域の田舎者じゃないです。空間的なものですね。

O. 銀座がチャチになっていると話で、確かに今そういうのはありますが、過去にもしばしばあったんですね。不景気になると必ず。しかし、そこには銀座的フィルターが働いているんですね。景気のいいときはいいけど、景気の悪い時はそのバリアに穴があいてきて、今はまさにバブルの崩壊で銀座も相当ボロボロになっている。ところが本来、銀座的なものを期待される人にとってはそんなものは銀座にあってはいけないと思っているわけです。今までは景気が少し回復したり時間が経つと、自然にそういう人達が商売をしたりして銀座的に馴染んで、ちゃんとフィルターが修復させているんです。ところが果たして今度は、果して今までのような一種の浄化装置が働くかどうかというのは疑問があるんです。それは例えばオイルショックの時なんかは明らかにそのようなことはあった。その時は自浄作用みたいなものが働いて、ある程度排泄されたわけです。その前の昭和30年代にもあったんですが、だから3回か4回あった。それは幸いにしてそういう装置が働いたということなんです。今度は悲観的ですし、危機感を持っているんです。

O. 僕は長澤先生のお母さんは田舎者ではなかったとおもうんです。わりあい地方都市の人の一部に、洗練された人はいるんです。かえって、ゆとりがある人がいるんです。例えばファッションに対する

感覚は、だいぶ前に聞いたんですが、甲府が一番でした。とにかく地方都市の県庁所在地あたりは、割合ファッションにお金をかけているというデータが出ていたんです。田舎にも割合限られた人ですがオシャレな人がいるんです。そういう人達が銀座に対応できた人なんです。そういう人達に比べると、東京に住んでいるけど全く対応できない人は大勢いるんです。そう考えると、それに耐え得る街でありつづければいいじゃないかというふうな言い方もできる。それは割合特権的な街。いつか僕が銀座は普通の商店街の最高であればいいという言い方をしたけれども、それはどういうことかという、銀座はもうそんなに絶対的な地位にあるわけではなくて、ある程度相対的に見て、銀座を相対化して考えるということの裏返しで。長澤先生のお話で芸が必要であるとありましたが、絶対的であれば芸も考える必要がないわけです。いったん危機感を持つんじゃないかとか芸を持つというものは、絶対化していないわけです。その話とさっきの特権的な人達、田舎に住んでいながら田舎者じゃない人達を相手にすればいいじゃないかというのは、相反するかもしれないけど、意識しながら、なおかつ相対化して見ながら、ある種の限られたクラスを狙い続けるという、複雑な論理構成があるような気がします。

0. さっきのお話の「一店一品」での一品の“一”を逸材の“逸”にすれば面白いですね。

長澤)

なるほど。「一店一品」などと提案をしたわけですが、この時につくるものについては、ちょっと一言あるんです。つまり、「あったら便利なもの」というのを銀座は作ってはいけません。あったら便利だけなくとも不自由しないものをつくらなければいけません。徹底的に。生活必需品みたいな、なかったら困るようなものを銀座は作っちゃいけません。要するに日常性の高いものをつくってはダメ。あったら便利だけなくとも全然不自由していない、なのに銀座は必死になってつくっている、そういうフシギなものを作らなければだめです。

0. 銀座ブランドというものを認定すればいいんですよ。評議会みたいなものをつくって、池田弥三郎みたいなひとが、審査員になって、そういう人達が銀座をねり歩いて、これは銀座だというのが“ジズギンザ”みたいな、選ぶシカケが大事なんです。

長澤)

「一店一品」をやる場合は、選ぶ人も大事ですが、つくる物も大事で、それがいわゆる変でないといけない。つまり、これですよといったときに、普通のひとがあっそうかと思うくらいで分かっちゃいけない。ヘッーというくらいのレベルで揃えないと、アッというまに流通が入ってきて、アッという間に類似品で全国を埋めてしまいますから。あつたら便利だけど、なくてもぜんぜん平気というのでないといけない。これはこれだというくらいに言って、わからない、わからないという謎ときがあって、選んでいる人達は一般大衆に比べれば宇宙人たちだから、わからないの？、ということに対する説明がない。とにかく銀座に来て見てごらんというくらいでないといけない。

以上
(文中敬称略)



ながさわただのり 1953年生まれ/1978年武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒業/1981年英国王立芸術(大学院)大学修士課程修了/同年帰国して事務所を開設、デザインの仕事を始める。デザイン・アナリス・インターナショナル(英国)のディレクター・日本代表、英国王立芸術大学学術顧問等を歴任。武蔵野美術大学講師。1993年より東北芸術工科大学助教授を兼務。(有)長澤忠徳事務所代表取締役/デザイン・コンサルタント。

銀座と老舗

園田榮治

日本エムアイシー株式会社 代表取締役会長

コーポレートアイデンティティと江戸の世界の共通点

かつて、老舗について少し勉強したことがありました。どうしてかといいますと、広告会社に所属しておりました当時、C I（コーポレート・アイデンティティ）が極めて流行りました。そのコーポレート・アイデンティティをもとにして、地域開発の仕事などに広まっていきまして、そういうこともやらせてもらっていたということです。

そのC Iという言葉が入ってきたときも、私は英語はまるきりだめですが、「なんだこれは」というのから始まって、結局行き着いたのは、私が江戸の世界に少しばかり当時の仲間の中では古いことを知っていたものですから、社是とか社訓とか、そういうものを調べるのが重要じゃないかということになりまして、見はじめたわけです。

本も随分買いました。当時の古文書などを集めて、一所懸命読んだり。その時に、なるほど老舗というのはこういうものかということを感じたたった一つの結論は、要するに書き残されているものの中でたったひとつの真理みたいなもの、「顧客第一主義」ということでした。

東京ディズニーランドの演出と顧客満足度

その後、私は電通を辞めまして今の会社になったわけですが、そのあとに出てきたのが、例の「CS」という言葉。要するに「顧客満足」ということです。

私がこれまでの仕事の中で一番大きな顧客満足に目覚めて、なるほどと思ったのは、東京ディズニーランドです。この仕事は、もう30年以上にもなりまして、東京にディズニーランドを連れてくるというお見合いの企画書も手伝いましたし、いろんなことをやりました。最初は日本の技術をもってすれば、何も輸入してこなくても日本でつくれると思っていましたが、ある日忽然と180度転換しちゃったんです。これはとても叶わないと。

その、とても叶わないと思った一番の原因は、「演出力」です。演出力に関してだけはとても叶わないということを痛感しました。

「サービスとは何か」というマニュアルを彼らは持っていて、彼らの演出力のもとになっているわけですが、サービスというものを突き詰めていくと、要するに顧客満足度ということなのです。ということは、江戸時代にもう開発されていることを今から30年前にディズニーランドがやって、それを日本が輸入してきたわけです。そして私たちは、マーケットというのは「顧客第一主義」でやるんだと教わりましたし、お客様は神様ですという言葉になったりしたわけですが、本質的には変わっていない。江戸時代にもう既に開発されていることだということを感じました。

江戸は大衆消費社会であった

さて「老舗」ということばについては、これは私の勝手な解釈ですから、あとでご議論をいただけることになるとは思いますが、日本は300年、400年も前に大衆消費社会というのを江戸時代に作り上げていて、世界中にこの例はないのだそうです。

おそらく、大衆が貨幣経済、商品経済の中で、江戸という街の中で、しかも江戸という街自体は何の生産もしていない消費都市である、そういうところに住んで、各地から集まってきた人達がなんとか食っていけるだけの余裕をもった100万都市を、300年前につくり上げたというのはすごいことです。

それを自分の国のことは後ろを見ないで、よそから入ってくるとさあ大変だということで、C Iだとか、

CSだとかといって騒ぎ立てるとするのは非常に残念だと思ったことがありました。

そこで今回お招きをいただいて「銀座と老舗」ということになるのですが、これは大変だと思うと同時に、メンバー表を見てびっくりしました。これはプロのみなさんだと。それでも少しは勉強しなければと思って準備しましたのがお手元の資料です。それを、ご覧いただきながらお話をさせていただきます。

これからのオビニオンリーダーである20代が考える銀座イメージ

図1に「オビニオンリーダーたち」という資料があります。

いま私が大学で教えているのは、右に付けた3つの黒マルのうち、下のマルの20歳くらいのところです。この部分が第2次ベビーブームの階層ですが、平成7年にいまの20歳の人は左のほうに斜めにおりていきますと、昭和50年、1975年生まれの人が20歳。この人たちが途中で家庭内暴力だとか校内暴力だとか、いじめがずっとあった世代なのです。この人たちが物心ついたころの20代はクリスタル族で、その上のほうは夕暮れ族。窓際族はちょうど55歳くらいのところ、つまり1980年というふうに見ていただくわけです。なぜこの「オビニオンリーダーたち」を見たかといいますと、第二次ベビーブームの人たちが、これからオビニオンリーダーになる。マーケットリーダーといったほうがいいかもしれません。

真ん中の黒マル。今45歳から50歳に黒マルがついていますが、これが第一次ベビーブーム。昭和24年から25年に生まれた方々です。正確には堺屋太一さんの「団塊の世代」では昭和23～25年までの生まれの方。この方々がちょっと減っているはずですが800万人いて、何々族というのをずっと作ってきた人達なのです。それがいまマーケットリーダー、オビニオンリーダーの地位におつきになっている訳です。

なぜこれを持ち出したかという、20代のところにあたる学生たちに、大学の講義の際に1回に出て来るのが100人くらいいますが、「銀座」という言葉からどういうことを思いつくかというのを書かせてみました。「語感連想法」というのがありまして、何でもいいから連想する言葉を一言だけ書く。そして「1分」待って次の言葉を書けというふうに4つか5つ言葉を出させるのですが、その語感連想法で銀座の方には申しわけないのですが、どちらかという若者からはあまりいい言葉が出てこないのです。ただその中で4、5番目くらいになりますと「老舗」という言葉が出はじめます。ということは、銀座には老舗があると若者には理解されているなどいえます。

一番多かったのは「大人のまち」でした。大人のまちということは、裏返していうと年寄りがいくところということで自分達とは関係がない。自分達がもし行くとすれば、ついで行くところであって、目的に行くところではないという感覚でした。それから「伝統」、「高級」、「関係ない」というのが出てきました。これが1970年～75年に生まれた第二次ベビーブームの人達。この人達がこれから社会に出てくるわけですが、持っている感覚のようです。

また、私も以前に3つほど地方の駅前銀座の開発、再開発の仕事をやったことがあります。その時に言えたのは、銀座は日本中の繁華街のお手本であり続けると思いますが、〇〇銀座という言葉自体はもう地方ではダメで、本当の日本の、東京の、銀座がこれからのお手本になるのではないかと思います。

吉宗と近松門左衛門のケンケイ

図2は、マーケティング関係の人たちと戦後の50年間をお話するときに使っているものです。実はこういうものを考えたのは、私は歌舞伎の話などをすることがあるのですから、しょっちゅう江戸時代の話をするのですが、本当のことをいうと江戸時代の話が一番気が楽です。どうしてかと申しますと、誰も見たことがないわけで、何を喋っても大体大丈夫。もっとも、今日はそうもいかないですが…。

例えば、このあいだビックリしたのは、近松門左衛門についての話をしてくれといわれました。どうして近松門左衛門が出てきたかと聞くと、NHKの吉宗に近松門左衛門が出て来るというのです。これには驚きました。吉宗と近松門左衛門は、私たちの感覚では全く結びつきません。一方は徳川御三家の大大名。しかも將軍家を継ごうという家柄。他方は元武家の出と伝わりますけれども「河原乞食」といわれた興行の世界。とても関係があるとは思えません。ただ、なるほど会おうと思えば会えたかもしれない、同時代の人ではあります。けれども全く関係がない。そこで、前々からこういう図を用意しております。

図2を見て吉宗という人はいつ生まれたのかと申しますと、元禄の少し前に生まれて、亡くなったのが延享の終わりか宝暦のはじめ、年齢は60才半ばだということがわかります。その時に近松門左衛門の線を引きますと、吉宗のちょっと上の所に出てきて、あんなほど同年代だというようなことがわかるわけです。今後このような資料のCDROMを出そうと思っていて、こういうものをつくる仲間

を集めたいと考えております。

ついでに申し上げますが、よく江戸時代の話をする時、元禄とか、享保とかいう言葉がでてくるので、たいていの方はいやになってしまわれるようです。これは覚えてください。図2に楕円形で「慶（ケイ）寛（カン）明（メイ）元（ゲン）享（キョウ）宝（ホウ）天（テン）化（カ）」とあります。ケイカン、メイゲン、キョウホウ、テンカというのは、ともかく誰でも覚えやすいので、10回くらい唱えていただくと覚えていただけると思います。

だいたいこれが30年おきで、しかもこの慶長、寛永、明暦、元禄、享保、宝暦、天明、文化、この時代というのはエポックの時代になっていますから、比較的覚えやすいと思います。

老舗（シニセ）の語源について

老舗に関心を持ちました時に一番最初にひっかかったのは、老舗ってどうして「ロウホ」と書いて「シニセ」と読むんだろうということです。それが、図3にある「風姿花伝」です。風姿花伝の中にはニセル、ニセゴトとか、シニセルという言葉がたくさん出てきます。この中に「よくシニセたらんは、幽玄（いうげん）のものまねは幽玄になり…」と、このシニセという言葉が私の知る限りでは本当に語源なのだそうです。後ろから2行目に「ただ似せんとばかり思うべし」とありますが、要するに似せていればいいということをも風姿花伝がいつているわけです。

風姿花伝はシステムマニュアルである

風姿花伝が書かれたのは、600年も前のことなのですが、観阿弥・世阿弥親子。川瀬一馬先生のお立場は観阿弥が本当に言ったことを世阿弥が書いたとおっしゃっていますが、私はどうも違うのではないかとかねがね思っています。

木村尚三郎さんのお話にも、だいたい世の中の後世に残るもの、老舗の家訓だとか、老舗の家風だとかは初代が何も残さないものである。2代目、3代目のところに偉い人がいると、その人が自分がこう考えるということも含めて、先代が、初代がそういっていたと言って書き残す。考えてごらんならい、キリストも仏陀も孔子も何も書いていない。「師曰く」と言っているじゃないかと（笑）。そうだなと思いました。そういう意味でも、世阿弥は自分の方が観阿弥よりもひょっとすると能力があって、特に書き残す能力があって残されたのがこれではないかと。川瀬先生のお立場は違います。先生は明らかに観阿弥が書いているとおっしゃっているのですが、ちょっと意味が浅くないかなと私は思っています。

ただ、観阿弥・世阿弥親子というのが実に偉かったと思うのは、システム・マニュアルを残したということです。それが「風姿花伝」です。このシステム・マニュアルを残すということが、後世に残る老舗の最も重要なことではないかと。そのシステムマニュアルの中に、よく考えればわかったような気もするけれども、ちょっとどうなのかなと思わせるようなコンセプトにかかわるキーワードがあるんですね。それが、風姿花伝の場合には「花」だと言う。システム・コンセプトを「花」といって、システム・マニュアルを残したということです。

型の切り詰めと高級化

観阿弥・世阿弥親子がもうひとつすごいことをやったのは、型の切り詰めと高級化ということです。型を切り詰めるというのは、凡庸な師弟が後を継いでも、すごい装束をつけて「面」をかけて、すっと立ってなるべく動くなど（笑）。これは誰がやってもある程度の恰好がつかます。実はこのことを徹底させたのはもっと後の秀吉によることでもあるのですが、ともかくそれを、こちらから見ていてわからない奴は、お前の方が悪いという、顧客を「裸の王様」にしてしまったことはすばらしいことだったとつくづく思います。そして、どうも老舗の家訓の中には、それに近いものがずいぶんあるようです。この、逆説的なものの言い方をしているところがたくさんある。日本の文化の中では、この逆説的なものというのは多分に好まれるような気がします。

もうひとつは高級化です。加賀錦なんていうのは、当時は1ツボいくら。ツボといっても鯨の1寸角ですが、今の金額でいうと1ツボで100万円かかるなんていうのを装束として使っている。それを身につけることによって、もうそれで圧倒されて、ほかのものは全部省略してしまう。あとは想像して下さいということです。

そして図3の左側「年来稽古の条々」をご覧になっておわかりのように、七歳は後に六歳六月六日目から稽古事は始めろという風習が残りましたがけれども、七歳、十二・十三歳、十七・十八歳、二十四・二十五歳、三十四・三十五歳とずっときて、「物まね条々」これはそれぞれのものまねのやりかたが

あると言って、問答形式で、これは観阿弥に聞いたら、親父はこう言っていましたという形で、自分が言いたいことをここに並べている。

それから散楽・猿楽の歴史でハクを付ける。老舗の中には藤原なにかしの出であるとか、元は大名の出であるとかいう系図が残っています。そして、奥義ということで芸能の本質を説いて、「か様の万物の品々を」というこの部分は、歌集という中に出てくるのです。

老舗やC I計画の勉強をしたときに、C Iの3のところC I計画というのはこういうものだというのが出てきますが、これは江戸時代に、あるいは室町時代にすでにやっているということでした。

時代は専門店指向にある

図4は議論的になるところだと思います。マーケットというものを考えて、広告屋が無から有を掴んで出すかのごとく、天下国家を論じていくためにはいろいろなことを考えなければならない。そうしたときに少しは説得性があるかなと思うことのひとつにこの図のような概念整理をしてみます。

左上に希少・変化というタイトルがあります。例えば、ファッションのことで考えていただくと、希少性がある非常に変化しているファッション。そういうのは原宿とか渋谷でやっている人達。昔で言えば元禄時代のように、いわゆる「歌舞伎(傾き)もの」ということになりましょう。そういうブティックで作られるものは希少変化の対象になるわけです。ところが、変化・大量というところになりますと、ここでは変化も起こってなければいけない。つまり流行も追ってなければいけないけれども、ある程度の分量をこなさなければ儲からないという状態です。これまでの百貨店の業界ですね。そして、大量・安定というのは、量販店のレベルですが、極端に言えばシャツなんていうのはL・M・Sと3つあればいい。あとは体の方で合わせる。そうすると、ブティックは起動力とか変化に対応した演出力が効いてくるし、変化・大量の百貨店のところでは企画力とか計画力、あるいは予測力というのが非常に重要な要素になってくる。大量・安定のところは資金力、価格力になるのかもしれない。

問題は、今マーケットはどうなっているかと申しますと、図4の矢印の方向に動いているということです。つまりブティックは、いつまでも何だかわけのわからないものを作ってもしょうがないから、少しでも量のはけるもので、しかも変化に対応して売れるものを作りたいと思いますから、百貨店指向にならざるを得ない。

量販店の方も、大・中・小3つくらいでやってもしょうがないので、少しでも付加価値の高いものをつくって売ろうとするから百貨店方式になる。

百貨店は、かつてはメディア力があって、百貨店に行けばワンポイントですべてのことが満足されたわけですが、今は百貨店の包みで何かが届くと「ああ何か来た…」というようになってきている。「サエグサ」さんの包みで届けば大変いいのですが(笑)。百貨店も困ってしまっただけで結局右に動かざるを得ない。希少で安定なものは何だろうとならざるを得なくなる。つまりそれは専門店なのですが、キャラクターグッズなどもここに入るのかもしれない。

専門店として生き残るためには

ただ、専門店あるいは老舗として生き残るためには、情緒的な領域になっていくようです。理屈でないものがそこに存在している。その理屈でないものは何かというと、前提としてそこで売っているものや、そこで出す料理、そしてサービスが本物であるとしてのお話ですが、とにかく有名だというのが必要です。そうするとその有名だということの中を分解してみると、それは高級であるか、希少価値であるか、時間が経っているか、この3つなのです。

しかし高級にすることはいくらでも出来るんですね。高級なものさえ集めて用意すれば、それはそれでいいはずなのですが、それに希少性があるか、時間が経っているかのどちらかを用意しないといけない。そうしないと、老舗の専門店というのは成立しないというのが、当時の私どもの結論でした。

地域開発に必要な要素

地域開発の仕事を請け負うときに、図5を見ていただくと、一番左側に地域開発の時に我々がいつも呪文のように唱えて、このうちのどれかを作らなければだめだといっている「然・史・食・道・楽」というのがあります。一番上は自然です。二番目は歴史です。三番目は飲食です。四番目は三道楽です。五番目は、興行物を含めた音楽です。この5つのうちのどれかの組合せで、3つ以上ないと地域開発は出来ませんよと説明をすることになっています。

先程のお話と論理が似ているので申し上げるのですが、このうち人間の手ではどうにもならないもの

が2つあります。自然と歴史です。どんなことをしても富士山は作れない。どんなことをしても歴史は時間が経たないと出来ないんです。ですから何よりも重要なのは、時間ということになります。

この歴史的なことか自然的なことかのどちらかがあれば、あとは食・道・楽の3つのうちのどれか2つで大丈夫です。ついでに申しあげればいかがわしいものがないと地域開発はできません。それから興行系のもの、出し物系のものを開発なさったらいかがですかというので、例えば何々祭りをやりましょう。そうすると三道楽と音楽がそこに一緒に入ってくるわけです。

老舗には神話と儀式が存在している

しかし、いわゆるモノの系統のものはダメなんです。例えば箆が名物だといっても、何もそこまで行かなくても箆ならこっちで注文すればいいという話になります。しかし、地酒のいいのはそっちに行かないと飲めない、飲ませないということになればこれは神話になります。結局、老舗には神話と儀式が存在している。それは風姿花伝と全く同じことをやっているんだと。

おそらくこの風姿花伝というのは江戸時代には公表されていませんでした。ただ、江戸時代から老舗、あるいは豪商といわれている人達は、お能拝見をしなければならぬので、お能拝見のために能楽の素養は持ったはず。したがって素人に対してはお稽古をつけています。そのお稽古の中では、シニセルこと、ニセルことが重要だということをさんざん言われただろうと私は想像します。だから老舗ということばになったのだと思います。

今ここで申し上げたかったのは、ブティックとか量販店は、百貨店の方向を目指します、だから百貨店は行き詰まってしまって、専門特化する方向にいかざるを得ない。そして時間が経てば老舗に成り得るのですが、その老舗の本当の力を今、三越さんとか、高島屋さんとか、松阪屋さんを出していますか、ということが別の問題として存在するかもしれません。

消費マーケットにおける寡黙の価値

図4の軸線をどうして斜めにしてあるかということ、直行した概念かどうかは何とも言えないからごまかしているのですが、結局他の言葉に言いなおしてみると、「ハレとケ」です。この「傾き者」のところはハレで、下が日常のケになります。饒舌と寡黙とありますが、どうも百貨店というのは、それ自体がメディアであるというような考え方をするとすれば、非常に饒舌です。だから今、饒舌が飽きられてしまって専門特化の方に向かっているといえます。

そして広告会社がやたらに商品を日の光に当てようとして、全体がしらけてしまったというようなこともいえそうです。消費生活といいますが、現在の消費マーケットのひとつの成熟度を表している。そうすると「老舗の寡黙」がいいということになるのかもしれないと思います。

したがって今、若者たちの間で、時々学生なんかになんか何かを書かせてなるほどと思うのは、看板も出ていないようなレストランとか、非常に安くて、何かを食べさせるところがあるらしいのですが、そういうところに群がっているという傾向です。

地味だが曲があるのが老舗の概念である

「曲直と地柄」という昔の言葉を図4に出してあります。「いき」の反対は「やほ」で、「きざ」の反対は「つう」だと言うと、きつと採める要素になるのですが、これについてはずいぶん昔からいろいろな議論をしています。結論は出ていません。ただ「粋の構造」という本があって、「甘えの構造」というのがあって、どちらも初めの3頁を読むと後が読みづらい(笑)。そのうち「粋の構造を読む」という本が出たのですが(笑)、それを読んだら少しわかったような気になって、また本文の方を見なければいけないなと思っているのですが、そこから先がなかなか…。

要するに、「いき」というのはストレスで外れない。山の尾根の上を走っているようなもので、一歩踏み外すと地獄を落ちてしまうのですが、そこを踏み外さないで、ヨタヨタでも真っ直ぐ向こうまで行くというのが粋だということです。

隣り合わせということ言えば、「つう」の向こう側の隣が粋で、こちら側の隣が野暮。これはいろいろな方々といろいろな議論をした結果、私はこうだろうと思っています。要するに、地味だけれども曲があるというのが老舗の概念。「つう」というのは寡黙なんです。

C | 計画の骨組みについて

話があちこちに飛びますが、銀座の老舗の話は難しすぎますので、老舗について勉強したことをご紹介しておきます。図6の右側にD・A・R・B・Iとあります。DARBIということでダービーと我々は言っていますが、ドメイン、アベリティ、ロール、ビヘイビア、イメージ、この5つのシステム・マニュアルを作ることがCI計画です。もちろんビジュアル・アイデンティティというのがありますから、デザインという問題は出てくるのですが、それはイメージ目標の中に位置づけられています。

Domainとは、要するに事業領域はどこなんですかということです。固有能力 (Ability) は、自分に出ることは何ですかということ。それから社会的役割 (Role) はどうなっているんですか。そして、行動要件 (Behavior) というのは、ここでは主として老舗について言えば店員に対する、番頭、手代、丁稚、小僧に対する一種の「稽古の条々」です。

そして、イメージ目標 (Image)、これが歌集というところで説いている表現方法であり、コンセプトの「花」をどう表わすかということになると思います。

事業戦略、企業文化戦略、コミュニケーション戦略、今から5年前のCI計画の骨組みがこういう形をしています。

400年刻みで見る時代感覚

図2に戻りますけれども、上の方に400年おきの400、800、1200、1600、2000年と書いてあります。どうも今の中学校や高等学校の日本の歴史の教育というのは間違っているように思いますけれども。嫌いになるように嫌いになるように教えている感じがします。

だいたいこのように400年刻みになっているというのは、つい最近気がついたという程度のことですが。もちろん弥生時代の前に縄文があって、石器時代があって、弥生時代の後ろの方には、古墳時代があって、それから飛鳥、奈良がある。平安時代が約400年あります。平安時代が400年と答えられる学生はひとりもいません。だいたい100年くらいですか？とかその程度ですね。それから鎌倉、室町があって、戦国時代があって、1603年が征夷大将軍ですから江戸幕府が開かれました。それが今日につながって間もなく2000年。要するに400年刻み。仮に現在のこのお席が西暦3000年の席だとすると、江戸時代というのは1600年～2000年です。今日只今は2000年の中に入ってしまうと思うのです。そうすると、江戸時代の最初の頃は刀をさして歩いたけれども、2000年に近づくとき先駆的なコンピュータが動いていた、みたいなことをきつと言うことになるのでしょうか。そのくらいの時代感覚なんだろうと思うのです。

日本の老舗

かつて老舗の調査をしたときに、一番古い、今も残っていて立派にやっぴらっしゃるのが西川布団店の前身だと思うのですが、これは近江ですね。そして調べさせたら、元和元年に江戸に西川が江戸店(だ)を出しているということです。ただ、一番大もとの西川というのは青蚊帳というカヤをつくって、それを担いで売って歩いていた売り子の世界だったわけで、「棚」を設けて「店」をはるといえるようになったのは江戸に入ってからです。

松阪屋はそれよりちょっと古い。ついでに申し上げますと元吉原というのがあって、今の人形町の近くに開かれました。これが公許の遊廓です。それが明歴の大火の直前に新吉原となって今の浅草の裏あたりに移ったということです。

日本橋が今の位置に正しく架けられたというか再建されたのは元和4年。それより前に日本橋という橋はあったらしいのですが。その当時の江戸は、先程三枝社長のお話にもありましたが、日本橋が繁華街というか商店街だった。特に日本橋の通り町に店(た)を出していれば本物だということだったようです。鴻池、住友。淀屋が大阪で元和5年に中之島を作りました。越後屋が江戸に出たのは延宝元年。それから3年後くらいに例の「現金掛け値なし」という画期的な売り方を始めています。それまでの呉服商は、客が入ってくるとお座敷に上げて、座敷の中でやりとりをして、しかも売ったお金は、大名・旗本の場合には年に1回の掛け取り。一般の市民や町人が買いにくることはまずなかったようです。町人と言っても今のようない町人ですね。お金持ちはもちろん買いにきました。その人たちは年に2回の掛け取りだった。それを現金で安く売るといふ今日のマーケティングの前身を始めたのが、延宝元年の越後屋で、1660年代。このような例は世界中にないそうです。そして江戸十里四方に10万枚の引き札を撒いたということだったようです。

江戸の文化は女性の文化である

その当時の江戸の市民は、いろいろな説がありますが100万人もいたということです。そのうち

の60万人が町人・職人・下層階級。30万人が武家・下級武士。10万人が神社・仏閣。そして女性の数が極端に少ない。日本はもともと女性を極めて大事にします。逆に言うと、江戸の文化というのは、女性の文化というか女の人が非常に強い。これはそれ以前を含めて歴史的にそのようですね。

諸外国にもある話だそうですが、日本の系図を見ますと、よく「女」と書いてあって名前が載っていないというのがあります。それを最近誰がどうして言うのかわかりませんが「女を蔑視している」と。本当は、もったいなくて名前も書けないということもありましたようで（笑）。我々は「小野小町」なんて平気で言っていますが、あれは小野さんちの娘と言っているに過ぎないようです。「小町」というのはオチャッピーという意味ですから。「小野…」、何ていったらわからないというのが小野小町。したがって、日本はもともと女の人を非常に大切にするので。

下り物と越後屋の話

よく申し上げるのですが、江戸時代には元禄と文化・文政と2度大きなエポックがありました。元禄のあと享保という吉宗の時代になります。なるほどNHKというのは味なことをやるものです。今、享保時代とよく似ているということです。元禄のバブルが崩壊して、歴史的に言えばこの時に上方の文化というのは、ほとんど江戸に移った時期でもあります。上方は大不況。ということは経済的に日本全土が大不況。しかし出版物は大いに伸びました。出版物の点数です。もともと上方の方がずっと多かったのが江戸に移って、江戸の方が隆盛を持つようになったのがこの時期といわれています。

しかし、これは幕末まではそうですが、江戸で作られるものは地物と言って、地物は悪いものの代表だったようで。下り物といって向こうから下ってくるものでないと本物ではないと。したがって、老舗は全部下り物を取り扱っていません。しかも江戸の資本ではなくて、上方の資本。近江と伊勢と京都と大阪の4つの資本が出ているということです。

では越後屋はどうして越後屋なんだという話がありますが、これは三井高利という伊勢の人が出てきた時に、自分のお祖父さんが「三井越後守」という守名（カミナ）を持っていたらしいのです。それで越後屋という名前にしたということです。最初は間口9間、奥行40間といいますから相当な大きさですね。そのお店を開いたときが延宝3年です。そこでは、これは店売りをやっています、店売りということは店に商品は並べていないんですが、一応客が入って行くとひとりにひとりのサービス員がついて、全ての取り仕切りをしました。必要な商品を目の前に並べて相談に来る。買うと現金決済をして帰っていく。明日必要だという客には、早縫いでやりましょうという。越後屋で縫い子だったお婆さんが、明治30年頃に浴衣の早縫い競争で56分という記録があるそうです。

顧客第一主義とは何か

お客さまを大事にするというのはどういうことかという、相手の目を見るんだというのを讀んだことがあります。ディズニーランドと同じことを言っているんですね。

人が人にサービスするという、これがサービスだと。それから感動しなさいと。これもディズニーランドで言っていることなんですが、自分が感動すれば相手も感動する。相手が感動することはまたお客さんになってくれる。今ディズニーランドのリピーター数は87%です。2度目以上の人が87%。したがって、飽和状態になっているから大変だということも一方ではありますけれども、そんなランドは世界中にもないんじゃないかと思えます。どうでしょうか？

それから図5の「リ」は片仮名になっていますけれども、これは「リスク負担」です。リスクは全部自分が負うんだということです。これも越後屋の家訓の中に入っています。お客さまに迷惑がかかるようなことがあっては決してならない。今のPL法ですね。リスク負担は全てこちら側持ちだというのは、一番やかましくディズニーランドの中で出てくるものです。

サービスに終わりはない

ロスのディズニーランドでは、いろいろと出し物に乗って回っていくと、「この辺で終わりだろう」と思ってからもう2倍分あるとお考えになっていいと思います。山場がきてその次に本当の山場がくる、そう思っていたらもう1回山場があって、結局3度驚かされます。これはとても日本人には出来ないことじゃないかと私は思うのです。そこにある理念は、サービスに完成はない、常に未完成だということです。向こうのマニュアルにはその理由が書いてあります。あるマニュアルが定式化して行われるようになると、それは当たり前のことになってしまうから、その次のマニュアルを、サービスを開発しなければダメだということです。だから常にサービスは未完成である。ですから、あそこは2年に1度、必

ず50億から100億の投資をして、新しい出し物を追加しています。とうとう今度は1999年のうちに第2テーマパークをつくるようです。常に追加投資を用意する。マニュアル的には、その年の利益の何パーセントかを追加に回せといっているのです。これは、三井家の家訓の中にもあります。

という訳で、周辺土地のキャピタル・ゲインも含めて、東京ディズニーランドも経営理念は「ヒカリサミット」と語呂合わせできます。

日本の文化の5つの視点

最後にこれは、日本の文化を墨絵になぞらえて整理してみると（図5の右側）、際（にじみ）の文化、引（ちじみ）の文化、付（ひびき）の文化、型（なぞり）の文化、見立て（かすれ）の文化というのがあります。要するに、滲み、縮み、響き、なぞり、掠れ。これはみんな日本の文字に関係があることで、墨とか筆の世界です。これも「キヒツカミ」と語呂合わせしていますが、甲乙丙丁の十千です。

日本の文化の中で、これは老舗の整理をすると出てくる言葉ですが、不自由さの中の最大限の自由。不自由さで枠を囲ってあげないと本当に自由が享受できないというのが、日本の心理状態だといわれています。この辺は議論の対象になる要素だと思いますけれども、「際」のところではか遊べないと言った方がいいかもしれません。

それから「引」は、縮みの文化ですね。大阪万博で一番驚いて、こんな物が世の中にあるのかと思ったのは盆栽展でした。樹齢700年とか樹齢800年、今は高松宮家所蔵とか書いてある。700年も命懸けでこれを守った奴がいるというのがすごいですね。

それと「付」の文化。響き合うという意味なんです。俳諧の世界というのが江戸文化に与えた影響というのは非常に大きいし、江戸時代の大店のご主人というのは必ず俳諧をやっていました。どうして俳諧をやっていたかというのは2つ意味があったようです。ひとつは知的側面ですがもうひとつ重要なのがサロンです。知識人はみんな俳諧の世界に浸かる。それは付句をするということです。

どうも学校の先生が松尾芭蕉というと俳句ばかりつくっていたように教えるのですが、だいいち松尾芭蕉の時代に俳句という言葉はありません。発句というべきなんです。発句だけは確かに、前の句はないから付句ではないんですね。だから自分自身に切れ字というのを設けて二句映発といました。響き合う2つの概念を1句の中に詠み込む。これが発句の形です。あとの36句は、前の句に対して付ける「付」の文化。その付の文化によって、どれだけ我々の物の考え方が決まってしまうかということとは、チャンスがあればまたお話ししたいと思います。

次に、なぞりの文化というのは、型さえ残してやれば形は残りっこないから型を残そうということ。伊勢神宮がその典型です。20年で型を残していくから、あれは未来永劫、永遠であると。歌舞伎の世界もそうですし、お能の世界にいたっては動くなという型を残したわけです。

そして、「見立」の文化。かすれの中に何かを見立てるという見立ての文化というのも非常に重要です。

ということで時間になってしまいました。銀座のお話も出来ないし、あまりお役に立つお話だったとも思えないのですが、一応ここで終わりにさせていただきます。有り難うございました。

—講演終了—
(文中敬称略)



そのだえいじ 1935年生まれ／学習院大学政治経済学部卒業／1959年株式会社電通入社／1984年日本エム・アイ・シー株式会社代表取締役社長就任／1996年同社取締役就任、株式会社インタープラン代表取締役社長就任、現在に至る。／学習院大学非常勤講師（マーケティング・コミュニケーション論）、国立劇場・歌舞伎座 常任解説委員（イヤホンガイド）、舞踊正派若柳会 名取若柳喜次郎／雑俳眺牛会 立机宗匠 篝火舎心亭、若手真打つばな連 宗匠（俳諧連歌、川柳、狂歌）

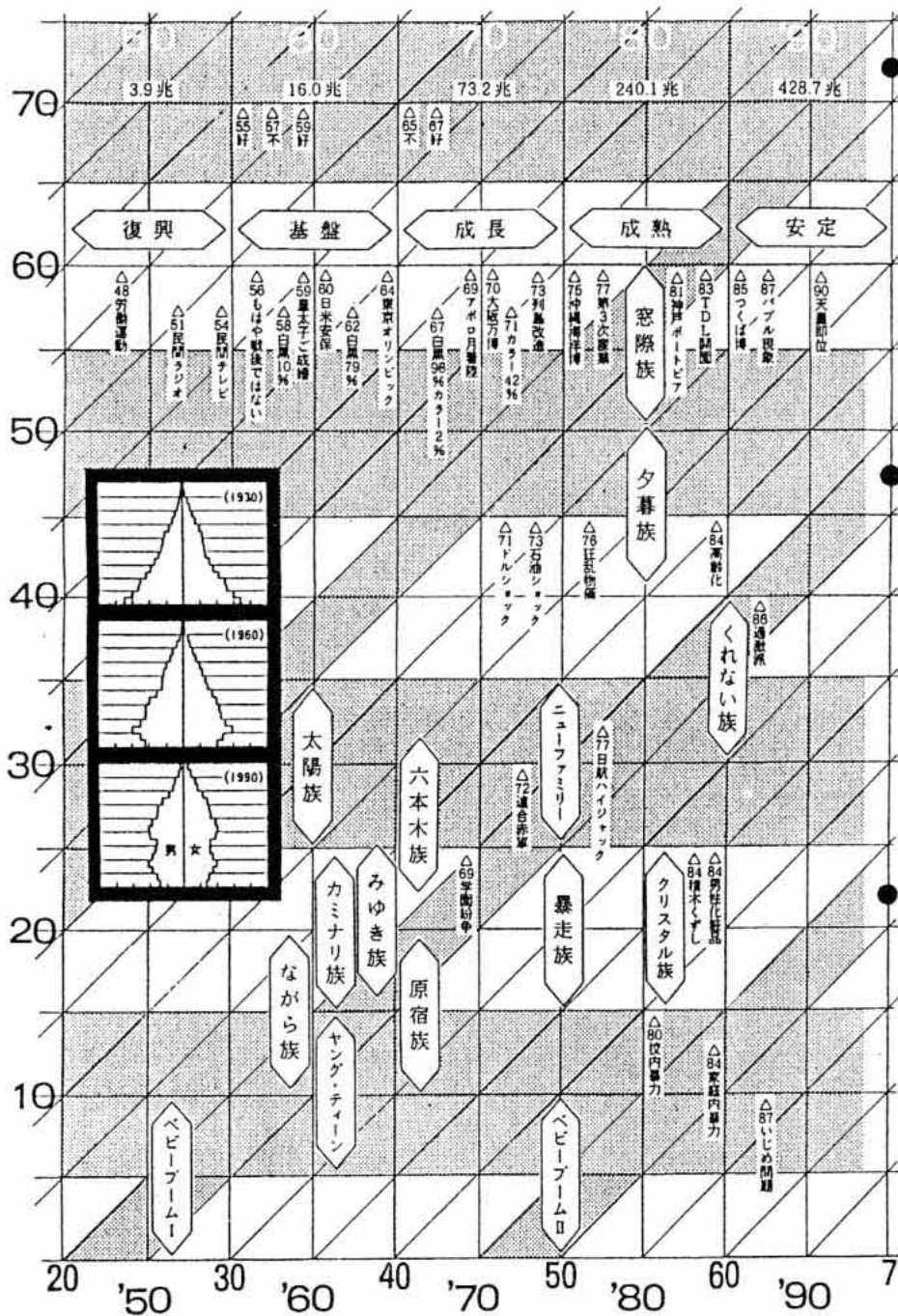


図1 オビニオンリーダーたち

花伝書(風姿花伝)

著者 川瀬一馬

か様の万物の品々を、よくし似せたらんは、幽玄のものまねは幽玄になり、強きはおのづから強かるべし。この分見をばあてがはずして、ただ、幽玄にせんとばかり心得て、ものまねおろそかなれば、それに似ず。似ぬをば知らず、幽玄にするぞと思ふ心、これ弱きなり。されば、優女・美男などのものまねを、よく似せたらば、おのづから幽玄なるべし。ただ似せんとばかり思ふべし。また、強きことをもよく似せたらんは、おのづから強かるべし。

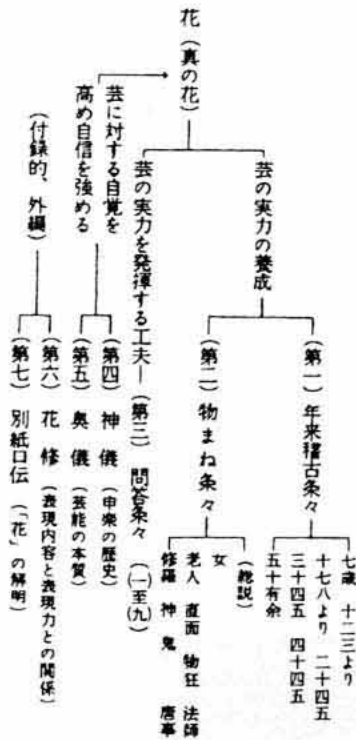


図3 花伝書(風刺花伝)

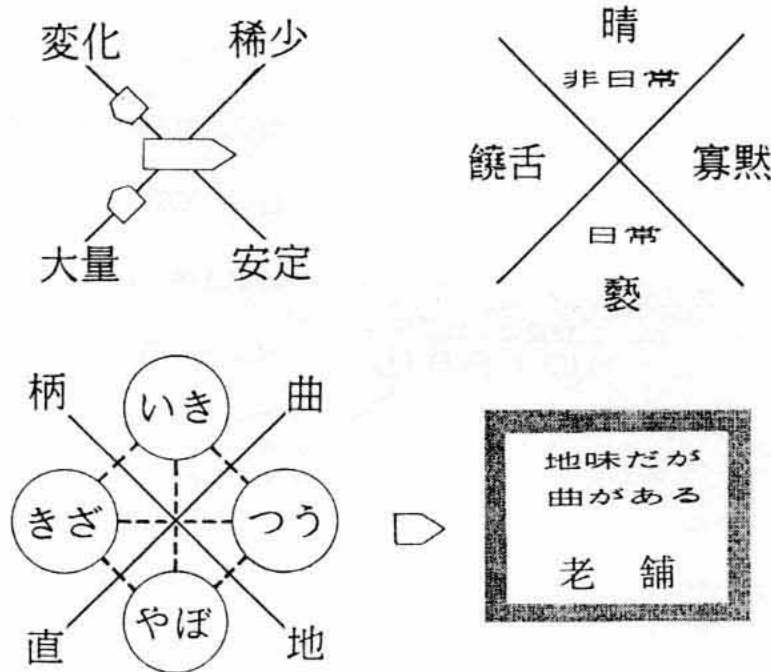


図4 日本文化の整理軸

然	ヒ・人	キ・際	にじみ
史	カ・感	ヒ・引	ちじみ
食	リ・リ	ツ・付	ひびき
道	サ・三	カ・型	なぞり
楽	ミ・未	ミ・見	かすれ
	ツ・追		
	ト・土		

図5 開発テーマの視点（語呂合わせ）

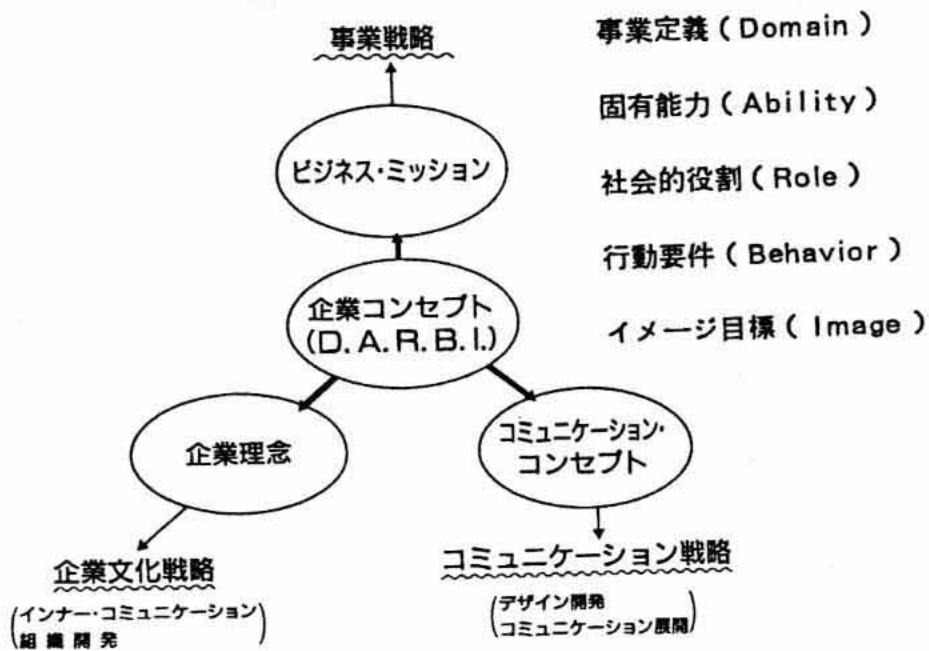


図6 CI戦略の要件

関西から見た銀座イメージ

高田公理

武庫川女子大学生生活環境学部教授

はじめに

高田でございます。生物学をちょっとかじって、学校を卒業したあとは家業のヒヨコのセールスをしていました。教になって卵を産んだりプロイラーになったりする鶏のヒナですね。そのあとは、金物屋でセールスをやったり、酒場ではバーテンをしていた訳ではなく、実際に店を持って経営をしたりしていました。その後、シンクタンクにいたりしたんですが、あとから考えると非常にちゃんと一貫性があるって、現在の教員も含めてすべて接客業であるということになろうかと思います。

家政学部から生活環境学部へ

今日は関西から見た銀座イメージというタイトルを頂戴していますが、実は一昨年の秋ごろに長谷川先生から電話をちょうだいしまして、お前一人で何か銀座のことを書かないかとおっしゃったんですが、銀座に一人で挑戦するのは大変だとおもいまして、たまたま私の勤めている学校が今まで家政学部だったんですが、生活環境学部と名前を変えまして、新たに生活情報学科という学科ができました。ここにコンピュータ関係とか都市論をやっている人とか、ファッションをやっている人がいたので、彼らと共同して比較的手際よくレポートをまとめて、去年の連休頃に出させていただきます。

何故、家政学部から生活環境学部が変わったのかといいますと、そのあたりは時代状況を考えるときにおもしろい問題を含んでいるように思います。2年前までは家政学部だったんですが、家政学では学生が集まりにくいということが直接の原因なんです、多分もう少しいろんな意味があると思います。どういう意味があるのかというと、家政学というのは家庭の経営をどうしていくかということなのですが、これはすべて女性の仕事だということになります。家庭というものの経営法をわざわざ学ぶというのはどういうことかという、長谷川先生なんかは工学部ですが、工学部とか法学部だとか、大体が明治時代から伝承のある学問は漢字一つでできているわけです。その後で出てくるのは経済学部という具合に二つになると。今は生活環境と4文字になってしまうということなんです。その時に、明治から学校・学部の中で、経済まで含めていいと思いますが、法学部とか経済とか、工学部とかは文字通りお父さんための学問であって、社会的生産労働に従事している人の学部であると。社会的生産労働と、もちろん調整も含めてですが、そういう役割があったんです。

それに対して家政学というのはお母さんの仕事。文字通り、家庭内家事労働をどういうふう組織していくと合理的な生活ができるかということをやっていたんです。これが家の外と家の内側で分業しながら近代日本というのは発展してきたと考えていいんじゃないかと。ところが例えば工学部出身の人が、新しい商品開発をしようとしても、技術はちゃんとあるんだけど智慧がない。むしろ工業製品のユーザーとして家庭の中で、限られた収入の中でいかに楽しい生活、ハイライフということを含めてですが、その生活をやっていったらいいのかということ、いってみると生産労働に対して、労働力の再生産のための知識と技術を身につけてきたわけです。そういうことが、工業生産にフィールドバックされないことには新製品はできないという状況の中で、家政学の範疇を越えてしまうというわけです。家庭内家事労働の経験がそのまま工業製品をつくり上げて行く上での智慧とかアイデアにフィールドバックされるような状況ができてきたといえます。

学問や芸術は究極の遊興である

その中で家政学ではなくて生活環境学というふうなことを考えられるようになった。中でも生活情報ということを考えなければいけないのではというふうなことが問題になってきたのではないかと思います。そういう状況と、一般的にいえば繁華街・盛り場というもののありさまは非常に深い関係があると思いますが、生活情報学科が集まって半年くらい、銀座についていろんな事を考えさせていただいたわ

けです。

その中で、僕自身はもともと生物学の出身ですので、社会学とか都市計画はまったくズブの素人のまま今日までできているわけです。以前に少し書いた話ですが、明治初期、京都に帝国大学という話が持ち上がった。実は、僕自身は京都生まれ京都育ちなんです、京都に帝国大学をつくらうというときに大反対が起こったと。遊興都市・京都で学問ができるのかと。どうも、京都は遊興都市というイメージをもたれていたようです。

よほど年齢が経てからこの話をきいたんでビックリしたんですが、京都で生まれ育った僕としては、学問とか、芸術とか、芸能というのは、究極の遊興であるというふうに考えてみれば、京都に大学をつかったというのはある意味で成功ではないかと思っています。

明治の始めというのは非常に真面目な時代で、遊興都市で学問が出来るかといわれた。そして作ってみると大した学問は生まれなかったかもしれないですが、いろいろ変な人が出てきたことは確かかなようです。都市の遊興性ということは、平たく言えば文化と非常に関係があると思います。

関西から見た銀座イメージに関する調査の概要

関西から見た銀座イメージについてレポートを書くということで、合計6人のメンバーが集まって分担をしました。その目次としては、始めに銀座をとらえる視点ということで僕が書きました。それから銀座街区の歴史的考察、これは技術史をやっている先生が、銀座の街区の移り変わりということを経典的にまとめて書いたわけです。それから3番、4番は、非常に簡単な調査ですが、銀座といたら何を思い出しますかというふうな調査を、東京と大阪の学生を対象にやって、ついでに学生のお父さんやお母さんにもアンケート調査をやった結果をまとめました。それから5番目には、日本における地方銀座というのはどうなっているのかということ、都市情報論をやっている先生が非常に精力的にインタビューをして、まとめてくれたわけです。最後にそういうレポートを読みながら、関西人にとって銀座とは何かというのをまとめて、このレポートが出来上がったわけです。

都市の中の盛り場とは何か

そこで、銀座という名前を聞いたときに、日本一の繁華街とか日本一の盛り場をどうとらえるかということを考えてみました。レポートの中で私は3つくらいの視点で、繁華街・盛り場というのを一般的に考えてみようということを提起したように思います。

ひとつは、繁華街・盛り場というのは農村とか田園地帯にはないわけです。伝統的にないわけで、都市の中にある。都市の中であって、中でも一番都市的なところ、都市の中の都市というようなとらえ方が出来るんじゃないかと思われま。そういう都市の中の都市がどういう歴史的な経緯で出来上がってきたのかを考えてみると、非常に古くれば奈良の都とか平城京・平安京という都市が日本に古来から存在していましたが、今日につながるような都市の形成は16世紀から17世紀にかけて、城下町みたいなものが国土レベルで整理されてくる時代というのを想定すればいいと思います。

そして、田園地帯に支えられながら近世都市というものが出来上がってくる時に、一定の人口集積が都市に起こってきます。すると、どこかで空気抜きをするような装置が必要になってくる。農村地帯だったら時間秩序の中で、祭りとか旅という遊びが提供されました。時間を区切って、今日はおしゃれをして、お馳走を食べて、お酒を飲もうと。そういう日のことを「ハレ」という言葉で呼んだわけですが、「ケ」というのは日常・普段の生活、それに対して「ハレ」というのは特別な日という意味だと思います。

かつては時間秩序の中でそれをやっていた。ところが人口集積が進んでくると状況が異なってくる。たしかに、時間秩序の中で都市の祭りというのはありますが、祭や旅という遊びを空間秩序に置き換えて、いつでも行こうと思えば行けるようになる。ただし、何十万の人口があれば、毎日繁華街・盛り場に行っているわけにはいかないわけで、一週間に一回とか、休みの前とか、金のあるときとか。そう考えると、都市の中の盛り場というのは、時間秩序の中で遊ばれていた「ハレ」を空間的に秩序化することによって成立した、都市の中の都市空間だと考えていいんじゃないかと思っています。

繁華街はあらゆる存在をマッサージ情報に転換する装置である

それじゃ、そこに行くとか何があるのかということですが、繁華街・盛り場を形成しているいろんな要素は各種の商店とか、飲食店とか、劇場とか、あるいは興行施設ですね。そういうものが繁華街・盛り場の中にあるわけですが、それを機能的にどのような役割をしているのかというのをひとことで言うと、

「あらゆる存在（モノとコト）をマッサージ情報に転換する装置」だと考えてみると、繁華街・盛り場は非常によくとらえられるんじゃないかと思います。そういう意味で、情報化の装置だといえます。そういうものが、近世の終わりから近代に生まれてきたと考えていいと思います。ここで“マッサージ情報”という言葉を使いましたが、これは現代、情報化社会ということで、いろんなことがいわれています。情報というのはたぶん、社会の合理化とか産業の合理化とは違う側面で、色々な役割を果たすと思われる。

情報の果たす2つの役割

—メッセージ型情報とマッサージ型情報—

情報の果たす役割を考える場合、2つの局面にわけて考えた方がいいということを書いたことがあります。ひとつは言うまでもなく、いわゆるコンピュータ技術が発達することによって科学技術も発展が加速化されるとか、あるいは生産過程にコンピュータが導入されることによって生産が効率化されるとか、あるいは流過程に導入されることによって流過程が合理化されるとか、つまりひとりでいうと、人間の生活を支える文明の装置に作用して、その効率を上昇させる機能としてのコンピュータ、通信というものが非常に語られた時代があったし、実際にそういう役割を果たしたんだろうと思います。

しかしながら他方では映画とか音楽も情報であるわけで、こちらの方はどちらかというと人間の目や耳、いわば感覚器官や人間の心と身体に作用して、それを喜ばせ、楽しませ、面白がらせ、珍しがらせるような役割を持っている。文学とかさまざまなイメージとか色、形、映像、味、香り、肌触りまで含めて、これは人間を楽しませるものだと考えた方がいい。

それはいろんな情報の持っている本来の属性ではなくて、受け取る側のスタンスによって変わってくる。社会を効率化させる役割を持つ情報をメッセージ型情報、それに対して、人間の心と身体を楽しませる情報はマッサージ情報と呼んでみようと思います。

そうすると、同じ情報がメッセージ型情報として機能する局面や、マッサージ型情報として作用する局面があると思うんです。例えば、湾岸戦争が起こったときに毎日のように戦争の映像がテレビを通して放映されていました。あれはどっちなのかと考えてみると、例えば商社や株屋に勤めたりしている人は、あれで自分の行動を決めるわけです。そういう意味ではメッセージを受け取っている。ところがほとんどの一般視聴者にとっては、またやっていると。非常に不謹慎な話ですが、楽しみとして見ている。楽しみというか面白さをむこうから読み取っているというふうにと考えると、情報の果たす役割というのは、同じものが別々な役割を果たすと取った方がいいと思うわけです。

情報的付加価値の付与

実は、繁華街や盛り場で提供されているモノやコトは言うまでもなく、今日いただいたお寿司も腹の中に入るとエネルギー源になるわけですし、それから銀座で売っている衣服も暑さ・寒さから身体を守るための道具であるわけですが、同時に今日いただいたお寿司が非常においしいとか、あるいは銀座で売っている服飾というのは暑さ・寒さから身体を守るだけのものではなくて、その上につけている色とか形とかが付加価値を持っていて、商品が売れていくというわけですね。

最近の極端な話では、例えば真冬にミニスカートが流行れば、寒い寒いと言いながらミニスカートをはいていると。文字通りそれはモノなんだけれども情報、ファッションデザインのメディアとして商品化されている。現代の日本の市場で流通している商品は、ほとんどそうなんです。実は近世に、例えば江戸・京・大坂という三都が出来たときには、そういう大都市はすでにあらゆる商品を物質エネルギーではなくて情報性によって付加価値を与えるような装置として、機能したと考えることができるわけです。その時に、繁華街・盛り場で売られている商品は、同時にある種の宗教的というか疑似宗教的な有難みのようなものが付与されていないことには、市場性を持たないわけです。そういう意味では、宗教と商業というのは非常に深い関係というか、アナロジーが成立すると思います。

都市の発生と有閑階級の成立

都市の発生というのを考えてみると、紀元前5千年位のメソポタミア文明が発生した頃に生み出されたのが都市なんでしょう。今でもそこには周辺地域で生産されたものが集中して、そこに地域全体を支配する政治権力が打ち立てられることによって、都市が成立したんだろうと思います。そうして成立した政治権力と宗教・商業というのは、いつも相互補完的な関係を持っていたと考えていいんじゃないかと思います。

都市の起源であるメソポタミア都市には一体誰が住んだのかというと、生産労働から開放された有閑階級が住んだわけです。有閑階級がどういう理由で生産労働から開放されたのかというと、おそらく軍人とか宗教者とかいう役割を果たしていると考えられます。穀物生産をすることによって、余剰生産が生じてくる。その余剰生産を守ってくれる役割というのが軍人の仕事である。また、農業生産のためにはいつでも気候とか天候が安定しているわけではないわけで、気候や天候を安定させてくれるのは神様の仕事ですから神様にお祈りをしてくれるような仕事が必要である。この2つは生産労働から排除してもよろしいというふうな理屈が、おそらく都市の成立の時には関与したのではないかと思います。まず最初に有閑階級になったのは軍人と宗教者だというわけです。

芸能と文化を生み出す都市機能

そうして都市が出来るわけですが、軍人も宗教家も一所懸命汗水たらして働いている連中を説得する、我々は確かに働かなくてもいいんだということを、きちっと民衆に知らせる必要がある。その時に、たぶん芸術・芸能が非常に大きな意味を持ったと思われます。例えば神に祈るときには、神に祈るためには守ってもらうことに対する対価を提供しなければならぬ。それは食べ物であったり酒であったりするわけですが、同時に芸能でもあるわけです。芸能の起源というのは、そういう意味でいうと全部神事として始まっていると考えていい。

そういう形で芸能が成立してくる。そういう芸能というのは、周辺の農民なんかも歌や踊りを持っていたんでしょうが、都市で洗練されていく。そして周辺地域で生産された生活資源というものを消費しながら、芸能という文化を生み出していく機能というのが都市の機能として重要な意味を持ったんだろうと思います。

商業の公正を保障する場としての都市

それと同時に、そういうものが成立してくることとバランスしながら、都市が周辺地域で生産された最もすばらしい生産物や生活資源の交易の場所になってくる。交易の場所になり家が建つわけですが、その時に商業、交易というのは、知らない者同士、関係のない人同士とやらないと意味がない。米を作っている連中が米と米を交換しても意味がないわけですから、別のコミュニティの連中と公益をしないといけない。その時にはいつだまされるかわからない。正札販売はないわけですから。その時に商業の公正を保証する権威として宗教・神が、あんまりどぎつい商売をやったらバチをあてるという機能を果たしたんじゃないかと思われます。

こう考えてみると、あらゆる繁華街・商店というのは一種の神様を持っている。近世から発展してきた盛り場には、浅草や上野広小路がありますが、浅草には浅草寺、上野広小路には湯島天神がある。言わば門前町として繁華街・盛り場というのが成立したと考えていいと思います。

新聞・出版が銀座の神様の機能を果たした

そこで、銀座のまわりにはどんな神様がいたのかと考えると、たぶん銀座の神様は当時の日本人から見れば、非常にハイライフなイメージを濃厚に持っている欧米の文化が、遠くにある神様としてその役割を持ったのではないのでしょうか。同時に、宗教というのは情報産業ですから必ず情報機関というものがある。銀座の場合にはそれが新聞とか出版とかいうものが役割を果たしたのではないかと思うわけです。

やがて、高度成長期には新宿に賑わいが出てくる。この時には、新宿超高層ビルが高度経済成長のありがたみを象徴するものとして西に鎮座していて、駅の東側には繁華街・盛り場が形成された。それがやがて、新宿は今でも賑わっていますが、より格好いいところが渋谷、赤坂、六本木だということになってくる。ここにはちゃんと放送局があります。放送局というのは、浅草、上野広小路に対応する場合の神社とよく似た役割を果たしていると考えられます。ところが、今のテレビ放送というのは見ても面白くないという人が、特に阪神大震災以後急に増えました。実際に阪神大震災の映像を見て、その後でアホなキャスターが出てきてしゃべっていると、なんだ、バチッ！と切ってしまいたくなった。それが後にまで尾を引いて、テレビは面白くないという人が、お正月のテレビも含めてずいぶん増えてきているように思います。それでは常に、何が一体そういう役割を果たすんだろうということを考えてみるのが、これからの盛り場・繁華街の発展ということを考えるひとつの条件になるんじゃないかと思えます。

新文化のインキュベータとしての都市の役割

繁華街・盛り場を考えるとときの3つめの視点としては、新しい文化のインキュベータということ。ここでいう文化というのは生活様式であったり、あるいは芸術・芸能というものでありますが、盛り場・繁華街では一方でその時代の人々が憧れているような文化の中心であります。それに対して、新宿は典型的だと思いますが、西側に高度経済成長の文化というか殿堂があって、いつもそれにいい申し立てをする怪しげなヒッピー文化みたいなものが、ここでせめぎあいをする中で、新しい生活様式とか芸術・芸能とかデザイン、技術、学術みたいなものが生み出されてきた。こういう3つくらいの役割というのを繁華街・盛り場というのは持つ必要があるんじゃないかというわけです。

銀座の歴史とその場所性について

—銀座の商店街の初め—

次に、関西から見た銀座イメージに関するレポートの内容をお話しします。まず、銀座の歴史とその「場所性」（地霊）ということで、これは超自然的な神様とか魂・霊が住んでいるというのではなくて、その土地が持っている雰囲気みたいなものと考えていただきたい。それに関連する項目を並べると、かつては銀貨を鑄造していた江戸の場末すなわち周縁であったといえます。実際、明治の初めころには人の生首がゴロゴロあって、ヌルっとすべったら横に生首があったというようなエッセイを書いた人が何人かいたと思います。そういうところに鉄道が開設されて、築地の外国人居留地が出てくる。いわゆる江戸の周辺であったわけですが、そういう意味でいうと周辺であったがゆえに、逆に新しい試みを展開するのに非常に都合がよかったといえます。つまり、浅草とか上野広小路には、もうすでに近世都市から伝わってきた地霊みたいなものが住んでましたが、銀座はそれがニュートラルであった。このニュートラルである銀座に作られたのがレンガ街、鹿鳴館的な都市空間だったのではないかと思います。

つまり、ヨーロッパやアメリカで完成した非常にハイライフイメージを持っている生活様式をここで展示して、同時にその販売が行われたのが、銀座の商店街の初めだったのではないかと思います。そこに様々な見世物興行、劇場みたいなものが張りついてくる。それからガス灯と並木による景観整理が進む。喫茶店・カフェバーという新しい娯楽施設が出てくる。やがて人々が、ある意味では無目的にブラブラ歩くというような空間が出来上がってきたというわけでありました。

ただ、関東大震災の時には、壊滅的な打撃を被るわけですが、むしろここで壊滅的な打撃を被ることによって、1923年という日本の資本主義が急速に伸びようとする時代でありまして、廃墟となることによって蘇るといえるか、より確かな繁華街・盛り場としての地位を確立していったと。そうしたら、ポスト経済成長についてはどうなんだろうというのが、現在の銀座の抱えておられる問題なんではないかと思えます。

関西人が持つ「銀座イメージ」

そこで、関西人が持つ銀座イメージについてですが、まず東京といえどどこを思い浮かべますかということから初めて、いろいろな質問をしてみたわけです。人数は、だいたい100人ぐらいです。その結果、首都圏でも関西圏でも新宿、渋谷の方が銀座よりも先に連想されるようになっていました。銀座の地位は東京圏・首都圏で3位、関西圏になると4位ぐらいに低迷している。東京の盛り場・繁華街といったときに、まず新宿、渋谷が思い浮かべられるようになっていました。これは高度成長期を代表する盛り場、新宿と、それから放送メディアが非常にたくさん位置している渋谷の方が先になってしまったというわけです。

それから、銀座のイメージということで、銀座から連想するものをいろいろ言ってもらったところ、大きく「夜の盛り場」「昼の繁華街」「物質的贅沢」の3つに集約されました。

「物質的贅沢」に対する首都圏と関西圏の認識の違い

物質的贅沢を形容詞に転換すれば、差し当たり「高級な」というイメージとしてとらえることができるだろうと思います。ただその時に、首都圏では繁華街に高級な店がたくさん並んでいて物が買えるというイメージが強いけれども、関西圏では高級な夜の盛り場というイメージの方が強いわけです。明治・大正の頃の銀座について書かれたエッセイを読むと、バーに行って酒を飲むということよりも、丸善に新しいファッションが入ったとかどこどこへ行くとおいしい料理があるとか、どちらかという表通りを中心にしたものが非常に多いんです。しかし、高度経済成長期以降の小説やエッセイに表われるのは、酒場の方なんです。関西の間は、銀座に出掛けるわけではないですから、そういうものから銀

座のイメージを作り上げていくのですが、結果として、銀座というとバーを思い出すというイメージ構造が、関西人の銀座イメージだと言っていいだろうと思います。

関西の人は銀座には行かない

結果として、高級な夜の盛り場イメージとして銀座がとらえられていますが、ここから銀座というのはいい場所だと、望ましい生活が展開されている場所であるというイメージにはなかなかかなりにくいと思われまふ。高級なんだけれど夜の街じゃないかと。それはあまりいいことがないというイメージに流れてしまっている。しかし、これは現実の銀座とは無関係ですよ。

そういうことが結びついて、銀座の夜のバーはものすごく高いというイメージが非常に強烈ですから、関西圏から東京へ行っても、約60%の人は銀座には行かない。ただし、昼間に銀座を訪れた僕は何度か銀座を歩いているんですが、確かにいい街だなと思うんです。ただ、来ないというのが大問題なんだろうと思います。昼間に銀座を訪れるきっかけは、旅行案内や都市情報の書籍や雑誌を見て、それじゃ行ってみようかと。だけどそれも現在若者向けの雑誌の場合には、渋谷とか赤坂、六本木の方が強くて。別に若者に来てもらう方がいいとは思わないですが…。

東京といえば「東京ディズニーランド」である

実際、特に若者は、東京へは行っても銀座には行かない。面白いのは、東京といたら何を思い浮かべますかという、東京ディズニーランドというのがものすごく多いんですね。あれは千葉県にあるんだよというんですが、東京ディズニーランドが一番多かったと思います。これはデータをまだ整理していないんですが。千葉にあっても東京ディズニーランド、千葉にあっても東京新国際空港という。これは、そういう意味でいうと首都圏の地域構造そのものが首都東京を傘にして、その傘の内に入ることをもって地域の発展と考える、という考え方によって首都圏の整備・発展というのを行われてきたと思います。

それと比べると、関西は大阪に出来ていても関西新空港というんです。大阪府に立地しているのに。何で「関西」にしたのか。それは、まわりの都市が黙っていないんですね。「大阪空港とは何事や」と。また、京都の人間は大阪と我々とは違うと。大阪は下衆のまちやないかとひどいことを言うわけです。神戸の連中も大阪の傘の内に入りたとは思わない。若いものも思わない、堺も思わない、阪神以西も思わない。いってみると、多様な都市がいろんなところでそれぞれに自己主張をしているというのが関西の地域構造だといえます。

こう比べたときに、首都圏と関西とは非常に違う。首都圏は、首都東京を傘上げしてその傘の内に入ると千葉は喜ぶわけでしょう。やっと東京と呼ばれるようになったと。これは恐らく、近代の工業社会のスケールメリットの考え方が地域構造に当てはまっていると考えていいんじゃないかと思ひます。

関西と関東の共同体構造の違い

日本は縦型の単一社会になっていると言って、世界中のベストセラーになった本を書いた教授が東京大学にいらっしやいましたが、彼女は全然関西のことを知らないんです。確かに日本の企業社会で言うと、縦社会だという見方が出来ないわけではないんですが、例えば西日本と東日本を比べてみると、村落の構造が全然違う。東日本というのは米作で村の生活を成り立たせるというわけです。米造りのためには誰かが損をしてもいいわけですね。だから、例えば秋田に行くと巨大な土地をもった地主がいたというでしょ。その下に小作が働く。地主＝小作の関係で村落共同体の構造が成り立っているわけです。しかし、関西圏は非常に都市化が早くから進み、昔から綿などを作るわけです。最近ならタマネギですね。これなら3反もあつたら農民として自立出来る。そうすると村の構造がタテ型にならないで、自作農の共和制みたいなものが西日本の村落には昔から定着しているわけです。それが例えば、現代になつても首都圏が縦型の地域づくりをしてきたのに対して、すべて大阪にまかせられるかという関西の風土みたいなものを生み出してきたんじゃないかと思ひます。

盛り場・繁華街に見る大阪人と東京人の気風の違い

ある人は、大阪人と東京人の気風の違いは、盛り場・繁華街の気風に反映しているんじゃないかといひます。大阪は雑多な人間が集まるところですので、ひとつの盛り場をつくつてもいろんな人がくると。それに対して、東京の盛り場というのは銀座を頂点として、一定の価値体系を作り上げている。だから誰もが銀座にやってくるわけではないと思ひます。浅草の方が身の丈に合っているという人は浅草に行

く。こういう盛り場の棲み分けみたいなことが行われていると思います。

大阪の場合は北と南の2か所あるんですが、2か所しかありませんので、誰もが、特に南には誰もが集まります。そうすると、とんでもない多少柄の悪いまちが出来上がってくるわけです。そういうことを踏まえて繁華街・盛り場としての銀座が、あまり第一番目に思い出されたいのはなぜかという、情報メディアに登場する機会が非常に少ないということです。これは高級な繁華街が銀座のイメージとしてガンとしてあるわけですが、あまりに老舗の繁華街なので、新宿やいま新しく出てきているところはテレビの取材をものすごく喜んでいますが、たぶん必ずしもお喜びにならない。いいことか悪いことかは別にして実際にそうではないかと思います。そういう銀座の今置かれている状況というのが、関西圏における駅前銀座にも如実に表れているというのがインタビューの結果です。

地方銀座の「銀座」イメージの返上

実は、1968年に地方銀座である〇〇銀座というのが、日本全国に440ヶ所あったそうです。この時がピークで、そのあと徐々に地方銀座の名前を返上しているところが出てきているというのが、レポートの中で報告されています。銀座と言わなくてもいいんじゃないかというわけです。そのことが、さきほど情報化という口幅ったいことを言いましたが、情報化社会の現代の特徴が非常に顕著に表われてきています。

例えば、近世の我々に都市として何か新しい生活のイメージを提供し得た都市というのは江戸・京・大坂の3都くらい、文字通り3つの都だったと考えていいと思います。ところがいまや仙台が杜の都だとか、もっとすごいのは兵庫県の室岡か但馬の都という。何をしているかという、かつての但馬とか仙台というのは多少贅沢人がいたかもしれないですが、基本的に地方都市というのは生活必需品、食えたらよろしい、着られたらよろしいという商品売っていた。ところが、それぞれに情報付加価値のある商品を作りだし始める。今や村落がそれを始めている。一村一品運動というのは、文字通り農作物をいかに情報化して売るかということだろうと思います。

商品の情報化が始まる

昼間、建設省の人と話す機会があったんですか、道路というのは今までは工業生産の原料と、工業生産物の物量運ぶ道路と考えられていたわけですが、今や道路というのは情報を運んでいるということです。宅急便で運んでいるものはべらぼうなもので小さいものを運んでも800円とか千円かかるわけですよ。それに腹が膨れるという以上に、これ珍しいものだ、美味しいだという情報付加価値がついてこそ、あれは宅配便で運ぶ理由があるわけです。そういうことが進んできたわけで、全国の都市のみならず市町村が商品の情報化というのを本気で考えはじめています。

そうなってくると、元々商品の情報化に一番宣伝をつけたのは銀座であったわけですが、近來日本を代表する盛り場・繁華街である銀座ですが、〇×銀座では付加価値がつかないわけです。だからそれぞれに地域ごとの名前をつけて商品の情報化をはかっていく。そのことが典型的に現れているのが掛川です。人口も20万足らず、ここで新幹線の駅をつくる。その駅をつくるのに相当乱暴なことをしたようです。1世帯から10万円くらいずつ金をカンパさせた。そして何をしているかという、400㎡から500㎡ですからそんなに大した広さではないですが、そこで掛川の人が作った掛川の商品を売るわけです。ジャムや佃煮を。そして作った人の名前を全部そこに張りつけてある。そしてちょっと美味しいものをつくると同時に、比較的早く売り切れるように演出する。そのことによって、別に生活必需品でも何でもありませんが、掛川にちょっと足を止めて買ってみようかなという気持ちになる。言ってみると、新幹線の駅が盛り場・繁華街というか、商品・生産物を情報化する役割を果たしているといえます。そういうところで掛川銀座という名前をつけたら、もともこもないわけです。

これからの銀座イメージ戦略

そういうことが全国に進むことによって〇〇銀座は少なくなってきた。結果として何とか銀座をいつも歩いている人は、いつも本家本元の銀座に行きたいと思っていただろうと思うんですが、だんだんそれを思い出す縁が少なくとも西日本では急速に減少していていると思います。そういう状況の中で、銀座は今後どのようなイメージを生み出し、それを伝達していくのかということが、次の問題になると思います。

1970年代までの日本のハイライフイメージというのは、たぶんヨーロッパとアメリカがカバーしていて良かったんだろうと思います。そういうヨーロッパとアメリカで生み出され、完成された文化を取り入れて日本の生活水準を上げていく。そのための「商店」の役割を果たしたのが鹿鳴館だったんだろう

と思います。鹿鳴館主義というような考えか方があるとすれば、同じ意味で繁華街・盛り場に適應したのが銀座であったと思います。

ハイライフというときに、ハイライフの本来よりも経済的に日本が豊かになってしまった。そういう逆転現象が起こってしまっているわけです。と同時に、例えば最近ならヨーロッパ人が作ったリゾートであるわけですが、例えばタイ、バリやアジア・太平洋地域にもずいぶんハイライフイメージを流布する場所が出てきた。もうヨーロッパ、アメリカだけでハイライフを語る時代ではないといえます。音楽が文字通りそうであって、一昔前までなら最も高級な音楽はヨーロッパのクラシック音楽だったわけですが、今はそうではなくて、ラジオの特に民間放送のFMなんかを聴くと、毎日ラップだとか、どこかよくわからない地域の音楽をやっている。それが世界性を持ってしまっている。

モノからコトへ

そういう状況の中で、ヨーロッパ、アメリカの高級イメージに乗った形では、おそらくハイライフイメージというのは演出できないだろうと思います。もう鹿鳴館はやめようという時代がやってきているのではないかと思うわけです。それと同時に最近モノが売れない、不景気だと言われているわけですが、今日も最新のデータを見ると去年一年間海外へ出掛けた日本人は1600万人を超えたみたいです。

しかし一方で、モノが売れないから不景気だというわけです。不景気な時代に1600万人が海外へ行くのでしょうか。たぶん行かないでしょう。私はいまの日本の経済は、モノが売れないだけで不景気だというのはとても考えられない。たぶん今売られているものがいらぬから、みんな買わないだろうと思います。その証拠に海外旅行では一昨年以上に一人当たりの出費も増えているし、人数も増えている。そこで金を使っているんですね。

新しいモノが生まれる現場に立ち会いたい

それだけじゃない、例えばコンサートとかお芝居のイベントについては、放っておいてもジャンジャン人が来る。つまり、モノはいらないけどコト体験は欲しいと、そういうことになってきているんじゃないかと思います。その時に、そこで体験した舞台芸術とか音楽がオペラであったりクラシックである時代は終わってしまった。むしろそれよりも、首都圏にはだいたい3000から5000という素人劇団がありますが、ひとつひとつが呼び集めることのできる人数は少ないけれども何か新しいモノが生まれている現場に立ち会いたい、そういう言葉を持っている現場に立ち会いたいという需要は非常に大きいといえます。さらにそういう独創的な事を行っている芸能・芸術のグループの仕事を受容しているうちに、今度はそれに自分がはまっていって、やる側にまわっていく。この転換が起こるのが1975年だと見ているんです。

受容から表現へ

それは簡単な話で、カラオケが発明されたのが1974年なんです。カラオケというのは騒音を出したり、まずい問題もたくさんありますが、あれは日本人の性格をガラッ変えた。善きにつけ悪しきにつけ。カラオケ以前の日本人というのは、人前で歌をうたうことなど出来ない恥ずかしがり屋の内気な国民だということだったんですが、それがウソだということがはっきり分かった。と同時に、カラオケが発明された途端に歌は聴いて楽しむものではなくて、歌って楽しむものだということになった。

同じ時期に朝日カルチャーセンターがスタートしたんですね。朝日カルチャーセンターというのは、もちろんいろんな教養や技能を習うわけですが、同時に習った途端に例えば文芸講座を受ければ小説を書き始める。自分で絵を書き始める。見て楽しんでいた絵が自ら描いて楽しむものになるのが1970年代半ば。今出版がそうになってきている。だから本を書いても売れない。本は今や読むためのメディアではなくて書くためのメディアに変わってきました。出版社も売れるか売れないかわからないような本を5000も、6000も作るより確実に売れる自費出版500円の方が有り難い。絶対損をしないですから。

そういう時代に転換してきているとことが、これからのハイライフイメージというのを考えていく上で非常に重要ではなからうかという感じがするわけです。

近代日本におけるハイライフ・イメージの源泉

このような時代の中で求められる、ハイライフイメージの属性というものを考えたいと思います。数年前からの社会を世界的に見たら、極度に規律化された大衆社会と見ていいんじゃないでしょうか。た

だし、大衆の大衆化が起きているからこそ、群衆化とか少衆化ということが話題になるのでしょうかけれども、単に欧米で完成された貴族文化だけではなくて、多様な民族文化の中に我々の生活をもっと楽しませてくれたり洗練させてくれる要素があるということに、人々が気づき始めている。そういうものを展望しながら生活と文化を創出していくことがこれからのハイライフイメージの中では非常に大事なのではないかと思います。

日本伝来のハイライフイメージの復権

おそらく日本の江戸末期というのは、徳川が260年かかって近世日本におけるひとつのクライマックスを生み出したんじゃないかといえます。実はそういうことを感じさせてくれたのが、伊勢神宮の前の商店街で江戸末期のまちづくりを完全にやり直した地域なんです。江戸の末期の建物は、やはりひとつの完成された、近世に完成された一種のデザインのクライマックスがあったような気がします。そういう意味でいうと、江戸260年に対して近代はまだ120、130年ですから、まだそのクライマックス、近代建築ないし近代の都市景観のクライマックスというのはまだ生まれていないと思うんです。

しかし、これからはそういうものを本気で作っていかないことには、江戸の末期に負けます。ポストモダンという形でようやく建築デザインに対する関心というのは、今高まりつつある。1920年代には、非常に美しい建築が出来ているけれども、たぶん現代のクライマックスではないと思うんです。もうちょっと違ったデザインが生み出されてきてもいいんじゃないかと。

そういう街なみみたいなものをどこが作るのか、そのことがこれから先のハイライフにとっては非常に面白い問題を提起してくれるんじゃないかと思えます。それを徹底的にオランダに依存してやったのが、ハウステンボスです。だからオランダ人が来ても、美しい、きれいだと。オランダよりもオランダらしいといって帰るそうです。あのやり方がいいかどうかは別にして、ひとつの実験のもとに行われていると見ていいんじゃないかと思えます。

プロシューマーとしての生活者の参

それからもう一つは、生活と文化において一般生活者が単なる消費者ではなくてカラオケを始めた時代であるということ。これは、消費者であると同時にプロシューマーであるといえます。いかにしてそういう一般生活者のイメージとか知恵とかアイデアを商品開発や街づくりに放り込んでいくのか、うまいこと生かしていくのかということも、これから考えていく必要があるんじゃないかと思われま。

そういうことを進めていくと、おそらく1980年代というのはちょっとでも違ったものをつくったら売れるという時代を経験してきた消費者が、本当にいいものを、ここでいう本当にいいものというのは本物とか偽物ということではなくて、もう少しいろんなことをよく考えて、息の長い人生の中で使えるような商品を、購入したいと考えはじめています。

実は、銀座というのは、そういう意味でいうと近來以降、定番商品をずっと提供してこられたんだろうと思うんですが、しかしそのものは恐らく欧米で完成された輸入物としての色彩がかなり強かったんじゃないかという印象を私自身はもっています。

その様々な定番商品、定評がある商品というものをつくっていけば、かつてのように大量には売れないけれども、息の長い商品として生きていけると考えるわけです。このような生活と文化を生み出して育てる繁華街・盛り場を生み出していく必要があるだろうと。そしてこれから将来に渡って、アメリカとかヨーロッパにこれこそがスタンダードなんですよというようなものを提供できるように、商品開発、サービス開発、生活イメージ、文化を作っていく必要がある。それはたぶん、日本人にも出来ることなんだろうと思えます。

かつての大阪は日本のバリであった

つい最近まで大阪はタンツボだと言われてきましたが、明治の終わりには大阪は日本のバリだと言われているんですね。イギリスの外交官が日本にやって来て東京を見て、東京は日本のロンドンだと、京都はローマだと、大阪はバリだと。今から考えると、考えられないことなんです。改めて考えるとオペラよりも早い時期に、世界性を持つ芸能である歌舞伎というものを完成させている。だいたい17世紀終わりに完成します。

歌舞伎を見に行く人というのは、みんなオシャレをしていくんですね。と同時に、グルメの文化がある。しかも大阪はほとんどが埋立地だったものですから緑が少なかった。そこに一生懸命植樹をしてい

るんです。そして大阪の植木市というのは、近世の終わりには全国に植木を提供していた。

これだけ考えてみると、世界性を持つ芸能があって、おしゃれがあって、ご馳走があって、花と木を愛でる文化があったら、文字通りこれはバリじゃないかと。ところが、大阪は近代は工業化を進めて煙の都になっていくわけですが。そして煙の都のまま、1970年代を超えてしまったらからタンツポになってしまった。タンツポになった瞬間に、これは大阪のまたすごいところなんです、その大都市から出たゴミのためで100年ぶりに巨大な植木市をやったんです。花の万博ですね。その結果、日本の花を売る産業というのは、直前まで4000億くらいで低迷していたんですが、いまは1兆を超えて2兆に近づいている。その頃から大阪は文化づいていくわけですね。

生活と文化を生み出す街

近来日本の首都・東京というものを考えてみると、いろんな才能がここに集まり、すばらしい芸術・芸能が生み出され、商品も生まれてきた。だけど、都市として何か新しいものを独創したかということ、ややしんどいものがあるんじゃないか。もっぱら欧米で完成された先端の文化を輸入して全国に分配する役割を果たしたのが、首都・東京の120年間の役割だったんじゃないかと。

銀座はその都市の中の都市として、欧米で完成された生活様式・生活文化みたいなものの頂点に立ち続けてきたわけですが、ぼつぼつこれからは輸入センターというよりはこの都市の中で都市として何か新しい生活のスタイルとか文化を生み出す方向に行きたい。何かここで新しい試み、都市として試みが起こっている、それが将来の日本人のハイライフのスタンダードになっていくんだというような活動、しかもその活動をメディアを通して伝えていくというようなことが行われる必要があるんじゃないかと思っています。

高齢者が本当に楽しめる街

その時に、これまでずっとヤングカルチャーがもてはやされてきたわけですが、これからは高齢化社会を迎えるわけで、我々の年代が本当に楽しみ、遊べるような芸能、芸術、生活文化というものを、日本の土壌の中で作り上げていくということは、たぶん銀座にとっても非常にやりがいのある面白い仕事になっていくんじゃないかと思っています。

全国の都市は、それを始めています。日本各地に都づくりが進んでいるというのはそういうことだろうと思います。仙台が杜の都、都というにはチャンチャラおかしいような場所であるはずの都市が今、杜の都づくりをやって、ある程度恰好がついてきている。全国がそれをやっているわけですね。やっていないのは、京都と首都・東京くらいじゃないかという感じがするわけです。

これからマルチメディア社会が本格的に到来すると、場所とか距離とか巨大さというのは必要ありませんというふうなメッセージ型情報産業社会をつくる人は言うておられるわけですが、僕は逆だろうと。全ての都市が場所性とか距離とか巨大さというものとは無関係にマルチメディア、あるいはインターネットに一生懸命になっている時代にこそ、ここでしか味わえないもてなしとか、あるいは商品とサービスの特異性とか、小さな対応性、小さくて特異性のあるものが多様に集積している、そういう巨大さを実現したら、非常に逆説的な形でハイライフイメージを生み出し、伝えていく繁華街・盛り場として発展していく可能性があるんじゃないかと思われま。

これで私の問題提起をを終わらせていただきます。

—講演終了—

—講演後の質疑と意見交換—

Q. 吉本が銀座にきましたが、ああいうのは逆に関西から見てどのような評価をしているのですか。吉本が銀座に殴り込みをかけてきているわけですね。

高田)

「吉本、元気やな〜」という感じですね。特に銀座だからということはないんですね。渋谷であろうと、どこであろうと、とうとうきたなという感じですね。

吉本がやっているのはファッションと一緒になんです。食ルックとが最初に出てくるのが、大阪の南

のアメリカ村という非常に周縁的なところなんです。ここで女のリボンだとか、男のリボンだとか、頭の毛をリボンでくくるということが出てくるんです。それが原宿を通った途端に、全国化するものは全国化する。だめなものは消えていく。

ヤングカルチャーの場合は、かなりの程度、関西発というのが多いのです。だけど大阪のファッションを見たときにだれも相手にしないのです。

大阪弁といわれている言葉も、実は戦前の大阪の都心の言葉ではないのです。大阪の都心の言葉はもう少しやわらかくて、おっとりしていて、今それが語られているのは芦屋なんです。大阪の呉服問屋がたくさんあった烏のうちの連中が、大阪がだんだん煙の都になり、やがてタンツポになるということを見越して芦屋に引っ越すわけです。その芦屋が今度の地震でかなりやられたわけですが、細雪の世界です。あそこがかつてのホンマの大阪なんです。だから、大阪のファッション、芸能というのは生まれてくるわけですが、すぐは誰も相手にしない。一回東京のフィルターを通すということなんだろうと思います。

それからもうひとつは、1970年代に東京にはたくさんのファッションのマンションメーカーが出来ますよね。マンションの一室で服を作って売る。その時期に大阪は何をいっているかということ、イースタンストップというんです。イースタンというのは東、ストップというのはドイツ語で反物というんです。僕等は、反物を売ってどうするのやと、やっぱり大阪はあかんと言っていたんですが、70年代というミラノがファッション都市化していく時代ですね。ミラノもいってみると反物の集積地だったのですが、勘が良かったのかすぐ隣りにファッションの先端であるフィレンツェがあったのでファッション都市化していきますが、東京の場合には繊維産業というのは桐生くらいしかありません。だけど、そのマンションメーカーが服は情報だということを考えてどーっとやった。その時代に大阪は大失敗をしたんです。

だから吉本も同じ戦略なのではないのですか。東京を通して全国化しようと。吉本というのは、あまり志のある企業じゃなくて、とりあえず儲かったらええという企業でしょ。(笑)

Q. 高田先生の研究チームでハイライフのイメージを将来に向けてという話がありましたが、逆にこのままでいくと銀座はどうなるのかということ、どうお考えですか。

高田)

どうなるんでしょうね。街というのは、急速に変わるともいえるし、そうともいえないでしょ。地方都市へ行ったら本当に変わるんです。ショッピングセンターが郊外に出来た途端に、都心部は空洞化してしまう。東京の場合は、車はあまり使わないでしょ。そうすると、このままいっても例えば都庁が移転してとかいろいろなことが起こって、ちょっと売り上げが減ったとか、何かのことで売り上げが増えたとか。遷都とかそういうドラスティックなことが行われな限り、このまま変わらずにいくんじゃないですかね。

バブル経済が崩壊したことだけじゃなくて、それをちょうどいい機会にしてみんなお酒を飲まなくなっていますね。いい酒をバーでは飲まないですね。昔、僕はバーをやっていたんですが…(笑)。

今どきのバーへ行ったら、こっちが接待しなくてはならないでしょ。だからもっと徹底的にその辺をやったら、客が来るかもしれないですね。僕はカラオケの話をしていましたが、あれと同じで酒場へ行って最後に客がやりたがる遊びは、カウンターの中に入ってサービスを提供することです。(笑) そういう意味でいったら、酒場へ行って女性を接待するというのは正しいことかも知れない(笑)。酒場の進化の形態としては非常に正しいことをやっているんだと。(笑) バーの店全体を貸し出すというのは銀座はけっこうやっていると思いますが、週末なんかは何々会社の何々ビルを貸し出しますと。そこで手作りパーティーをやりますと。そこでカウンターの中に入ってサービスをするのは、だいたいその中で一番偉い人です。「うまいよ」とか言われてね。(笑)

だから、酒場は1975年くらいに変わったと思います。それまでは、泥酔するまで酒は飲むものなんです。泥酔して同僚と喧嘩をして、心をひとつにして、そして働くというのが高度成長期の時代だったんです。今はそういうことはしないですね。

それから帰りの電車の問題もあるわけですよ。要するに車に乗って何万もかかって帰るといふんじゃ…ね。今、それが出来る都市は京都だけです。だいたい3千円以下で帰れます。だから学者連中とか企業の人が酒を飲むんです。そこに坊主が絡んでくるんです。(笑)

日本人というのは、こういう生活をしたいなあというイメージをまだ持ち得ないわけでしょう。そのことに答えを出してくれる歴史的経験もある盛り場の繁華街というのは数少ないけれど、その繁華街の

ひとつが銀座なんじゃないかと思いますね。それは銀座が下町文化とあまりふれなかったからかも知れないし、やっぱりせめぎ合いがあったとも思うんですよ。それがいいものを生み出してきた。生み出さなくてもせめぎ合いがあったというふうに考えてみると、これからの日本の生活者には2つくらい方向があると違いますか。世界の諸民族を見ても街住み民族と田舎がやたら好きな連中と両方いるんですね。アングロサクソンはちょっと考え方が田舎に引っ込みたがるらしいんですよ。ラテン系の人間というのは割合都会に住みたがるんですよ。

アンケート調査ではフランスのバリ、田園地帯に住みたいという言う人が増えているとありましたが、田園型ハイライフと都心型ハイライフの2つがどこかで生み出されてくる。そうすつお、我々の暮らし方というのがちょっと落ち着いてよくなってくると思います。そのうち田園型のライフスタイルというのが銀座からあまり生まれなくて、それよりは都市とうまいこと付き合っていくような生活のスタイルのイメージが、銀座みたいな所で生み出されてくると思います。都市生活者にその価値を提供していく、そういう志を持てる盛り場、繁華街というのは数少ないでしょう。そのことによってプレステージを維持していくことが大事なんじゃないかと思います。べらぼうにものが売れたり、もっと儲かったりということが、起こらない所ですよ。これまで、120年間日本の盛り場商店繁華街の雄としてやってこられた銀座が、もっともうかる方法はないかと、この研究会はやっておられるんじゃない。むしろそうじゃなくて、これから先の日本人にはどういう暮らし方をしていったらいいのかというモデルを実践していける数少ない繁華街なんじゃないかと思います。そういうことは、多分新宿ではあかんのだと思います。

以上
(文中敬称略)



たかだまさとし 1944年生まれ／1968年京都大学理学部卒業／1976年株式会社アーディーアイ入社／1987年愛知学泉大学教授／1992年武庫川女子大学教授、現在に至る／最近の主な著書に、『都市化と食(食の文化フォーラム)』(ドメス出版、1995)、『「新しい旅」の始まり』(PHP研究所、1993)、『情報快樂都市一街を生かす空間美学』(学芸出版社、1991)など。

原風景としての銀座・京橋

島田一郎

クリエイティブディレクター／デザインコンサルタント

はじめに

私の場合は、日常的にデザインという活動をしていますが、銀座についてはそれほど深く考えた事は余りありませんでした。たまたま、この会にお招きいただきまして、これは偶然だったわけですが、私は京橋に生まれて、正確には13年間くらい銀座周辺で育って、いわゆる原風景といいますか、原体験、土地柄としての経験をこの銀座の地域で過ごしたわけです。

その後は、いまは都会ですが代官山という渋谷の隣りにずっと今でも暮らしているわけです。当時は山の手線の目黒から向こうというのは、銀座から見ると山の方でえらい辺鄙なところというイメージが強くあったように思います。

かつての銀座には自然があった

私は、昭和22年の生まれで、ちょうど戦後の復興期の時期で、いわゆる高度経済成長に突入していこうとしていた頃です。20年代というのは戦争に負けて、戦前の価値構造と戦後のGHQがおかれた占領下の日本として、民主教育とか、新しい自由というものの価値構造の新旧が入れ代わっていくような10年間だったという気がします。

戦前の銀座と戦後の銀座とは、非常に大きな分かれ目があるように思います。もちろん戦前の銀座を知る由もありませんが、物心がついてこの辺で暮らしていた時代にどんなことが思い出せるかと考えました。自然、生活、風景などを目を閉じて思い出して、どんなことがあったのかなあと、要するに幼少の頃の生活というのはどんなふうだったのかと考えてみたんです。実は、当時の新旧交代期、20年から30年の中盤、私はまだ子供のころですから、いわゆる大人としての銀座の世界というのはいわかりませんが、子供なりの活動のなかで思い返すと、非常に自然があったと思うんですね。

柳の街路樹とか、掘割とか、そういうものがあって、親水風景といいますか、もちろん都会の中の自然ですが雑草の生えた空き地も結構あったわけです。小さいコウモリが毎日飛んでいて、アブライエコウモリというのですか、よく石を空になげてコウモリをからかう、そういう遊びをしょっちゅうやっていたものです。トンボもいたしごく特殊な環境ではもちろんなかったです。

都会と田舎のコントラスト

—マルチハビテーションの実践—

しかも、まわりは都会のなかの自然ということでは、例えば日比谷公園ですとか、あるいは遠征してお台場とか、浜離宮だとか、それはもう日常的な遊び場だったわけです。

大都会といわれるなかでも、やはり色濃く自然がありましたし、戦後のまもなくのころはまだ開発も極端にすすんでいたわけではないという印象を持っています。大都会の真ん中で育ったとはいえ、なんとなくそういうものが体のなかにあるなという感じがします。

もう一つは、人口と自然、都市と田舎という対比が、子どもの頃にははっきりとあった。夏休みは四万温泉という群馬県の温泉にずっと行かされていまして、千葉に祖父の別荘があって、海といい、山といい非常に近くて、子供のころは結構豊かな暮らしだったと今は思います。そういう意味で、銀座というのは、最も都市化されたイメージをもつ部分と、その普通の暮らしのなかでのメリハリというもの、都市と田舎のようなきわだったコントラストを生活の上でかなり早くからやつていたと思います。一種のマルチハビテーションですね。たまたま祖父が京橋で結構な洋服屋を営んでまして、そういう意味で豊かさの確かにもっていただろうと思うんですが、誰も代をつぎませんで、消滅してしまったわけです。それで原体験だけが残って貧しくなつてしまったんですが。(笑)

ある種の豊かさがそこに存在していた

そして、単に自然の四季感の中にいるだけでなく、クリスマスになるとその飾り付けが行われるというような、きわめて人工的で商業的にとらえられたメリハリのある季節感の中にもいたと思うわけです。これはやはり、田舎で育った場合とは何か原体験的な違いが出てきたと思います。

それから、人で見ると僕のまわりというのは、京橋に残っている商人が多く、私の家なんかはたまたまサラリーマンで異色のほうでして、今でもみんな商い人なわけです。そういう点で、ある意味の豊かさみたいなものはそこに存在していました。

戦後まもなく、いろんな状態が良くないなかでも、例えば僕の体験のなかではモータリゼーションというのがおこっていた。実際のモータリゼーションは、30年代後半から40年代のはじめに入ってからですけれども、第一次マイカーブームが起こってくるんですが、もう小学校に上がったころから、友達と連れだって観音開きのクラウンに乗かって多摩川までお弁当をもってドライブに行くような、そういうスタイルがあったんです。まだ車が珍しい時代に車が普通にあった、そういう環境がもうひとつありました。

それから、日比谷公会堂というのがありまして、じつはお恥ずかしい話ですが、私はヴァイオリンをやっていて、日比谷公会堂のステージに何回もたったことがありまして、今思うと、まったくだめなんですけど、今でいう英才教育とは意味を異にしたいと思いますけど、そういうこともやっていたんですね。父も音楽が好きで、父の話からクラシックの喫茶店の話とか、昔の音楽喫茶というのが出てきます。また、浅草の三社祭りほどではありませんが、むかしは地元でもいわゆる秋祭、夏祭のたぐいがあるって神輿をかついで歩くというようなはっきりした季節感がありました。今は、銀座まつりというかたちですが。

大企業も地元に着していた

当然ながら、紙芝居やさんとか、さまざまな物売り、あさり、シジミ、らお屋さん、あるいはよなきそばなどが京橋で普通だった。今の鹿島建設というのは赤坂にありますが、昔はその八重洲ブックセンターが鹿島建設の本社でした。非常に古いビルで、上に講堂がありまして、あそこで町内会でしょっちゅう映画会をやっていました。ヤクザ映画などとか、白馬童子とか、キューボラのある街だとか、いろいろやりましたね。

結構子供が集まっていたはいろいろとやっていた。大企業も地元密着で距離が近かった。それと、本田技研が私が住んでいたところの裏側にあつて、L型の平面で2階家だったんです。

間違いなく僕の記憶では本田宗一郎さんだつたとおもいますが、僕はあそこに遊びにいった、抱えられて高い高いあやされていた記憶があるんですね。僕の家近くには、いわゆる鹿島とかホンダとかがあつて、それを巻き込んだコミュニティーがあつたと思います。

映画の影響が大きかった

ニュース映画の影響が非常に大きく、ニュース映画でもあれは子供でもみていいということで、しょっちゅうお金を握っては、大人に紛れて観ていたことがある。鍛冶橋なんかにもありましたね。それから、シネマスコープ、帝劇ですかね、3台の映写機で立体的にみえる。そういうものを観た。そういう意味で銀座というと映画の影響はとて大きい。東劇とか、いまも昔ほどではありませんが、「バンビ」だとか「緑の大陸」だとか「ファンタジア」だとかの影響がすごかった。最先端の情報が常に発信されていた。それが当たり前環境にあつたわけです。

映画をみると必ず不二家でソフトクリームを食べる。やはり不二家のソフトクリーム、オリンピックというレストラン、銀座ではこれはやはり外せない思い出です。

銀座の親水風景

なくなりましたが銀座の風景で強烈に残っているのが、親水風景。大根河岸といっていましたけど、いまの警察PRセンターのあるあたりで、そこには貸しボート屋さんがあつて、あそこでちょいちょい遊んでいて、僕の友人が水死しているんですね。踏み外して死んじゃった。そのくらい危険な場所でもあつたけど、楽しい場所でもあつた。

そういう水のある風景というのは、子供心にも大好きな風景でした。牡蛎船がたくさん浮いてましてね、柳と牡蛎船、子供心にこれがイキという概念はわかりませんが、なにかそういう不思議な思いを抱いたものです。

キャバレーの不思議な光景とOSSの匂い

私がまたま育ったところというのは、昔の花街の一角だったんですね。今の八重洲通りの大丸に向かって左側のブロックなんですけど、となりが料亭相模といいまして、実はとんでもないところに住んでいたんですね。野球拳などを覗いてはしかられて、そういうあまりよろしくない環境で私は育った。

そのついでにいうと、子どもの頃よく通る道の途中にキャバレーがあって、のぞけるんです。昔の半地下で、スリット状の窓が換気の為にあってましてね。自然に目がそこについてしまう。怪しげな音楽と、タバコくさい空気とその隙間からピンクや青の照明が漏れてくる。小さな箱の上で軟体女のショーが見えるんです。そんなのをブルブルしながらみていた記憶があります。本当にまかせていました。

後は何といっても、OSS、今の京橋の明治屋が米軍のためのスーパーマーケットになっていて、その強烈な風景と匂い、洋書の、印刷の匂い、トマトやセロリの匂い。猛烈なアメリカというか、西洋のものというか、そこは決定的になにか憧れを植えつけられたところですね。よくそこで、入りたいたいだけはいれないでウジウジしていると、外人が入ってきてサットでていく。よくまぎれこませてもらい雑誌をみたりとか、子供だから大目にみてもらっていましたが、随分そういうことを繰り返していました。

日比谷公園とGHQクリスマス

日比谷公園ではGHQが主催するクリスマスがあって、公園の中に野外音楽堂みたいなものがあったんですね。クリスマスになると、GHQの兵隊さんがあそこに飾り付けをして、昔は信じてしまったんですが、トナカイの櫓に乗って空からサンタクロースが降りてくる。アメリカ人というのは子供には分からないように夢を実現して見せるんですね。昼間みると当然わかったのですが、真っ暗ですから本当に見える。そういうのでえらい感激をして、プレゼントで何をもらったか覚えていませんが、エンターテイメントの原型みたいなものを知った気がします。

こうした記憶が色濃くあります。ある意味では、直接的には銀座と距離が離れていますが、やはり銀座とGHQ、その占領下の日本で、銀座が果たしてきた意味というのが、自分の体験や記憶の中に刻まれていったのかなあという気がします。

釣りの体験と銀座の自然

水ということでは船宿ですね。築地、勝どき橋のたもとに船宿がありまして、父につれられまして船を借りるんですね。櫓をこいで、お台場について釣りをする。黒鯛とか、ハゼを釣りにしよっちゅういってました。

佃大橋、佃の渡し、渡し船というのも強烈に印象が強いですね。なにか銀座、京橋を中心に思い出してみると、こういう記憶は非常に強烈に残っています。

人や生活や、色彩や猥雑な音、色、匂い、それがうまく混ざっているのが銀座での原風景だと思います。日本を代表する都市の中にも自然があって、なおかつ夏休みに山や海に行く、そういうものとの関係のなかで育ってきた。

まちの速度が変わった

こうやって考えてみると、銀座で何が一番変わったかということ、速度みたいなものだと思います。子供としての原体験というのは、やはり子供としても見るスケールがありますが、それを除いたとしても、かつての私の原風景でみると、今この時点で街の速度感というのが極端に変わってしまったという気がするんですね。

これは考え直さないといけないと僕は思うんです。例えば子供の時代ですから、夏休みに、いまでは1ヶ月ですが、すごく長い感じしたんですが、やはり銀座にいてもゆるやかな時間の流れみたいなものをすごく感じていましたね。

それが今は、慌ただしく、せわしない感じで、やっぱり変わった。これは自分が年をとっただけのことではないと思うんですね。世の中の空間や時間の概念というのが変わったんじゃないかと。親水の空間と、空抜きのスカイラインみたいなものが、今は効率優先、コンクリートの表情に変わってしまった。

銀座にはおだやかに流れる時間と空間があった

こうして考えていくと、やはりそこには生活コミュニティーがあったといえます。それが今の銀座を考えると、日常的な生活というのが決定的に抜けちゃったんじゃないかと思います。以前が生活だとすると、今はビジネスでしょうか。かつての感覚でいう、ゆっくりとか、ゆったりとか、たっぷりとか、じっくりとか、しっかりとか、しっとりとか、…、という言葉が銀座にあって何かふさわしいイメージを持っていた。しかし、いまはかなり変わってしまっている。

私の父なんかは、銀座は高級であってほしいという戦前のクラス社会のなかで形成された銀座人というイメージが大事だと思い、またそれが好きでした。新宿人とか池袋人とはまた違うひとつのイメージを形成していたわけだけど、戦後の民主化で新宿も池袋もみんな一緒になって、それが街の速度を拡張したことを含めて平均化してしまったと思います。

ラグジュアリーという語を辞書でひくと贅沢というふうにでていますが、時間と空間がおだやかにながれていく状態、なにか単にリッチというのではなく、物的にも精神的にもある程度ゆとりみたいなもの、即ちラグジュアリー感が、銀座にはあったんだろうと思います。原風景のなかにあるおだやかな銀座というもののイメージが、やっぱり本当はもどってきて欲しいとなんとなく思っていたのかなあと、自分自身で意外なんだけど、そう感じました。銀座に根ざした、ゲストとホスト、ホストとゲストという関係がうまく構築できた方が面白いのではないかと感じます。

上質の大人の街の復活

2年前になりますが、上質の大人の街の復活をめざしてということで、銀座価値会議で私なりの考えをレポートにまとめたものがあります。いま改めて考えてみると、いわゆる銀座スピリットというものを、いろんな人たちがいろんな関わりで持っていると思うんですが、それを伝えて受け継いでいく、伝承と継承を行う装置や仕掛けを設定することが出来たらいいなと改めて思っております。

このレポートで「銀座ヒト・モノ・コト・バ」と書いてありますが、銀座に関するものをいろいろな形で集積し、なおかつやはり銀座に人が生活の場として戻ってくるような環境が、さらにそこにかぶっていけばなおいいのかなと思っています。

新しいかたちの「銀ブラ」の復活

父とたまに話をしてみると、銀座に土着の方がまだたくさんご健在で、そういう方からみるとある種の異人種が流れ込んでくることによる軋轢がまだ残っている様にも思えます。銀座に根ざしていたものがみる銀座と、外から来る人が見る銀座とのぶつかりあいというものがまだ、存在している。何かやはりしっくりこないということがあるようです。

そのあたりを上手くいかせるような仕組み、その為の装置として銀座クラブとか、銀ブラを復活させるしかけ。例えば、昔の銀座ブラは普通の縁日みたいなものだったんですね。いまのように、きれいなお店を楽しく見て歩くということよりも、縁日みたいなのがならんでそこに住んでいる人が散歩に出かけるというようなパターンだったんです。

ですから、新しい銀ブラというのも一つの考え方として当然仕掛けられるだろうし、もう一つはやっぱり実行しなければいけないと思いますが、銀座の新しい意味と魅力を再発見するテキストを是非つくられたらいいなと改めて思いました。

俳句で詠む銀座

今回はあまりきちんと準備ができなかったのですが、銀座のイメージを俳句に詠みました。

「衿立てて颯爽と行く冬銀座」

やっぱり銀座は僕にとっては、颯爽としている存在イメージですよ。いつも颯爽としている。気取ってピッと衿を立てて。颯爽としている。冬だったらコート襟を立てて、というそれが銀座なんですよ。とりあえず私からの話は、これで終わらせていただきます。

—講演終了—

—講演後の質疑と意見交換—

Q. 日本橋の方にも行かれたと思うんですが、その当時の銀座と京橋と日本橋の地域性はどのようにしょうか。

島田)

日本橋の方まで行動が広がったという記憶は、実はないんですが、日本橋というのは三越デパートとか、白木屋とか、そこによくいったんですが、なんとなくおかしいですね、あそこに行くともっと下町という感じがなんとなくありましたね。

だからむしろ、日本橋よりも銀座の方に行動が向きました。日常圏というとせいぜい八丁堀とか、その辺ですね。たまに遠征して勝ちどきや佃、そういう世界ですね。

Q. 当時は、ご自宅から日本橋よりも銀座の方が近距離に感じられたわけですか。

島田)

日本橋よりはるかに銀座の方が近距離ですよ。なぜならば、当時不思議だったんですが、風呂がなかったんですよ。内湯がなくて大黒湯に行っていましたから。子供の感覚でいうと昭和通りを越えると結構遠征という感じがありました。

Q. 島田さんがそこにおられた頃には、もうテレビは始まっていましたか。

島田)

テレビは始まりました。だから、やっぱり商人の家が多いから、だいたい当時テレビありました。うちだけでなく、しょっちゅうよその家に見に行きましたね。そういう時代です。

Q. 以前は、洋服も自分で生地を選んで洋服屋さんに頼んで仕立ててもらっていましたが、男性は今でもそうですが、女性だって同じだった。昔は女性用の洋服を仕立てるお店が銀座にもたくさん並んでいましたが、今では売れないからもうありませんね。

島田)

まさしくそうですね。20年代までは、戦前の商いというのは、家庭側が加工をして、その素材を提供するそれが商いの原則だった。だから、おばあさんとか女性は素材を見るめがしっかりしていた。僕の記憶では、僕の着るものは母がみんなミシンでつくってくれた。既製服を買うというのはかなりあとになってからですね。中学くらいになってからですね。

ミシンは家庭の必需品だった。お嫁入り道具でした。今でも覚えていますよ、シンガー。蛇の目の本社が自分の家の交差点の反対側ですから。

Q. 6才の時に、おじいちゃんが東京へ連れてってやるといわれて、銀座へ初めて連れていってもらった。その時に蛇の目ミシンのネオンを見たのを覚えています。今の話を聞いて、そうだあの時、とネオンを思い出しました。

島田)

だから蛇の目ミシンとか、明治製菓とか、いわゆる銀座、京橋は商業の中心地であり発信地でした。日本中の中心という意識はないんだけど、常にそれがあたりまえという意識が多分あったと思う。僕は幸か不幸か、遠くの親戚がいないわけですよ。だから逆に、田舎の子供達が逆にうらやましくてしょうがなかったわけです。帰るところがあっという間とか。

Q. 銀座にこれから人を住ませる方向で頑張らなければいけないのかということは、ものすごく悩むところなんです。人を住ませるといふことに疑問をもつ人はいますね。例えば丸の内なんていうのは初めからオフィス街として成立した街ですよ。夜間人口というのははじめからほとんどいない。だから街が荒廃しているかという、必ずしもそうではないですね。むしろ整然としています。じゃあ銀座は果たして、人がいなくなっちゃうとダメになっちゃうのか、逆に開き直って、人がいない街としてどうやっていくかを考えるのかを、最近非常に悩んでいます。

島田)

今の銀座に単純に住空間を取り戻すというのは難しいだろうと思います。ただ、銀座を取り巻く周辺の地域というのは、結構人が居住しているし、大川端含めて新しい開発のパターンができています。あの辺を歩いていると、なかなか穴場だなという実感を持ちますね。いわゆる土地の高さが悪い意味で居住費を底上げしているといえますが、居住費が安くなれば、絶対に戻って来るんじゃないかと思っています。

散歩をする距離に銀座があればいい。これからの人達はもっと散歩をするようになると思うんです。僕も散歩が好きで、いい状態で仕事から家に帰って、夜散歩に出る。小一時間そぞろ歩きをして帰ってくる。ヨーロッパの人たちは散歩が好きで、必ず家に帰って散歩をしますね。銀座の周辺環境を考えると、この地にもう一度住まうということは、可能性が非常にあると思うし、そうなれば銀座も変わると思います。

以上

(文中敬称略)



しまだいちろう 1947年生まれ/1969年東海大学工学部建築学科卒業/1970年毎日・DAS学生デザイン賞金賞受賞/GKインダストリアルデザイン研究所を経て、1984年株式会社フォルマ（コミュニケーションデザイン）、1989年株式会社フォルマインターナショナル（スペースデザイン）代表取締役、現在に至る。/日本デザインコンサルタント協会代表幹事、東海大学教養学部デザイン学科非常勤講師

銀座はどのようにして日本橋を抜いたか

藤森照信

東京大学生産技術研究所教授

銀座の地価はあまり分かっていない

日本橋を銀座が抜いたわけですけども、それは何故抜いたか、いつ抜いたかは分からないんですね。実は。いろんな事情を見ているんですがどうもはっきり分からない。

一般にどっかの地区がどっかを抜いたと良くいうんですが、あれはいったいどうやって認識しているんだらうかと。でも抜いたのは間違いない。歴史的にそれをどうやって調べるのかということ、一番いいのは地価なんです。しかし、地価だと意外と銀座は遅れてるんですよ。

問題なのは、銀座の地価が分かっているのはごく一部なんです。ちゃんと面としておさえられているのは、地租改正の時と震災の前後、二度だけなんです。それ以外は地価の大調査やってません。その間に地価というのは税金の基ですから、何度か修正しているはずなんです。資料がない。地租改正の明治11年ぐらい、その時は明治政府初めての税金とるためのきちんとした調査を、日本中でやっています。

銀座は何故抜かれぬのか

震災の時に都市の構造が変わりました。その時大調査をやって、その記録は二つあります。しかし、それ以外は断片的なものでわからないです。

銀座の四丁目が日本橋を抜いたという話は別でございまして、四丁目が抜いたのか、もう少し広い地域で抜いたのか、日本橋三越の角との間だけではちょっと分からない。そういう、いつ抜いたのか分からないということ、何故抜いたのかと、もう一つですね、何故銀座は抜かれぬのかということ。もし銀座が抜かれたとしたら、研究すべきは、何故抜かれたかです。

そのへんのことを真面目に考えたんですけどよくわからない。それで、永久に抜かれぬかも知れない。しかし、今まで抜かれそうになったことが何度かあるんですよ。一時新宿高野の前が鳩居堂の前を抜いたでしょう。それがまた戻った。

銀座は客単価が高い

渋谷は、今ががん若い人で流行っているけどお金がおちない。人だらけで。おそらくいろんな風俗的というか、賑わうことだけ言うと、銀座は何度もいろんな所に抜かれてはいるけれども、商店や小売り地帯としてみると、依然として相変わらず一番高い客単価です。あと、店がつぶれないというのも異様なことですね。とにかく銀座でちゃんと一応店をはったらいざ、もうつぶれない。

抜かれる街と抜かれぬ街

この前資生堂の人と話して、銀座のお店がつぶれた話し知ってますかと言ったら、そういえばつぶれませんか。実は僕はちょっとそのことに興味を持っています。要するに時代が封建経済から資本主義に変わるといって、とんでもない変化、そういうことがないと、小売りの商店街というのは都市の中では変わらないんじゃないかと思えます。上はいつまでも上、という気がちよとしてるんです。それはどういうことかと言うと、例えば、江戸時代が250年続いたでしょう。日本橋はその間一度もなかった。いつも上なんです。近代になってから、銀座が日本橋を抜いたでしょう。それからもうずっと120年ぐらい銀座が上なんです。なにか、都市の中の地域によってそういう抜かれぬ場所というのがあつた。しかし、浅草なんかうんと良かったけど駄目になつちゃう。

大都市の商店街の力関係は変わらない

浅草と銀座というのは基本的に性格ちがうですよ。浅草というのは一つの遊興地区というか、要するに昔はすぐ近くに遊廓があったり、映画街があったり、演芸があったり、そういうアミューズメントセンターみたいな感じでしょう。繁華街と一概にいうけどアミューズメントセンター的な所はほとんど抜かれている。だけど、物を売っている所は、明治に銀座がトップになって、戦後に新宿は追い上げたけど結局抜けない。渋谷も出たけども抜けない、それからあと六本木とかいろいろ出ますけども、それも抜けない。

なんか物を売る場所、商店街というのは、大都市に限るんですが、その中では力関係は変わらないんじゃないかという気はしてるんです。

商店は構造的に安定している

街の盛衰を見る時、商売ごとと見ていくと、例えばオフィスビルも抜いたり抜かれたりする関係になっているのかというと、は変わってないことが多い。丸の内のビルは変わらな。新宿の西口ができましたけど、丸の内にはかなわない。今度は各地にいっぱい副都心ができてますけど、どの副都心も新宿にはかなわないですね。オフィスビルというのもそういう構造的な安定をしているものかもしれない。商店というの、構造的に安定しているかもしれない。そう考えてみると、変わるものと変わらないものというのがあるのかなあという気がしますね。

銀座レンガ街計画がなくても銀座は日本橋を抜いた

銀座というのは僕にとって、抜いたり抜かれたりという都市の生態を考える上で非常に興味のあるところで、色々資料もあるし、いろんな出来事も面白い。今日のテーマは、どうやって銀座が日本橋を抜いたかということです。

銀座のレンガ街計画は明治6年にあの大通りができで、10年にだいたい終わるんです。銀座のレンガ街計画こそが銀座が日本橋を抜いた契機であると高く評価してきたわけです。僕は都市計画の歴史をやったからそう思うわけですが、最近思うのは、もしかしてあの計画がなくても抜いたかも知れないという気がしています。

日本橋が江戸の中心にあった理由

何故日本橋に江戸時代の中心があったかということ、東海道と奥州街道、要するに、主な5街道が全部ここにきてたわけです。すぐそばに人工的に整備した、日本橋川という川が水運の動脈として来てるわけです。すなわち、一番いい交通が全部ここに集まってきたわけです。

明治10年の地租改正の時に地価のものすごい調査しました。これは意外と知られていないことですが、なぜ地価を決めたかということ、地価を決めないと税金をとれないわけですよ。税金の基礎ですから地価を決めたわけです。文句があっちゃいけないわけです。もう蜂の巣。それをどうやって決めたかということ調べたら、非常におもしろいです。

明治11年の東京の地価の決め方

当時、街の不動産屋さんみたいな斡旋屋さんがいたらしい。まあ、店をもってたんじゃないと思うけど、ブローカーみたいな人達を集めてきて、東京中で地価が一番高いのはどこだと聞くわけですよ。そうするとね、全員が魚河岸ですというわけ。ここに一等とつけるわけです。一等地といういいかたするわけです。つまり、日本の一番地価が高いのが魚河岸です。ここに一等とつけるわけです。次に区ごとに分けるわけですね。日本橋区、京橋区、そこの一等をつけるわけです。

次に区と区の接線の値段決めるわけです。ここはいくらであるか。東京中の業者を集めているわけですから、実績を言うわけです。俺はあそこを幾らで売ったと、こういうことを調べるわけです。次に隣り調べるわけです。接点がわかって隣が何等かということが分かれば、基本的にカーブの率が分かります。これを相当丁寧にやる。その結果、当然変な値段があるわけで、それでどうもおかしいと調整していくんです。全体にならしていくんですね。

これはだから役所と不動産屋さんが、ルールを作っておさえながら特別変なのがあったらチェックして、理由があれば認めるし、無い場合はちゃんと下げる。売買実績はここ何十年もない場合があるわけです。その場合はまわりの値段から判断する。こうして一筆ごとに等級を決めるわけです。それをした後、お前の土地は地価いくらだというわけですね。それに応じて当時3%ぐらいですが、税金を払いな

さい。不服のあるやつは言いなさいと。不服がある場合は土地を全部買うから、とって全部買っちゃう。買って払い下げるわけです。競売にかけられるわけです。そうすると、実は自分の土地が坪10万円だということ知ってるけど、10万じゃいやだ、5万だというやつがいる。そいつは自分の土地が一旦競売にかけられるとやっぱり10万で買う。そうするより仕方ないから。(笑)それで、そうことを2度、3度やればいいの。そうすると不当なことを言うと競売にかけられて、本当にちょっと高めに自分が買いとらなきゃいけない。他の人が坪10万だという。俺は11万で買うといわなければいけない。お金を払うわけじゃないですが。それで11万の地価が決まるわけです。

要するに一番高いところにいっちゃうわけですよ。非常に知恵のある方法ですね。よくそんなことを考えたと思います。結局、東京中の土地の地価を全員が納得する。その地図が明治11年に書かれて残ってるんですけど、一筆ごとに値段を書いた地図があるんです。これはものすごい。よくあんなもの出したと思いますね。今は、竹橋の都の公文書館にあります。

道と水路の交点の地価が最も高い

この当時の地価のどこが高いかをだいたい抑えてみたところ、いろいろ面白いこと分りました。日本橋についていいますと、大通りがあって、日本橋のところに川が流れていて、魚河岸があります。当時の地価は、ちょうど魚河岸の所だけ山になっているんです。あとは基本的には道路の交差点を中心とする十字型の等高線になっています。そして銀座の方へ行きますと、京橋の川のあたりがまた面白くて、この橋のまわりが高い。基本的には例外を除くと、大きな通りの交点が高くなっていますが、それよりもっと高いのは、道と水路の交点なんです。

これは、水運で荷物を橋にあげたことの、むしろ名残というべきですが、なぜかといいますと、実際には本当に橋の所からあげているのではないのですが、でも恐らく本当の初期の名残だと思います。本当の初期は橋のたもとであげて、そこに人が集まりますから。なんかそういう封建時代の、水路で運んできて、荷物をあげて、人は地上を歩いているというところの名残だと思います。

日本橋は水運の時代の中心だった

この構造の重要ポイントは水運です。モノというのは基本的に100%水運で運んでいましたから、まだ水運のパワーがこの辺の土地の高さ、魚河岸の地価の高さに出ているわけです。要するに、基本的に日本橋というのは水運の時代の中心だったというわけです。

一つの都市が水運と陸運とどっちを中心としているか、これは橋の形を見ればわかります。橋の真ん中がアーチ状に上がっていた時は水運の時代なんです。船が通っていたわけですから。

日本橋は車があがらなくて、障害物競争みたいな橋だったわけです。なんであだったかという下を船が通っていたからです。要するに橋を見れば分かるわけです。あくまで古い時代は水運中心で、陸運というのは中心ではないわけです。

銀座が繁栄した本当の理由

明治以降の動き見ますと、明治6年に新橋—横浜間鉄道が開かれるわけです。そして明治元年位に、築地の居留地が開かれるわけです。そして、築地に横浜からの人と物がやって来ます。築地は国際港じゃなかったわけですが、横浜国際港に入った物がここに船で運ばれてくる。あるいは人の場合は、横浜経由のルートで来るわけです。

こうやって見ますと、誰が見ても実は鉄道とか新しい貿易や交易のための船、要するに、近代の中心の交通は全部築地と新橋に来ているわけです。そしてすぐ近くに銀座があるわけです。ということは、銀座の計画があってもなくても、恐らく日本橋から銀座へと東京の中心がひっぱられたらと思うます。銀座の近辺に、新しい人と物の交通の基地が来るわけです。ですから、銀座が繁栄した一番大きな原因は、銀座レンガ街ではなくて築地の居住地と新橋の駅があったということ、明治以降の交通の収束地にあったということ、これが一番大きな理由じゃないかと最近考え直しています。

銀座の繁栄の原因は地の利の良さにある

このように東京という都市全体の駅前だったわけですから、ほっといてもだんだん繁栄してきたとは思いますが。しかし、その場合には虫食い状に開発が行われてきてますから、今のような綺麗な銀座にはならなかったと思います。

おまけに水運から陸運に変わるわけです。国際貿易を別にして、鉄道が物流の中心になるわけです。

要するに、もう日本橋は交通上駄目だと言わざるを得ない。この方が基本だったんじゃないかと思えます。それですね、幸か不幸かその駅前が燃えるわけですね。これも丁度いい具合に誰か火をつけたのかと思うくらいいいタイミングでパーッと燃えるわけです。それが明治の5年です。

非常に地の利があるところに一気に燃えてしまって、今日の銀座の新しい都市を作ったわけです。まず、やはり交通の便が非常に良かったということが、実は銀座の基本にあるということはちゃんと抑えておかないといけないという気がします。

銀座が火事で燃えた後、この銀座を新しい、燃えなくて、ヨーロッパ風の街にしよう決めます。これは3日で決めてます。3日後に法令がでてますから。(笑)まだ内閣制度ない時代ですね。

井上馨が書いてるんですが、燃えた翌日に、太政官に行ったら大久保利通などみんなヨーロッパに行ってたんですね。留守政府と言われた時期で、ほとんど残ったのは絶対外国に行きたくないという人達です。そこで燃えたんで新しい街を作りたいと言ったら、西郷さんが、いいよっていったっていうんですね。(笑)西郷さんがいいよといえば代表ですから。すぐ布告を出すわけです。その布告が要するに、銀座の土地は明日から政府のものでするという。銀座の土地を政府が没収しちゃうわけです。区画整理を終わった後、欲しい人には払い戻す。その時に、要するに減分になった分のお金は保障するという、そういう形をとるわけです。

銀座レンガ街となった銀座

そういうことで銀座の街を作っていくんですが、この街のどこがすばらしかったかということは、僕は何度も書いてるんですが、まず、歩道と車道が分かれていた。これは、日本で最初のことで。それだけ広い道をとったわけですが、銀座の道幅というのは今でもウォートルスというイギリス人が決めたままで、ですから当時では非常に広くて、広場のような感じになった。歩道は今より1、2メートル広かったんじゃないでしょうかね。

歩道と車道を分けたのは非常にうまいことで、のんびり、ゆっくりできるわけです。それから後、馬車鉄道が入ってくるわけですけど、その時歩道と車道をわけてあるということが良かったわけですね。並木道作るとか、夜も買物できるようにガス灯が入るとか。それからアーケード作るんですが、強制的に各商店に土地を提供させて、前通りをアーケードにしちゃうんです。そういうアーケードがありますから、雨の日にそこを歩けるわけです。いってみればそこは理想的な商店街ですね。

結局、現在の日本の商店街の手法はこの時に銀座で確立された商店の在り方から、全然発展してないですね。歩道と車道を分けましょう。街路樹を植えましょう。灯をつけましょう。雨のときいいように庇をだしましょう。これ全部やってしまったわけです。だからもう近代の商店街の在り方は全部銀座で出ちゃうわけです。

銀座レンガ街ができて10年間はひどかった

しかし、当時いっぱい空き家出ちゃうわけです。明治10年に完成しますが、この段階で空き家が相当出て、政府の中でもものすごく反省があったわけです。あれはとんでもない計画だという。当時の国家予算の4%も使っていますから。

銀座は得したわけですね。要するに。明治10年でできたとき、これはどん底なんでもうひどくて。政府が作って元の持ち主に払い下げようとしたけど、持ち主はそんな高いやつはいらないって出て行っちゃったりして。空き家は全部、政府がしょいこむんです。明治10年で銀座は空き家だけで、失敗って言われたんですが、明治20年、日本の資本主義がテイクオフする時期ですが、この明治20年に空き家は全部埋まるんです。

ですから、銀座は10年間は確かにひどかった。空き家だらけだった。けども、明治20年から埋まっております。明治20年に埋まった段階で、内容的には日本橋を抜いたんじゃないかと思えます。

銀座の空き家を新聞社が埋めた

明治10年に出来たとき膨大な空き家があったんですが、そこを何が埋めていったのかというと、一つに新聞社があります。東京の新聞社は全部銀座ですから。

それから、近代商品を扱う店がここにどっと出てくるわけです。あんぱんを売るとか、時計を売るとかですね、それからレンズや眼鏡売るとかですね。いわゆるパーバーというヨーロッパ風の床屋さん、そういう近代的な商品やサービスを売る。日本橋は例えば江戸時代からの海苔屋さんとか、いろんな昔からの商品を売る中心なんです、そういうのを買う人は相変わらずそこにいます。そうじゃな

い新しい物を売る連中が空き家になっているところにドーッと入ってくるわけです。日本橋にはほとんどいかないわけなんです。こういう連中が何故入ってきたかという、これがやはりウォートルスの計画のおかげで当時してみれば夢のような商店街が出来たわけです。おまけにヨーロッパ風なわけです。丁度この時期が文明開化ですから、銀座に行くとヨーロッパ風の新しい、街がある。そこで皆おのほりさんが集まるわけですね。そこに来て皆買って行くわけです。

ということで、明治20年の段階で、銀座は内容的に日本橋を抜いていると思います。実際に、地価とかに反映されるにはもう少し時間がかかりますが。この段階で内容的には抜いたんじゃないかと思えます。

新しい街の物珍しさがあった

後もう一つ非常に大きかったのは、新しい街ができちゃったわけです。今でもよくあることなんですけど、そういうところには人が行くんですよ。僕はあまりそういうことないんですけど。

例えば、関西国際空港が出来た。あれは何もないところなんですけども、出来てしばらくしてから大阪から深夜タクシーに乗ったらがががん車が行ってるんですよ、あっちへ。おお開空ってすごいなと思っただけですね、途中で道が見学者用と分かれていて乗る人用の方は僕の車だけだった。淋しいくらいどこか連れていかれるんじゃないかと。僕は新しい施設が出来たから行くという趣味がないもんですからびっくりしたんです。

要するに、みんな物珍しくてワイワイきてるんです。そこでみんなちょこちょこ買ったりしてるわけです。それで銀座もそういう状態だったわけです。なんか訳わかんないけどおもしろいの出来たから一寸行ってみようかということで、ワイワイ人が来るわけです。そういううわついた熱気があって、それが結局次につながって行くんですね。

それから、新しいもの売ってるわけですね。ここでは、錦絵がいっぱいかけられるわけです。日本橋を書いた浮世絵というのは江戸時代で、明治以降になると錦絵というのは全部銀座なんです。当然新しいですから。銀座の錦絵というと今でいう週刊誌のピアみたいなものですから、上京した人が錦絵を持って帰るわけです。要するに日本中に銀座って面白い町ができたよって、だーっと広まるわけです。それを見た人達があこがれて来るという循環があった。

レンガ街は現在の街づくりに通じている

現在新しい街を開発しますね。そうすると、必ずやることは新しい店を入れるとか、新聞を使ってじゃんじゃん宣伝するとか。当然、前よりちょっと高い素材を使って、ちょっと有名な建築家がやったりするということ、つまり現在の商店街の開発で行っていることが、全部銀座レンガ街で行われるんですね。

これはそういうことを考えた人がいたんじゃないかと、やってみたらそうなったということなんです。とにかく資本主義がなんたるかを誰も知らない時期ですから、今だったらこういうことをやりますけどね。電通も博報堂もありませんし、誰もそういうことがよく分からない時期にこれが起きたんですよ。

だから、銀座のレンガ街ができたときに、都市計画を専門に考える学者がいて、その成功の痕跡をきちっと分析したら、その後100年におよぶ日本の新しい街を作っていく時のやり口が分かったんじゃないかと思えます。

銀座レンガ街を計画実施の本当の理由

しかし、残念ながら誰かがちゃんと見抜いてやっていたわけでもないし、むしろめちゃくちゃな情熱でやってしまったわけでした。井上馨は晩年に座談会で答えてまして、なんでそんなとんでもないことやったんですか、という質問に対して「明日の命がまだわからなかった。」といっている。ようするに、明治10年の前で革命後5年なんですよ。その5年後に内乱が控えているんです。革命の最中で、自分たちの仲間が山ほど殺されているわけです。さらに5年後、西郷とか大勢死ぬわけです。要するに明日の命がわからない時代だったから、やりたいと思ったことはすぐやるようにしたという。

とにかく井上馨という人は面白い人で、伊藤博文と井上馨でイギリスに留学しようとするわけです。上海まで行って結局それでころっと変わるんですね。上海のヨーロッパの勢力を見てこんな所と戦争やるわけいかないと、早く日本もヨーロッパ化しないといかんと。慌てて日本に帰ってきているんですね。

井上馨はそういう、非常に目鼻のきいたというか、新しいことへの感覚がよかった。井上馨は江戸時代の名前が「もんた」というんですよ。なぜもんたというか、毛利の殿様がつけたというんですが、と

にかく井上馨は町の中の面白いことをいっぱい仕入れてきては殿様にしゃべって、殿様がいろいろお前はいっぱい聞いてくるって、一種のジャーナリストですね。(笑)それで、「聞多」とつけたと。井上薫のそういう聞多的才覚が銀座を生んでいったんです。今から見ると、銀座レンガ街というのは都市の構造的なことから、作りの新しさ、商売のこと、ジャーナリズムのこと、全部うまくいったと言っていいんじゃないかと思います。

銀座の街のモデルについて

銀座の街のモデル問題というのは、僕とマルクス主義系の学者たちの間で、若干の論議がございます。マルクス主義系の経済学者で石塚裕道先生も銀座の歴史を研究しているんですね。彼は、半植民地的都市というんですね。マルクス主義は、当時の日本の明治というのは半植民地的状況というに規定するわけです。石塚先生は当時のアジアは大きくその枠組みの中にあるというわけですね。そして、日本も例外じゃないと。そうした中で、銀座が半植民地的状況だったという。銀座が半植民地的状況だと、そこまでの話か。石塚先生の理由はですね、銀座のスタイルはインドネシアとかイギリスの植民地のスタイルであってそれを持ってきたものであると。点々と大帝国が出ていった先でつくってきたスタイル、そのスタイルが銀座であるという。それは、目に見える形で半植民地主義だというわけなんですよ。

僕はこれに結構危機感覚えてるんですよ。銀座が半植民地の象徴だと思ったら、その後の銀座はどうなるという、これはなんとかしなければいかんと一生懸命考えた。誠に困ったことに銀座煉瓦街計画を立てたウォートルスという男がですね、それこそ植民地建設の代表者であるということなんです。アイルランドで生まれて、まず今分かっている限りでは、香港に造幣局にくるんです。それがどうも途中でやめちゃって、それから長崎に来まして、長崎の居留地の仕事、グラバーの仕事なんかをやって、それで薩摩藩に頼まれて仕事をして明治政府とつながって銀座を作るわけです。銀座が終わった後上海に行って、上海の建築家として上海の大英帝国が作り上げる植民地としてつくるわけです。その後コロラドにいてアメリカの銀山開発をやるわけですね。このように、ほとんど大英帝国の世界植民地化の先兵的な技師だったわけですよ。それで当然石塚先生はそう言っているわけです。

銀座のスタイルは東南アジアから来たものではない

そこで、なんとか半植民地の都市計画じゃないということをお話します。性格としては植民地都市じゃないんだけど、ただマルクス主義立場でいくと当時は日本は半植民地化であったということがあって、石塚先生の言い方というのは全体のおさえて突然デザインと結びついて、いきなり銀座は半植民地だと言われてるわけですね。

が、なぜ半植民地的かということについてお話します。東南アジアの場合、商店街が二階建てになるとアーケードが付きます。歩廊がつくんです。さらにガス灯がついて、道を馬車が走って歩道がつくんです。柱がずっとなっています。これはシンガポールやだいたい基本的に東南アジア、植民地都市の街の作り方なんです。歩廊がついている。ラッフルズと言うシンガポールを作った人が歩廊をつけるという命令を出して、それが東南アジアに広がったという説もありますが、ある時期から歩廊が東南アジアに広がるんです。その歩廊はどうなっているかという、二階建てで出るんです。二階の部分室内として使っちゃうというわけです。そして、一階部分をみんなが歩けるようにする。

しかし、銀座は違うわけですよ。歩廊だけ出ていて2階部分は室内としては使っていないんです。これは、相当大事なことです。銀座では2階部分を、テラスみたいにしているんですが、これはベランダといいます。このように張り出した所というのは2つ性格がございます。1つは南方のアジアで強い日差しを防ぎ風通ししている。ここで食事をしたり、仕事するために作られているところをベランダといいます。もう1つ見かけでこういうものを作るわけです。ギリシャの神殿がそうですが、柱がついて、その下が廊下みたいになっているわけです。要するに美学的なことなわけです。一方ベランダというのは実用性なんです。

銀座のアーチが本当に東南アジアと同じ暑さの対策として生まれたなら、二階までベランダを出さないといけないわけです。しかし、銀座は二階は出してない。明らかに、一階を通るお客さんだけのためのアーケードということがわかるわけです。東南アジアとは明らかに違うわけです。

銀座レンガ街とリーゼントストリートの類似性

それでは銀座の手法は何かという、これはウォートルスが来日するよりも大分前ですが、イギリスであるひとつのやり方が始まります。イギリスのネオクラシズムといわれる18世紀のデザインの中で始

まりますが、柱を並べるわけです。この列柱はギリシャを理想とした、デザイン的に美しいということと、雨の日にお客さんが通るためとの2つからこれが生まれます。18世紀のデザインです。これがロンドンのリーゼントストリートのデザインです。今のリーゼントストリートはこれをとっちゃったわけですが、リーゼントストリートというのはロンドン1の目抜き通りです。

ウォートルスはロンドンにいたはずですが、アイルランドの人ですから、ロンドンにはしょっちゅう来てるでしょうし、お兄さんはロンドンの学校を出てるそうですから。当時のロンドンをよく知ってるんです。リーゼントストリートはイギリスの最もオーソドックスな商店街です。

現在リーゼントストリートは歩廊をとったんですが、温泉地で有名なバースというところにまだ当時のやつがついています。それを見るとわかりますが、ほとんど銀座なんですね。ですから、基本的には銀座のスタイルはシンガポールなんかの東南アジアから来たものじゃないです。あくまでもリーゼントストリートから来たものです。

一階だけをベランダをとるかアーケードを出して、二階をテラスみたいにするというのは、当時はリーゼントストリートしかございませんから、これはあくまで銀座のスタイルというのは東南アジアのものではなくて、むしろロンドンから直接来たものであると考えられるわけです。ウォートルス自身は恐らくアイルランド、ロンドン、そして香港、上海、長崎と来るわけですけども、その東南アジア的、香港で見てきたものじゃなくて、むしろ銀座の開発にあたっては直接ロンドンのやり方を持ってきたわけです。それで今、銀座は半植民地主義的だということが間違いだろうといえて、本当に安心しております。

—講演終了—

—講演後の質問・意見—

Q. 銀座では、レンガ街の創設者は時の知事である由利公正だと思って、銀座に記念碑までつくっていませんが…。

藤森)

僕が調べる前まではそうでしたよ。学者もそう書いてましたから。「俺がつくった」ということが、由利公正伝にががんと出て来るんです。だから、当然そう思いますよ。そのころは公文書がまだ整理されてない頃です。僕もそう思っていた。ただ、それで公文書調べ始めましたら、やっぱり変なこといっぱい出てくるんですよ。例えば、決定的だと思ったのは、三島通庸が当時でいう副知事か局長で、由利の下にいました。渋沢栄一が井上馨にあてて書いた公文書の中に、今日銀座のレンガ街をつくるための打合せを三島としたと。その時に三島さんはほやいているんですね。要するに、レンガにすることについては由利はいいと言ったが、道を広げることについては絶対反対だと。それで、自分がこれから何とか道を広げることについて説得するつもりだということを言っているんですよ。それでもう間違いのないなという気がしました。

実は、井上馨の伝記があるんですが、その中で井上はこう言っているわけです。由利の話は全然出てこない。火事があったと。当時自分たちは築地にいて、大隈重信とかもその下にいて、それで火事になったからこれはそのままじゃいかんと、新しい銀座作るためには要するにヨーロッパ風の燃えない街を作らなきゃいかんということで、太政官にいつておれが通したんだと言っている。

それ以降の動き見ますとね、当時、銀座をやる都の側には権限はないんです。あくまで、太政官にありまして、都は実行機関なんです。それが途中からごっちゃになった。大蔵省が実際の計画をたてて、実務でやっていくのは都なんです。だからその、そもそも都知事の由利がリードする権限はないんです。あくまで大蔵省が主導権を持っていながら、どうやるかというのを由利にいちいち、こうやるけどどう、と聞く。由利がいやだといえれば説得してやらせる。なぜかというとお金の問題がありまして、都は技術部門を持ってないんです。今の建設省に当たるのは、当時は大蔵省にありました。そこにウォートルスも入っているわけです。

それから三島が後の明治20年頃の市区改正委員会の中での発言でやっぱり言ってるんですね、由利が道を広げるなと困ったと。自分が強引に広げさせたんだ、ということ言っている。ですから、三島は二度言っているわけですよ。同時代と十数年してから。これはもうまず間違いなくて、由利さんはむしろレンガ街計画を反対したんですね。

それでは何故由利が反対したのか。それは、都市作りと関係ないんじゃないかと思うんですね。なぜ銀座の再建に渋沢栄一がものすごく力を入れたかということ、当時渋沢栄一のいろんな建言書を見ますと、街づくりに彼は本当に関心があるんじゃない。やはり経済家なんです。街づくりをするその時の、いわ

ゆる経済体制をどうするか。つまりあの街をどういってお金の流れで再建していくかということに興味があったんです。当たり前ですけどね、大蔵省ですから。彼はそれで考えて結局つぶれるんですが、要するにですね、東京都には町奉行所から引き継いだ膨大なお金があるんです。東京都といっても官がもってるわけじゃないです。財団みたいにして持ってるんです。それを誰が握っているかということ、まだだれが握るかはっきりしないわけです。それは奉行所が江戸が飢饉になった時の用意のために町民たちから集めていたわけです。だから江戸幕府も使いませんでしたし、新政府も手をつけられないんです。自分たちの税金じゃない。保険金。それが膨大なものだった。結局それで一橋大学を作るとか、それから東京ガス作るわけです。市民のためになる。実はあまり注目されていない大事ポイントですが、渋沢栄一というのは経済家です、由利公正も経済家。両方の関心は、街をどうするかということよりも、街をつくらせたら、そのお金をどう動かすかということなんです。

今で言ったら何兆円です。それが手つかずにあるわけですね。どう使っていくかまだ決まっていなかった。当時、町会所というのがありましてね、町人組織がずっと続いてまして、これは東京の商工会議所にずっと続くわけですが、もちろん渋沢さんもそれに関係してまして、由利も関係してる。渋沢はそのお金を原資として、建設会社を作って、建設会社が投資して回収し、投資して回収する、そうして銀座の街づくりをしようという。つまり銀座のディベロップメントをやるようとしているわけです。資金として彼はそれを使いたいわけです。由利はそれを元手に銀行を作ろうとしている。由利はその銀行で、何をしようとしたかはっきりしないけど、着実にそれを作ろうとした。場所まで考えていた。彼は府知事でしたから、それを指導したわけです。

結局、その辺の決着がつかないうちに、由利は洋行を命じられるわけです。この洋行は明らかに井上がやらせたわけです。突然洋行を命じられている間に首を切られるわけだから。切られてしまったものだから由利がやろうとした銀行はつぶれて、そのお金で銀座でガス灯をつけるとか、一橋大学を作るとか、これは全部渋沢のやりたいことです。銀座レンガ街そのものには、買取とか土地の建物には使えなかった。ガス灯に全部使ってしまった。ですからそれを考えると基本的には井上グループが基本的にやっていたといつてまず間違いはない。ただその背後にはですね、そういう経済的なことが実はあったというわけです。

Q. 鉄道を引いたときに、新橋を貫いて日本橋の方までもっと伸ばすという考えはなかったのでしょうか。

藤森)

あの当時の段階では、むしろヨーロッパ型の考えで、ヨーロッパでは都市の中に入れないでしょ。ただ街と街をつなぐだけ。むしろ鉄道ををちゃんと通そうというのは、明治20年代になってからの計画ですね。その段階でもまだ通すなという意見も結構あった。通すと街の中がぐじょぐじょなるからといって。街中を突き刺すようになるから。

Q. 明治10年から20年にかけて、銀座の土地を都に払下げをするわけですね。そしてまた商人がその土地を買うときに、通常の払い下げ価格を普通の商人が手に入れるぐらいに、都が下げたということありますか。

藤森)

下げています。それは記録があります。というのは、都が空き家を持っているわけです。払下げ名簿がずっとありまして、それは全部わかります。ちょっと下げます。毎年、年報というの出すわけですよ。泣いてますよ。赤字赤字で。

Q. 日本橋が銀座の商店街を意識しだすのはいつ頃でしょうか。

藤森)

僕の感じでは最後まで意識しなかったんじゃないかと思います。というのは、1つは商種の問題があるわけですね。競合するものが出てきたわけじゃないんです。日本橋にあった勢力が扱っている商品が全体として地盤沈下していくわけで、別に銀座の売上げに日本橋の売上げが負けるわけじゃないわけですね。呉服屋さんも負けないでしょう。三越はトップですし、小伝馬町とかあいうところにあった海産物問屋、特に日本の海産物関係というのは築地に移るまでは相変わらず日本橋だった。だから相対

的には負けますけども、別に日本橋の方がどんどん落ちてきたわけじゃないですから、日本橋の方もちゃんと伸びていますから、ただ、銀座ののびるのがうんと早いというだけで。だから、勝った負けたなんていう意識は持っていないですね。ただ、注目されなかったというのは間違いないですね。

むしろ、銀座ができたことで打撃を受けたのは、もう少し周辺にあった小売りの店や人形町のあたりですね。

Q. 何故銀座は抜かれないのか、というあたりの先生のお話で、交通の要所になっている、新しい商品の流入、パブリシティの手法とかいろいろとあげられていましたが、今では同じような条件の街があると思いますが、確かに銀座を抜けては思えないのですか。

藤森)

僕が思うには、銀座は資本主義に最もふさわしい形で初めにすごい投資がされてインフラがつくられて、それ以降常に銀座というのは色々な投資がされている。一つの街の相対の魅力というのは、投資されたお金と情熱の積分みたいなものじゃないかという気がしてね。それはやっぱり明治維新、封建社会から近代社会になったというほどの変化がない限り、ないんじゃないかと思うわけです。

それは例えば、京都の四条河原町通り。要するにちょっと不便なところなんです。京都駅前ではないし、阪急がきているだけ。でも相変わらず、祇園があって、先斗町があって、河原町の踊りがあってあそこが繁華街で。

僕が思うのは、積分されたものを越えるだけの投資というのは本当に大変なんだなと。結局、日本橋のパワーというのは江戸時代の250年のあそこに蓄積があったわけですよ。これを銀座は明治政府が最初に国家予算の4%注いで作り、それ以降ずっとやってきて、それで日本橋を抜くだけだね。

ただ、田舎のことを考えると、やっぱり交通だなという気もする。交通かなというと、それで全て決まるのは淋しい気もする。今も銀座がいいのは歩く人達のためのものだから良いのですが、これが本当にアメリカみたいに車社会にだったらどうかかわからないですね。

以上
(文中敬称略)



ふじもりてるのふ 1946年長野県生まれ/1989年東京大学工学系研究科修了/1980年学位取得/1982年東京大学生産技術研究所講師/1985年東京大学助教授/1996年東京大学教授、国際・産学共同研究センター、兼務生産技術研究所、現在に至る/路上観察学会主催/最近の主な著書に「全調査アジア近代都市と建築」藤森監修・執筆、大成建設(株)刊(1996)/「日本の近代建築(上)(下)」岩波新書(1995)/「日本近代美術と西洋」筑摩書房(1993)